

# アオアシシギ

*Tringa nebularia*

シギ科・旅鳥



アオアシシギ

(イラスト：タカダヒロキ)

## 名前の由来

足(脚)の色が緑青色のシギであることから由来するという。「シギ」は「騒ぎ(さやぎ)」から来ているといい(新井白石、大言海)シギの羽音からではないかと言う。漢字名：青脚鶺鴒

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)35cm。上面は濃い灰色で腰は三角形に白い。足は緑青色。

「チョーチョーチョー」と3声で鳴く。くちばしが長く上に少し反っている。

## 生息環境・分布

干潟、水田、沼地、川岸などに生息する。十勝には4~5月、8~10月に旅鳥として飛来する。

**分布：**ユーラシア大陸の高緯度地方で広く繁殖。冬にはアフリカ大陸中南部からインド、東南アジア、ニューギニア、オーストラリアにかけて過ごす。

日本には旅鳥として春・秋に河口部や海岸近くの湖沼に渡

## 類似種と見分け方

カラフトアオアシシギ、コアオアシシギ。

カラフトアオアシシギの足は黄色くて、くちばしは真っ直ぐで基部が淡紅色。コアオアシシギのくちばしは真っ直ぐで反っていない。

## 他生物との関わり

砂泥地に生息する底生動物を食べる。

## 食性

小魚、水生昆虫、甲殻類、貝類、カエルのオタマジャクシ

## 興味深い話

■くちばしが長く上に少し反ってピンセットのようになっていて、泥の中の底生動物を食べるのに適した形をしてい

## 配慮事項

る。餌となる底生動物が生息する干潟などの浅い水域のある砂泥地が必要。渡りの中継地としても重要。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				■	■			■	■	■		
ユーラシア高緯度(繁殖期)				■	■	■	■	■	■			
東南アジア他(越冬期)	■	■	■	■							■	■

## 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

# アカゲラ

*Dendrocopos major*

キツツキ科・留鳥



アカゲラ（オス）頭の赤は後頭部だけ

## 名前の由来

後頭部と下腹部が赤いことからついた名。「ケラ」はキツツキの古名「けらつつき」の略で、けら（虫）をつついて捕るのでついたといわれる。漢字名：赤啄木鳥

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水迎) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）23.5cm。背から尾まで黒く、肩羽の先が白いのでV字形の大きな白斑として見える。下腹部は赤い。

オスは頭頂が黒く、後頭部が赤い。メスは頭部全体が黒。声：「キョッキョ」あるいは「ケツ、ケツ」と1声ずつ区切って鳴く。飛んでいるときには「ケレケレケレ」あるいは「ケケケケケ」と鋭くなくこともある。また警戒するときには「ケッケッケッ」とせわしなく鳴き続ける。育雛時には巣穴からヒナの「キョキョキョ」というやかましい鳴き声が聞こえる。

空洞になった木の幹を太鼓のようにくちばしで叩いて「タララララララ」と大きな音を出す。これをドラミングという。

飛び方やとまり方：飛ぶときには、羽ばたきと翼を閉じての滑空とを繰り返し、波のような飛行曲線を描く。

木の幹に垂直にとまる。オス同士対立するときは水平な枝の上で向かい合いもする。

類似種と見分け方：オオアカゲラ、コアカゲラ。

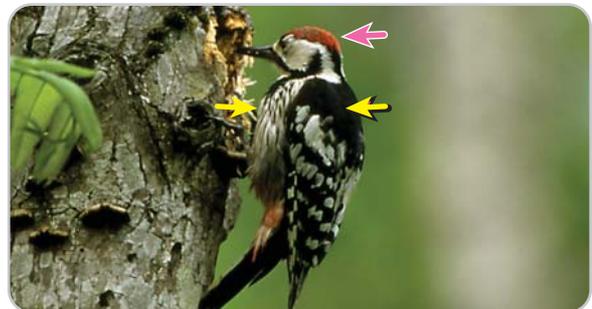
オオアカゲラは一回り大きく、脇には黒い縦斑がある。V字形の大きな白斑はない。

コアカゲラはずっと小さく下腹は赤くない。背にV字形の

白斑はないが白い横斑が重なって背中が白く見えることが多い。



アカゲラ。下腹部の赤とともに肩から背中への白斑が特徴



オオアカゲラのオス。脇に何本も短いスジがあり、背には大きな白い模様がない。またオスの頭の赤いところが大きい

## 生息環境・分布

低山から亜高山までの比較的明るい林を好む。河畔林や農耕地の雑木林、樹木の多い集落や公園でも繁殖する。

分布：ユーラシア大陸中緯度地方の森林に分布する。

日本では、北海道から本州まで分布するが、西南日本では少ない。

北海道では留鳥で通年で生息し、低山の林や樹木の多い公

園などで繁殖する。北海道のものはエゾアカゲラという亜種。(亜種とは、同じ種が地理的に隔離されることによって独自の分化をとげ、形態的に変化が確認できるもの) 十勝では留鳥で、平地から低山の林に普通。樹木の多い住宅地や公園でも繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
						繁殖						

## 食性・他生物との関わり

甲虫の幼虫を食べ、ほかにアリ類や鱗翅類（チョウやガ）の幼虫も食べる。

樹木の幹から大枝にかけてよじ登り、樹皮の表面や割れ目、生木の枯れ枝、枯れ木の材、地上に落ちている枯れ枝などくちばしでたたいてほじくり、枯死部の中にある幼虫を取り出す。

舌は著しく長くくちばしより長く伸ばして先を器用に動かし虫をなめとる。（→興味深い話の項参照）

秋から冬にはヌルデやウルシの実、ノイバラやヤマブドウなどの果実も食べる。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は5～7月頃で、一夫一妻で繁殖する。

冬のうちからつがい作りが始まり、そのためのディスプレイ（誇示のための行動・動作）を盛んに行う。（→興味深い話の項参照）

枯れ木や枯れた大枝にオスメス共同で樹洞を掘って巣にする。オスの方が作業量が多いという。巣は地上2～5mく

らいに作られることが多く、穴の入り口の直径は4～6cmくらい、深さは20～40cmくらい。特に内装は作らず直に卵を産むという。

4～6個産卵し、オスメス交代で卵を抱く。14～16日でヒナがかえる。ヒナは両親に養われ、20～21日で巣立つ。

## 興味深い話

■標識調査で、6年8ヶ月の生存が確認されている。

■春には、空洞の木をくちばしで叩いて大きな音を出すドラミングを盛んに行う（アリスイ以外のキツツキの仲間すべてが行う）。アカゲラの場合、1秒間に18～22回くらいたたくのだという。

■なわばりは直径200mほどだという。

■つがい形成のディスプレイ（誇示のための行動・動作）では、幹や大枝をはさんで向き合うようにとまって首を左右に振ったり、追いかけたりする。（→繁殖生態の項参照）

■つがい形成やオス同士の対立時のディスプレイでは、下腹部の赤い羽毛を逆立てふくらませる。

■オスとメスが巣作りや子育てを交代するときにもドラミングを行うという。オスもメスもドラミングをするがオスの方が少し長いという。

■オスメス両方が抱卵・育雛を行うが、卵が産まれるとおすは夜間巣穴内をめぐらし、ヒナが巣立つ2日程前まで続けるという。

■冬には餌台に来て脂身を食べる。

■十勝では町中の街路樹や、防風林などでも営巣していることがある。

■北海道の離島には利尻島だけに生息するという。

■足の指は4本だが大きく、指だこや爪が発達している。足指のうち第1足指と第4足指が後ろ向きになっていて、4本の足指が十文字になって体を支える。さらにこの第4足指は前後に回転でき、垂直の幹にとまると外側を向くようになる。

■キツツキの舌は非常に長く、普段は頭の骨に巻き付くように収納されている。これを伸ばして虫をなめとる際、舌下腺から粘りの強い粘液（いわば唾液）を分泌し、虫を捕りやすくしている。（→食性・他生物との関わりの項参照）

■キツツキのくちばしは大きくて長く、良くとがり、非常に骨質化していて頑丈である。その上頭骨との付け根は蝶つがいのようになっていて、くちばしでたたくときのショックを頭に伝えないようにできているという。

■十勝地方のアイヌ語で「エソクソキ」という。「頭をトントン打ち付ける」の意味。

## 配慮事項

巣を作ることができる直径30cm以上の樹木や枯死木がある、成熟した樹林が大切。

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）  
草花

（外来種）  
草花

哺乳類

（水辺）  
鳥類

（草原・樹林）  
鳥類  
ワシ・タカ

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997

「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「鳥のおもしろ私生活」ビッキオ 編著、主婦と生活社 1997  
「野鳥の生活」羽田健三 監修、築地書館 1975  
「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. I」清棲幸保、講談社 1978  
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

Short, L. L. (1982) Woodpeckers of the World. Delaware Museum of Natural History, Delaware.

# アオサギ

*Ardea cinerea*

サギ科・夏鳥(一部越冬)



アオサギ

## 名前の由来

背が青灰色のサギであることに由来する。古くは「みとさぎ」とも呼ばれていた。漢字名：蒼鷺

魚類

底生動物

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）93cm。背が青灰色の大きなサギ。くちばしが長く首も長い。飛ぶときには首を縮める。

声：繁殖期には「クァー」あるいは「ゴァー」といった声

でよく鳴く。ヒナも「ジャツ、ジャツ」とやかましく鳴き立てる。

繁殖期以外でも飛び立つときや飛んでいるときに「クァー、クァー」と大声で鳴くことがある。

両生類  
爬虫類

トンボ

チヨウウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花



アオサギの幼鳥



首を伸ばしたアオサギ



アオサギの足跡

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 生息環境・分布

川、池沼、水田、干潟などに生息する。十勝には3月中旬に渡来する夏鳥。

分布：ユーラシアとアフリカ大陸の温帯から熱帯で広く繁殖する。北のものは冬になると氷の張らない水辺を求め南方へ渡る。

日本には北海道、本州、四国、対馬で繁殖し、北方のものは冬期は暖地に移動する。九州以南では冬鳥。

北海道では夏鳥。3月中旬に渡来する。河川沿いや湖沼に

生息し、河川や湖沼近くの森林にコロニー（集団営巣地）を作り繁殖する。山間部のダム湖にも飛来することがあり、最近新たなコロニーもできている。

十勝地方では、夏鳥だが十勝川中流域などで少数が越冬。幕別町猿別や浦幌町稲穂、鹿追町美曼、帯広水光園などが繁殖コロニーとして知られている。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■			■								
本州以南(越冬期)	■				■							
						繁殖					越冬するもの	

## 食性・他生物との関わり

主に魚を捕食する。カエル、昆虫類、甲殻類、ネズミも食べる。

魚を捕らえるときには、水の中をゆっくり歩いたりじっと立ち止まって待ち伏せたりしながら捕らえる。餌を見つけると瞬時に首を伸ばしてくちばしではさんだりさしたりして捕る。捕らえた魚はくわえなおして頭から飲み込む。岸

に打ち付けて殺したり、飲み込む前に水で洗うことがあるという。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

主に丘陵地によく茂った林などで、高木の樹上や梢に集団繁殖する。繁殖期は4月から7月。一夫一妻で繁殖する。

つがいの形成の際に、オスは古巣の上でメスに対してくちばしを鳴らしたり、背伸びをしたり、下を向いてうずくまるなど様々な求愛行動を行う。

巣材（枯れ枝など）集めは主にオスが行い、メスはオスから受け取った巣材で大きな皿形の巣を作る。

3～5個の卵を産み、2日おき、または3～4日おきに1卵ずつ産卵するという。

抱卵日数は25～28日くらい、育雛日数は25～30日くらい。つがいのオスメスが交代で卵を抱き、ヒナへの給餌もオスメス共同で行う。給餌は朝方と夕方に多いという。



アオサギの集団営巣地（コロニー）

## 興味深い話

■丘陵地によく茂った林などに集団繁殖するが、つがいは巣の周りのごく狭い範囲をなわばりとして防衛する。コロニーに早く渡来し、早くつがいになったものほど木の上部に巣をつくり、つがいになるのが遅くなるほど木の中層や下層に巣をつくる。

■つがいの形成の際に、オスは古巣の上でメスに対してくちばしを鳴らしたり、背伸びをしたり、下を向いてうずくまるなど様々な求愛ディスプレイ（メスや他の個体に対して誇示をおこなう特徴的な行動）を行う。

■繁殖期にはコロニーを中心に半径5～10 kmぐらいの範囲を採餌行動圏とし、繁殖が進行するにつれてその範囲は拡大する傾向がある。非繁殖期は単独あるいは小規模なねぐらをつくって眠る。

## 配慮事項

採餌環境としては魚の生息する水域が必要。繁殖コロニーとなる樹林は限られており、コロニーのある樹林は大切である。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985（1995 2版21刷）  
「原色日本野鳥生態図鑑（水鳥編）」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）  
草花

（外来種）  
草花

哺乳類

（水辺）  
鳥類

（草原・樹林）  
鳥類  
ワシ・タカ

# アオジ

*Emberiza spodocephala*

ホオジロ科・夏鳥

## 名前の由来

古くはホオジロ科の鳥を“しとと”と呼び、その中で体が緑色のアオジを“あをじとと”と区別するようになった。後にこれが簡略化されてアオジになった。漢字名：青鷓

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ



アオジ（オス）

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）16cm。黄色い腹をしたスズメよりも少し大きい鳥。

オスの頭と顔は灰色っぽい緑色で、くちばしに近いところは黒みが強い。背は緑灰色から腰に向かって茶褐色になる。翼は背腰と同じ色で、列に並んだ黒い模様があり、白っぽい帯が2つある。体の下面は緑がかった黄色で、脇に灰黒色の列に並んだ模様がある。

メスはオスより色が薄い。目の上に太い眉のように黄色の模様がある。

声：繁殖期には木の梢や枝先にとまって「チョッチーチョチリリチリリ」と澄んだ声で鳴く。比較的ゆっくりとした鳴き方。「ジリリリ」という少し濁った声をつけることも多い。地鳴き（さえずりではない、普段の声）は「チッ」と一声。

歩き方：スズメのように両足をそろえて飛びはねながら移動する。

類似種と区別点：ノジコ（北海道には分布しない）。ノジコは下面が硫黄色で目の周囲が白い。



アオジのオス(上)とメス(下左)。オスに比べてメスの顔は、色が薄く柔らかな感じ



## 生息環境・分布

比較的乾いた明るい林にすみ、疎林で藪が多いところ、林縁などを好む。十勝では夏鳥。

分布：ユーラシア大陸東部の、バイカル湖からウスリー地方を経て日本列島、中国中央部に分布する。

日本では本州中部以北、北海道で繁殖し、冬は本州南部、四国、九州から台湾、中国南部で過ごす。

北海道には4月中旬に渡来し、海岸部から山地までの明るい林や低木林で普通に繁殖する。

十勝には、主に夏鳥として4月中旬に渡来。河畔林や平地

の林に多数生息、繁殖する。



4月、藪の縁にとまるアオジ。背を向けられるとわかりにくい

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				繁殖								
本州西南部以南 (越冬期)	越冬									越冬		

## 食性・他生物との関わり

地上を両足で飛びはねながら移動し、タデ科・イネ科など植物の種子、ズミ・イボタノキなどの果実をついばむ。夏には地上にいる昆虫の成虫、幼虫も食べる。捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。オスはなわばり性が強く、盛んにさえずり、つがいとなってもなわばりを保つ。巣作りはメスのみが行い、地上1～2mくらいの藪の中の枝の又上に乗せるように作る(→興味深い話の項参照)。巣はイネ科植物の茎や葉でお椀型の巣を作る。産卵数は3～6個、メスだけが卵を抱き、約12日でヒナがかえる。オスメス共同でヒナに給餌をし、9～14日で巣立つという。



アオジの巣は藪の比較的低い枝などに作られる(上)。卵は4個くらい(下)

## 興味深い話

- 標識調査で、8年6ヶ月の生存が確認されている。
- 4月中旬から6月にかけて、十勝地方の草原から河畔林や郊外の樹林、市街地の樹林などあちこちでよくさえずっているお腹の黄色が目立つ鳥である。
- 春に渡ってきた当初のオスは2～4羽の小さな群れで過ごし、地上で対立行動をとるようになる。その後次第に離ればなれになって盛んにさえずってなわばりを作る。
- 地上や地上から1～2mくらいまでの藪の中に巣を作るといわれているが、帯広畜産大学周辺で見つけられた巣は全て地上だった(藤巻、私信)。(→繁殖生態の項参照)
- オスを失ったメスの巣で、別のオスはそのヒナを養った、いわば「養父」の例があるという。
- 北海道や東北地方北部では平地から山地まで広く分布するが、それ以南での分布は山地に限られ「高原の鳥」とされるという。

## 配慮事項

木、藪がないと繁殖できない。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

- 越冬期にも群れることはない。
- 行動圏は10,000㎡くらい、なわばりは5,000㎡くらいだという。
- 十勝地方のアイヌ語名は不明。



さえずるアオジのオス。なわばりは強い

「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「続野鳥の生活」羽田健三 監修、築地書館 1976  
「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. I」清棲幸保、講談社 1978

須山才二 (1970) アオジ *Emberiza spodocephala* (1970) . *Emberiza*, 3 : 12-16.

★藤巻裕蔵：帯広畜産大学名誉教授

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(鳥水辺)  
類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# アカハラ

*Turdus chrysolaus*

ツグミ科・夏鳥



アカハラ

## 名前の由来

胸と脇腹が赤い（オレンジ色）のでついた名。漢字名：赤腹

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類  
ワシタカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）23.5cm。ムクドリくらいの大きさ。

頭部から背、翼はオリーブがかった褐色で、胸と脇が濃いオレンジ色。腹の中央は白い。

メスのものには、白斑が縦に何列か並ぶ。

声：「キョロン、キョロン、チリリリ」と大きな声で早朝（夜明け前）から夕方遅くまで華やかにさえずる。ほかに「ホイチョー、チリリリ」「キッキッキロン、キョロン、チー」などと変化が多い。地鳴き（さえずりでない普通の鳴き声）は「ツィー」と鋭く、飛び立つときには「クワッ、クワッ」と鳴くことが多いという。幼鳥は「キョッ、キョ、キョキョ」と鳴くという。

飛び方：羽ばたきを途中で休みながらも直線的に飛ぶ。

類似種と区別点：マミチャジナイ。

マミチャジナイにははっきりした白い眉斑（目の上の眉毛の様な斑点）があり、くちばしの基部も白い。



アカハラの横顔



アカハラの腹。中央下腹は白い

## 生息環境・分布

山地の明るい林、疎林を好む。林縁で繁殖する。十勝では夏鳥。

分布：夏は日本の北部、サハリン、南千島だけで繁殖し、冬は日本南西部から中国南部などに渡る。別亜種のオオアカハラは千島北～中部に分布する。

日本では本州中部以北、北海道で繁殖し、冬は本州中部以南。

北海道には4月下旬に渡来し、平野部から山帯の森林にかけて生息する。

十勝には、4月下旬に渡来し、平野部から低山帯の森林に生息。木の多い公園でも繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期					繁殖							
本州中部以南 (越冬期)	越冬									越冬		



## 食性・他生物との関わり

地上の落ち葉をはねのけて昆虫やミミズをあさる。木の実は好み、枝に残った柿の実をついばんだりする。  
捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は5月中旬～8月、一夫一妻で繁殖する。  
4月下旬にまずオスが飛来してなわばりを作り、遅れてメスが飛来してなわばりを持つオスとつがいとなるという。巣は林内より林縁部の、多くは2m前後の高さに作られる(→興味深い話の項参照)。木の枝と草の根を主な材料とし、枯れ葉などに土を交えて椀型に作られるという。  
3～5個産卵し、メスだけが卵を抱いて約14日でヒナが孵える。ヒナへの給餌はオスメス共同で行われ、約13日間で巣立つという。



アカハラの巣。メスが顔をのぞかせている

## 興味深い話

- 十勝で幼鳥の時捕獲標識(番号入りの足輪)されたアカハラがフィリピンのルソン島で回収されたことがある。
- 標識調査で、6年の生存が確認されている。
- オスはメスより早く繁殖地にやってきて、直径300m以上もあるなわばりを作り、「キョロン キョロン チリリリ」と大きな声で朝早くから夕方まで華やかにさえずる。
- 「キョロン ツイー」と2節で鳴くのはマミジロ。
- 巣は基本的に地上2m程度の低い場所に作られるため、卵やヒナが地上のヘビなどといった外敵に襲われやすいという。
- 巣は高い場合には11m、低い場合には1m以下の高さに作られたという記録がある。
- ヒナには主にミミズを与えるが、時には昆虫やクモを与えもするという。
- ヒナが大きくなると骨格形成のためのカルシウム分を補

うためなのか、カラ付きのカタツムリを親鳥が運んでくることがあるという。



梢のアカハラ。なわばりは半径300m以上と広い

## 配慮事項

林の下に藪がなく、林冠が開けた明るい林と草原が接する場所が大事。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)  
「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997

「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「名前といわれ 日本野鳥図鑑 野山の鳥」国松俊永、偕成社 1995  
「野鳥の生活」羽田健三 監修、築地書館 1975  
「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ 編著、主婦と生活社 1997

藤巻裕蔵 (1992) 帯広における標識結果4. アカハラ、クロツグミ. 日本鳥類標識協会誌 7: 21-23.  
羽田健三・渡辺博 (1969) アカハラの繁殖生活に関する研究. 信大志賀自然教研業績、8: 69-77.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# イカルチドリ

*Charadrius placidus*

チドリ科・夏鳥(一部越冬)



撮影：叶内拓哉

イカルチドリ

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
ワシタカ

## 名前の由来

コチドリより少し大きく強そうに見えることからこの名がついた。古くは「おほじゅん」「くびたま」とも呼ばれていた。チドリの語源はその鳴声からきたという説がある。漢字名：斑鳩千鳥、鶺鴒千鳥、\*(かばね偏に鳥)千鳥

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)21cm。くちばしと足が長く、飛ぶと翼に白っぽい帯がみえる。

## 生息環境・分布

河川の中流より上流で、砂礫の川原や中州に生息する。

**分布：**ユーラシア大陸極東部の中国中北部から日本列島に限られて繁殖分布し中国南部からミャンマーにかけて越冬する。

## 繁殖生態

繁殖期は3月～7月、なわばりを作る。つがいの形成や求愛、巣づくりの前などに、オスは地上にうずくまり、胸を地上につけ、足で砂をかき出す行動をしながらピッ、ピッ、

## 食性・他生物との関わり

地上や水面、水底の泥から主に昆虫類などを捕食する。天敵は猛禽類やキツネなど。

## 興味深い話

- 砂礫地の水辺やその周辺を走ったり歩いたり、また急速に走って急停止し、思いがけない方向にくちばしを突き出して、虫に不意打ちをくらわせて捕食する。
- 地上をジグザグに走ることもでき、この様子から酔ってフラフラ歩く事を「千鳥足」という。
- 繁殖期にはなわばりをつくる。オスどうしの対立の行動

## 類似種と見分け方

コチドリ。

コチドリは少し小さく、目の周りの金色がはっきりしていて、飛んでいる時、翼に白っぽい帯は出ない。

日本全国に分布する。

北海道全域の主に河川の中・下流部の河川敷に生息する。十勝地方では、河川中流部の氾濫原などの砂礫地で繁殖する。また少数が越冬する。

ピッ・・・と鳴いてメスを呼ぶという。

ふつう4個の卵を産む。抱卵日数は27日くらいで、3～4週間で独立。孵化後まもなく離巢し、親について歩く。

## 配慮事項

繁殖地として植生がほとんどないような礫地が必要である。

や脅しのディスプレイ(メスや他の個体に対する誇示行動)には、体を水平位にして、平行に走ったり、相互にジグザグに走る、あるいは相手に向かって走る等の行動がみられる。また、2～4羽が向き合って相手に対して立ちはだかるように体を起こし、下くちばしを引いて冠羽を起こし、爪先立ちになって睨み合うなどの行動もみられる。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
本州以南の暖地(越冬期)	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

## 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社

1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

# イソシギ

*Actitis hypoleucos*

シギ科・夏鳥



撮影：浦幌野鳥倶楽部

イソシギ

## 名前の由来

磯にすむシギという意味。古くは「かはちどり」「びいびいしぎ」の名で呼ばれた。「シギ」は「騒ぎ(さやぎ)」から来ているといい(新井白石、大言海)シギの羽音から考えられたのではないかと言う。漢字名：磯鷗

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)20cm。飛ぶと翼に白い帯が目立つ。尾をよく振る小型のシギ。

上面の黒褐色と下面の白色の対称が鮮やかで、腹部の白色部分が翼角のところ(翼の肩のあたり)で翼の上にくい込んでいる。

くちばしもシギの中では短めで、足も短い。足の色は黄褐色である。

**飛び方・歩き方**：短距離を飛ぶときには翼を弓なりに下げ、翼の先だけを小刻みに動かすという、独特の飛び方をする。歩くときには尾をよく振り、特に着地時には大きく下半身

を上下させる。水中を泳ぐこともあるという。

**声**：飛び立つときや飛んでいるときに、「チーリーリーリー」「ツーチーチーチー」と、非常に細い声で鳴く。繁殖期には、細い声で「ツーチリリーチーチリリー」と少し変化をつけて鳴く。



腹の白色が翼角のところで翼の上にくい込む

## 生息環境・分布

河川、湖沼などの水辺。水田や畑地にも採餌に現れる。岸辺の草地で営巣する。非繁殖期には干潟や岩礁など海辺にも現れる。十勝には4月中旬に渡来する夏鳥。

**分布**：ユーラシア大陸の中高緯度地方に広く繁殖分布し、アフリカ大陸中南部からインド、中国南部、東南アジアおよびニューギニア島、オーストラリア大陸に渡って越冬。日本には北海道、本州、四国、九州などに夏鳥として渡来して繁殖する。本州中部以南から沖縄県にかけて越冬する

ものがいるが留鳥ではない。

北海道(十勝でも)では夏鳥。4月中旬に渡来する。河川敷や湖岸などに生息するが、河川上流部でもダムや砂防ダムの周辺など開けた環境があると生息する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				繁殖								
本州中部以南(越冬期)												

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(葦原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

## 食性・他生物との関わり

水辺の昆虫類（主に水生昆虫）を捕食する。活発に水辺を歩きながら水面や泥の表面を、くちばしを箸のように利用してついでむ。特にユスリカ類をくちばしでつま取るようについでむ、あるいは石の間にくちばしを入れてトビケラ類などの幼虫を捕り、砂泥の中にくちばしを差し込んでブユの幼虫などを探り出す。水中を泳ぐことも

あるという。捕食者は猛禽類やキツネなど。

## 繁殖生態

繁殖期は4月～7月。繁殖期には、細い声で「ツーチリリーチーチリリー」と少し変化をつけて鳴く。一夫一妻が多いが、一夫二妻や一妻多夫の例があるという。岸辺の草地で営巣する。低木や草の根元などを浅く掘り、くぼみにして、枯れ草などをしいて巣とする。オスメス共同で作るが、初めはオスが作り出す。オスは様々な変わった行動（ディスプレイ）によってメスを呼び込む（→興味深い話の項参照）  
ふつう4個の卵を産み、抱卵日数は22～25日。メスだけが卵を抱くらしい。（ヨーロッパの観察ではオスメス共同で抱卵）  
孵化後数時間（～2日くらい）で巣を離れる。オスはヒナ

の近くで抱いたり採餌中付き添ったりし、メスは少し離れて捕食者や侵入者の警戒に当たり、近づきながら警戒音で威嚇するという。  
ヒナは25日～30日ぐらいで親から独立するという。

## 興味深い話

- 繁殖期にはなわばりを形成するが、あまり厳密ではなく、行動圏が重なり合うこともある。なわばりの直径は80～150mくらいである。
- オスはメスが現れると、さえぎりながらディスプレイ飛行（メスや他の個体に対して誇示をおこなう、特徴的な行動）をおこなう。
- オスがメスを呼び込む際には、地上10～20mくらいの空中を旋回した後、自分の領域内で穴を掘る様な動作のディスプレイ（スクレイピングディスプレイ）を行う。
- 繁殖の初期にはメスは複数のオスを訪れ、気に入ったオスを選ぶ。オスは複数のメスを継続的に呼び込み、スクレイピングディスプレイを繰り返す。

■巣から離れた後、オスはヒナの近くで抱いたり採餌中付き添ったりし、メスは少し離れて捕食者の警戒に当たる。進入者が現れるとメスは警戒音を発して近づき、激しく警戒するという。またメスはオスより早く家族から離れる。

## 配慮事項

繁殖には植生の少ない、礫や砂泥地が必要である。

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）  
草花

（外来種）  
草花

哺乳類

（水辺）  
鳥類

（草原・樹林）  
鳥類  
ワシ・タカ

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985（1995 2版21刷）  
「原色日本野鳥生態図鑑（水鳥編）」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「野の鳥の生態 復刻版1～5巻」仁部富之助、大修館書店 1979

# イワツバメ

*Delichon urbica*

ツバメ科・夏鳥



イワツバメ

## 名前の由来

イワツバメは岩ツバメで、山や海岸などの岩場に巣をつくるツバメであることから。ツバメの意はくちばしで土をくわえていき巣をつくるので「土食み(つちばみ)」と呼ばれ、チを略しミがメに変わりツバメになったという説、「ツバ(光沢)クラ(黒)メ(鳥)」からというもの、他に「ツバクラという鳴き声」から、「ツバ(鳴き声)クラ(小鳥)メ(鳥を示す接尾語)」から、など諸説がある。漢字名：岩燕

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)15cm。背や羽が黒く、下面が白く、腰が白く、尾が短いところが特徴のツバメ。

**飛び方**：巣周辺や採餌地では、上空を朝夕に多くの個体が、乱舞するがごとく飛び交う。

**声**：さえざりと思われる声としては「ジュリジュリ、ビィビィ、ジュリジュリ」と、早口に濁った声で鳴く。飛んでいるときにもこのような声で鳴き、群れているときには互いに鳴き交わしているという。「ジュ、ジュリ」と短く鳴

くときもあり、ヒナは「ジュジュジュ」と濁った低い声で鳴くという。



ショウドウツバメ。胸に「ネクタイ」がある

## 類似種と区別点

ショウドウツバメ。

ショウドウツバメは上面が褐色で腰は白くない。また胸にネクタイ状(T型)の模様がでることが多い。

## 生息環境・分布

もともとは山地や海岸の岩壁や洞穴に集団で営巣していたが、一般には橋桁などの人工建造物で多く見られる。十勝には4月中旬に渡来する夏鳥。

**分布**：ユーラシア大陸の温帯・亜寒帯で繁殖し、インド、東南アジアで越冬する。

日本には九州以北に夏鳥として渡来し、各地で繁殖。九州では相当数が越冬する。

北海道(十勝でも)では夏鳥。4月中旬に渡来する。十勝管内広く分布する。市街地や川沿い、山間部でもやや開けた環境に生息し、建物、橋下、ダム堤体などに営巣する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				繁殖								
九州以南(越冬期)												

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原・樹林)  
鳥類

## 食性・他生物との関わり

餌としてハエなどの昆虫類を食べる。群れで、繁殖地や採餌地の高空を乱舞、飛行しながら飛翔している昆虫を捕る。営巣地では古巣にダニ類がつきヒナに影響を及ぼすことから、数が増大すると新たに営巣場所を換えることが知られている。

## 繁殖生態

繁殖期は4月～8月。

早期に渡ってくる個体の多くは、すでに一夫一妻のつがいとなっているという。古巣を使うものは年2回繁殖し、新たに巣を作るものはほとんどが年1回繁殖するという。泥と枯草、唾液を用いて、椀型の巣を壁や軒、岩壁などに密着するように作る。上部は屋根となるような天井などに近くなるように作る。

産卵の数日前からオスは常にメスの後について巣に出入りし、時折交尾も見られる。

1～4個の卵を産み、オスメス交代で卵を抱き、抱卵日数は約2週間。ふ化後ヒナへの給餌はオスメスが約半分ずつ受け持つという。育雛日数は約26日。



十勝頭首工（音更川・土幌）  
にかけられたイワツバメの巣  
と親（円内）

## 興味深い話

■巣は壁面に作られ、その外側は主に泥が材料で、オスメスが半々に分担して作る。内側は主に鳥の羽毛や枯れ草などを材料にメスが主役で運ぶ。

■産卵後、抱卵は主にメスが、餌運びはオスメス半々に分担して行う。

■巣立ち前には両親に近隣の親鳥が加わって、巣口のそばまで飛んできてはパッと飛び去る行動を繰り返して巣立ちを誘導する。

■親鳥のねぐらは巣作り・抱卵・育雛期のヒナ保温中まで巣中だが、それ以後は集団ではかにとる。

■集団営巣するが、個々の巣はつがいごとに防衛し争いが絶えないという。

■元々は山地や海岸の岸壁や洞穴に集団営巣していたが、人工建造物への営巣が非常に多くなっている。特に戦後は

市街地の学校や工場、駅、橋桁などのコンクリート製の大きな建造物にコロニー（集団営巣地）が作られる例が増え、それによって分布域が拡大しているという。

■生息地の垂直分布域は、海にかかる橋桁から、高山の山小屋まで、と日本に生息する鳥類の中では群を抜いて広い。



建設中の札内川ダムから巣材を運び（円内）、クレーンに巣作りをしていた（1995年）

## 配慮事項

繁殖期に営巣場所に近寄ることを避けること。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985（1995 2版21刷）  
「原色日本野鳥生態図鑑（陸鳥編）」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「続野鳥の生活」羽田健三 監修、築地書館 1975  
「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ、主婦と生活社 1997

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）  
草花

（外来種）  
草花

哺乳類

（水辺）  
鳥類

（草原・樹林）  
鳥類  
ワシ・タカ

# 他にもいるよ、身近な鳥たち

## ウソ

*Pyrrhula pyrrhula*

アトリ科・留鳥

全長：（くちばしの先から尾の先まで）15.5cm。

声：「ヒー」「ヒーヒー」など。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期 (高地)					繁殖							
十勝出現期 (平野部)	繁殖									繁殖		



魚類

## ツグミ

*Turdus naumanni*

ツグミ科・冬鳥

全長：（くちばしの先から尾の先まで）24cm。

声：「クイックイック」「クワックワック」など。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	繁殖									繁殖		
シベリア東部など (繁殖期)					繁殖							



底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

## スズメ

*Passer montanus*

十勝地方のアイヌ語で「アマメチカッ(殺物を食べる鳥)」  
ハタオリドリ科・留鳥

全長：（くちばしの先から尾の先まで）14cm。

声：「チュンチュン」「チュピチュピチュン」など。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期					繁殖							



チョウ

樹木

(在来種)  
草花

## ハシブトガラス

*Corvus macrorhynchos*

十勝地方のアイヌ語でカラスを「パスクル」  
カラス科・留鳥

全長：（くちばしの先から尾の先まで）57cm。

声：「カーカーカー」「ガーガー」「アー、アー、アー」など。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期					繁殖							



撮影：タカダヒロキ

(外来種)  
草花

哺乳類

## ハシボソガラス

*Corvus corone*

十勝地方のアイヌ語でカラスを「パスクル」  
カラス科・留鳥

全長：（くちばしの先から尾の先まで）50cm。

声：「ガー、ガー」「カボン、カボン」など。

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期					繁殖							



撮影：タカダヒロキ

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「野鳥の生活」羽田健三 監修、築地書館 1975  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕藏、帯広畜産大学野生動物管理科学研究室 2000

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)

# エゾセンニュウ

*Locustella fasciolata*

ウグイス科・夏鳥



エゾセンニュウ（円内写真は類似種のシマセンニュウ）

（イラスト：タカダヒロキ）

## 名前の由来

エゾ(北海道)のセンニュウの意で、センニュウは仙遊(せんゆう)から変化したと考えられている。“潜入”から来ているとする説もある。漢字名：蝦夷仙入

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)18cm。スズメよりも大きい。体は濃褐色で白い眉斑(眉毛の様な斑点)があり、下面は灰色をおびる。

声：「トッピンカケタカ」とけたたましく鳴く。

## 生息環境・分布

河川や湿地のふちの、オオイタドリなどの背の高い草の茂みで繁殖する。湿地周辺の疎林やササ藪の中でもみられる。

分布：ユーラシア大陸中緯度地方東部、バイカル湖からウスリー地方にかけて繁殖分布し、冬はフィリピンからニューギニアにかけてすぞす。

日本には北海道に夏、渡来し繁殖する。本州以南は旅鳥として通過する。

## 類似種と見分け方

ウグイス、シマセンニュウ、マキノセンニュウ、オオヨシキリ、コヨシキリなどと似ている。エゾセンニュウは、オオヨシキリより茶色が濃く、尾の先が丸。また「トッピンカケタカ」というけたたましいさえずりでわかる。

して通過する。

北海道には夏鳥として5月末頃に渡来し、平地から低山の森林で繁殖する。

十勝地方には、6月上旬に渡来。平地から低山の森林のほか、農耕地の残存林にも生息する。

## 食性・他生物との関わり

草むらの中に潜り、歩きながら昆虫をとる。捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は6～7月。草むらや藪の中で地上1～2mくらいのところに、深いお椀形の巣を作る。3～5個産卵する。抱卵・育雛日数は不明。

## 興味深い話・配慮事項

■草むらに潜って姿を見せない鳥であるが、「トッピンカケタカ」と、けたたましく鳴くので所在がわかる。また、このさえずりは「ジョッピン(錠)かけたか」とも聞きなし

される。夜にも頻繁に鳴き、やかましい程のことさえある。

■川原や湿地周辺の藪が大事である。

■アイヌ語で「トッピ」という。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期						繁殖						
フィリピンなど(越冬期)	繁殖											

## 参考文献

「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982(1994増補版7刷)

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二編、浜口哲一・森岡照

明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985(1995 2版21刷)

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房

1993

「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. I」清棲幸保、講談社 1978

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ



# エゾムシクイ

*Phylloscopus borealoides*

ウグイス科・夏鳥



エゾムシクイ（円内写真は類似種のセンダイムシクイ）  
（イラスト：タカダヒロキ）

## 名前の由来

エゾ(北海道)のムシクイの意。ムシクイは「虫食い」で、昆虫食であることから。「むしくひ」はかつて「ウグイスの老鳥」「ホトトギス類」を指していたという。  
漢字名：蝦夷虫食

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
ワシ・タカ

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）11.5cm。スズメよりも小さい。体の上面は濃茶褐色。白い眉斑(眉毛の様な斑)がある。胸と腹は少し汚れた白色。

声：「ヒーツーキー、ヒーツーキー」と高い声でさえざる。

## 生息環境・分布

低山帯から亜高山針葉樹林までで繁殖し、谷間に近い樹林を好む。

分布：サハリンと日本で繁殖し、冬は東南アジアに渡って越冬する。

日本では夏鳥として、北海道、本州中部以北、四国で繁殖。

## 類似種と見分け方

メボソムシクイ、センダイムシクイ。

メボソムシクイ、センダイムシクイとも褐色味が薄く、メボソムシクイは腹が黄色味を帯びる。外見はかなり似ているが、さえずりで区別できる。

## 食性・他生物との関わり

昆虫食。樹林内で枝から枝へと飛び移りながら飛びついて捕らえる。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は5～7月、斜面の岩の間や木の根の下などのくぼみに、メスのみが巣を作る。4～6個産卵し、メスのみが約14日抱卵、オスメス共同(抱雛はメス)で約15日育雛する。

## 興味深い話・配慮事項

■よく似ているメボソムシクイとは採餌場所で棲み分けており、エゾムシクイは樹林の上層と下層、メボソムシクイは中層で採餌する。

■巣は外装がコケや葉で球形に作られ、内装には細い根やシダ類の根状体が用いられるという。

■よく茂った樹林とその下敷が大事である。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期					繁殖							
東南アジア(越冬期)	越冬											

## 参考文献

「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982(1994増補版7刷)

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985(1995 2版21刷)

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管

理学研究室 2000

「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

Nakamura, T. (1980) Ecological separation and adaptive space of warbler guild inhabiting the coniferous forest in Shiga Heights. Bull. Inst. Nature Edc. Shiga Heights, 19 : 45-59.

# エナガ

*Aegithalos caudatus*

エナガ科・留鳥

## 名前の由来

体をひしゃくに、長い尾をひしゃくの柄(え)にたとえてつけた名。北海道のエナガは亜種(亜種とは、同じ種が地理的に隔離され、独自の分化をとげ、形態的に違いがあるもの)シマエナガ(島えなが)とも呼ばれる。漢字名：柄長



エナガ (シマエナガ)

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)13.5cm。体は小さく、シジュウカラより小さい。

白い頭部と黒く長い尾が目立つ。背は黒と紅紫色。下面是白く、下腹が紅紫色。

本州以南のエナガには黒い過眼線(目の上を通る線)があるが、北海道に棲むエナガ(シマエナガ)にはなく、白い顔をしている(ただし、シマエナガの幼鳥には紅の混ざった

黒い過眼線がある)。

声：「ツィーチリリリリ」と高い声、「ジュリ、ジュリ、ジュリ」と濁った声、あわせて「チーチー、ジュリ、ジュリ」と細く小さな声で鳴く。そのほか「チーチーチー」とか「チャッ」という声も出す。特別なさえずりはないようだという。



前から見たエナガ



エナガの背



エナガの幼鳥。特に右のものは顔が黒く見えるほど過眼線がくっきりしている

## 生息環境・分布

低地や低山のいろいろな樹林に住む。二次林に多い。北海道ではハルニレ・ヤチダモなどの低地の落葉広葉樹林で見られる。

分布：ユーラシア大陸の中緯度地方に分布し、乾燥高地やヒマラヤ山脈にはいない。

北海道、本州、四国、九州、対馬、佐渡島などに留鳥とし

て生息する。北海道のものはシマエナガと呼ばれる亜種である(亜種とは、同じ種が地理的に隔離されることによって独自の分化をとげ、形態的に変化が確認できるもの)。

北海道では留鳥で低山の林に生息し、繁殖する。十勝では留鳥で、平野部から山地の森林に普通に生息、繁殖する。

## 食性・他生物との関わり

樹木の上・中層部や藪の小枝など、葉が茂るところで虫や虫の卵を食べる。主な食物はアブラムシ。果実や樹液もよく食べる。

小枝にしっかり足でつかまり葉の表面からついばむ。斜め

上に伸びる小枝によく逆さになってとまり、足を交互に変えながら体を左右に振り、巧みに上の方へはねながら餌を探す。(→興味深い話の項参照)

捕食者は猛禽類など。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	[Green bar indicating presence from Jan to Dec]											
繁殖	[Pink bar indicating breeding from Apr to Oct]											

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類  
ワシタカ

## 繁殖生態

繁殖期は4～6月、一夫一妻で繁殖する。

大枝の又、あるいは小枝やつるなどで囲まれかごのようになった場所に巣を作る。作る場所をオスが紹介し、メスが決定するのだという。巣作りはオスメス共同で行い、木の枝にコケ、クモの巣、羽毛などで袋形の巣を作る。

7～12個産卵し、日中はメスのみが卵を抱き、夜はオスメス両方が巣にはいって抱卵する。13～15日でヒナがかえる。ヒナはオスメス共同で育て、14～17日でヒナが巣立つ。(→興味深い話の項参照)



巣のヒナに餌を運ぶエナガ

## 興味深い話

■標識調査で、7年2ヶ月の生存が確認されている。

■つがい以外の個体がヘルパーとして抱卵や育雛に参加することがある。(→繁殖生態の項参照)

■小枝から逆さにぶら下がって虫を捕ることがあるが、長い尾はこのようなときにバランスをとるのに役立っていると考えられている。(→食性・他生物との関わりの項参照)

■強風に激しく揺れる小枝でも、小さい虫や虫の卵をうまくつばむことができるという。(→食性・他生物との関わりの項参照)

■片足で小枝につり下がり、もう一方の足指で青虫などを握り、くちばしで虫って食うこともできるという。(→食性・他生物との関わりの項参照)

■冬は10(3～20)羽くらいの群れで過ごし、ねぐらでは同じ枝に串団子のようにくっついて並ぶ。枝につく際初めの2羽の間に次々と割り込んでいくため、初めの2羽が列の両端になっているという。

■巣立ちしたばかりのヒナも同じ枝に「串団子」になっているという。

■繁殖後、家族群が集合して合同群を作り、10～11月頃に冬の群れごとのなわばりを作る。余分の個体は群れでなわばりから立ち去るという。

■冬の群れなわばりの広さは0.3km<sup>2</sup>くらい。オスが共同して守られるという。繁殖期のつがいは群れのなわばりからは出ないという。



頭が真っ白で実にかわいい“シマエナガ(北海道のエナガ)”

## 配慮事項

落葉広葉樹林が大事である。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀焔治、北海道新聞社 1997  
「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ 編著、主婦と生活社 1997

中村登流 (1969) エナガの個体群の行動圏構造。I 冬季群の行動圏と群れテリトリー。山階鳥研報、5 : 433-461.

中村登流 (1970) 日本におけるカラ類の群衆構造の研究。II 摂食場所、食物の季節的変動および生態的分離。山階鳥研報、6 : 141-169.

中村登流 (1978) 日本におけるカラ類の群衆構造の研究。IV くちばしの使用法と其の使用空間による生態的分離。山階鳥研報、10 : 94-118.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(鳥辺)  
鳥類

(葎原樹林)  
鳥類

# オオジシギ

*Gallinago hardwickli*

シギ科・夏鳥

## 名前の由来

干潟や河口には出ず、内陸の水田や草原にすむシギのことを「ジ(地)シギ」といい、この鳥は大型のジシギなのでこう呼んだ。シギは「騒ぎ(さやぎ)」から来ているといい(新井白石、大言海)シギの羽音から考えられたのではないかと言う。漢字名：大地鷗



オオジシギ

## 特定種

国レッドリスト(2007)：準絶滅危惧種 (NT)

北海道レッドデータ：希少種 (R)

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)30cm。くちばしが長くまっすぐで、褐色の地に黒い斑紋のある背中模様が枯れ草に似ている、中型のシギ。

頭中央縦に黄白色の線があり、その下が褐色、目の上が太い眉のように黄白色、目を通して褐色、ほおは全体的に白っぽいところに褐色の線がある、というようにシマシマの顔をしている。

**飛び方と声**：繁殖期には非常に目立つ「フライトディスプレイ(飛びながら行うメスや他の個体に対する誇示行動)をする。

上空を飛び回りながら「ジェップ、ジェップ(ジジッ)」という声を連呼しながら翼を逆八の字型に差し上げ震動させたり、羽ばたかないで滑空したりを繰り返しながら大きく旋回する。そして「ズビズビズビャーク(ジープ、ジ

ープ)」という鳴き声に変え、翼角(翼の肩あたり)を突き出し、尾を広げて急降下する。このとき外側の固い尾羽が風を切り「ゴゴゴゴ」とすさまじい音を立てる。数十mを降下して急に折り返して「ズビズビー」と鳴きながら舞い上がる。

電柱や杭の上で「ジェプー」と鳴くことや飛び立つときに「グェッ」と太く濁った声を出すこともある。



オオジシギ。杭などの上で鳴くこともある

## 類似種と区別点

チュウジシギ、タシギ、ハリオシギなどのタシギ属のシギ。野外識別は難しいが、オオジシギは繁殖期に声で区別できる。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				繁殖								
オーストラリア(越冬期)												

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 花

(外来種) 花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

## 生息環境・分布

比較的広々とした草原、牧場、湿原など。繁殖地では、大小の池が散在するような湿地草原や灌木が散在する湿原周辺の草原を好むという。十勝には4月中～下旬に渡来する夏鳥。

**分布：**サハリン及び日本列島で繁殖し、冬はオーストラリア大陸東南部で越冬するという。

日本では、北海道から本州中部までに繁殖分布する。本州

中部や九州では高原で、東北地方では主に平地で繁殖する。北海道（十勝でも）では夏鳥。4月中～下旬に渡来し、9月末までには渡去する。主に標高500m以下の河川敷、農耕地、伐採跡、幼齢人工林などいろいろの開けた環境に生息するが、湿原のような環境があると標高1000m～1400mでも生息する。生息数は河川敷のような環境が多い。十勝地方では夏鳥として平地の草地に広く分布。

## 食性・他生物との関わり

河川周辺などの湿地の泥地で昆虫の幼虫やミミズなど、また草の種子、葉、根などを食べる。河川や湖沼縁の水に浸かるか湿った泥地の上をゆっくり歩きながら採餌する。

柔らかい地面にくちばしを差し込んで上下させながら虫を探り当て、くちばしの先だけを開いてはさみこみ、引きずり出して食べる。

渡りの時期にはタシギなどとともに、水田や川岸など内陸の草の生えた湿地で、くちばしを泥の中に突き刺して小動

物を捕まえるという。

捕食者は猛禽類やキツネなど。



オオジシギの後ろ姿

## 繁殖生態

繁殖期は4月～6月。繁殖期には非常に目立つ「フライトディスプレイ（飛びながら行うメスや他の個体に対する誇示行動）」をする。（形態的特徴の項参照）

草地上に皿型の巣をつくる。ふつう4個の卵を産む。メスだけが抱卵するらしいが、詳しいことはわかっていない。

## 興味深い話

■ディスプレイフライト（メスや他の個体に対して誇示をおこなう特徴的な飛行）の音から、ジェットシギ、カミナリシギなどとも呼ばれる。（オスのディスプレイフライトは形態的特徴を参照）

■ディスプレイフライトは4月～5月にかけて盛んに見られ、特に早朝や夕方が多い。飛び回る範囲は1～4haという報告がある。

■オスは巣作り、抱卵、育雛などは行わないと考えられている。

■長いくちばしの先は柔らかく、先端部だけを開閉することができるという。

■冬はオーストラリアに渡る。

■十勝地方のアイヌ語では「チピヤク」といい、また足寄（アイヌ文化では釧路地方の文化圏）などでは「リヤエオルシ」という。



撮影：叶内拓哉

オオジシギのディスプレイフライト

## 配慮事項

採餌や営巣に湿地や草地が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985（1995 2版21刷）

「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕藏、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房

1993

「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978

「北海道レッドデータブック2001」北海道 2001

「山川弘氏からの聞き取り記録」内田祐一（未発表）

「知里真志保著作集 別巻 I 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編」知里真志保、平凡社 1976

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# オオジュリン

*Emberiza schoeniclus*

ホオジロ科・夏鳥



オオジュリン（オス）

## 名前の由来

大きなジュリンの意で、「ジュリン」は秋冬の「チュイーン」という鳴声によると言われる。漢字名：大寿林

魚類

底生動物

## 特定種

該当なし

両生類  
爬虫類

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）16cm、両翼を開いたときの長さ25cm。スズメくらいの大きさ。

オスの夏羽では頭と喉が黒く、その間に白い線がある。首の後から胸まで白く、腹も白い。背中が赤茶色。

メスは頭が褐色で喉は黒くない。

声：ゆっくりしたテンポで「ジョッチッチィ」「ジョッチィーチィーチィーチュリリ」などと少し濁った声でさえずる。地鳴きとしては短く細く「チッ、チッ」と鳴いたり、秋冬には「チュリーン」「チュウイー」と鳴いたりする。

類似種と区別点：コジュリン、シベリアジュリン。

コジュリンは白い頬線がなく、後頸も白くない。シベリアジュリンは淡い灰黄褐色の体。

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ



オオジュリンのメスか冬羽のオス



オオジュリンのオス。黒い頭・顔とのど、襟巻きのような白が目立つ



オオジュリン。メスか冬羽のオス

## 生息環境・分布

湿地とその周辺の草原。特に繁殖地では、ヨシ、クサヨシなどの草原を好む。

分布：ユーラシア大陸の中・高緯度に幅広く分布し繁殖し、特に西部に多い。冬は同大陸南部やインド、中東、アフリカ北部に飛来する。

日本では北海道、青森、秋田で繁殖する。本州南部には冬

鳥として飛来する。

北海道には夏鳥として4月上旬に渡来し、繁殖する。湿潤な草原に生息する。

十勝には、夏鳥として4月中旬に渡来。河川敷、湖沼周辺の湿潤な草原に生息し、繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				繁殖								
本州以南(越冬期)	越冬									越冬		

## 食性・他生物との関わり

ガの幼虫などの昆虫類、枯れたヨシの茎の中にあるワタムシ類。地上に落ちた種子も食べる。

ヨシ原の地上や茎で採食する。茎から茎へと移動しながらガの幼虫などを捕らえる。ワタムシ類を食うときには、枯れたヨシの茎にとまって葉鞘（ようしょう：葉を茎に止めているさやのような部分）をむしったりはぎ取ったりして取り出す。（→興味深い話の項参照）

捕食者は猛禽類など。



縦の茎にとまるのがうまいオオジュリン（オス）

## 繁殖生態

繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。なわばりを作り、巣はその中にある。オスはさええずとき、低木のてっぺんなどにとまり、興奮してくると首の白い羽毛を逆立てる。（→興味深い話の項参照）

巣は草株の根元の地上や草株の上、あるいは藪の小枝の中などに作られ、枯草などでお椀型に作られる。巣づくりはメスのみが行い、オスはその際メスについて回ってガード（メイトガード）するという。

4～5個産卵し、オスメス交替で卵を抱く。13～14日でヒナがかえり、両親の給餌によって育ち、10～13日で巣立つ。



首の白い羽毛を少し逆立てたオオジュリンのオス

## 興味深い話

■標識調査で、10年の生存が確認されている。

■越冬地ではパチパチと音を立ててくちばしでヨシの茎を割り、中で越冬している虫を探す。

■繁殖期は、主要行動圏が4,000～10,000㎡の比較的円形に作られ、その同心円状に1,000～3,000㎡のさえずり地域があるという。（→繁殖生態の項参照）

■オスは求愛ディスプレイ（誇示のための行動・動作）として、地上で翼と尾羽を開き、腰の白い羽毛を逆立てるという。（→繁殖生態の項参照）

■巣は場所によっては近くに集まり、採食に外へ出ていくという、ルーズなコロニー（集団営巣地）になることがあ

るという。（→繁殖生態の項参照）

■繁殖地では水湿地のヨシ草原からその周辺の丈の低いクサヨシやスゲの草原で見られるが、同様の場所で見られるシマアオジに比べてより水辺の丈の高い草原ににいるという。

■越冬地では数羽から十数羽のルーズな群れで過ごすという。

## 配慮事項

繁殖環境である、湿地とその周辺のヨシ草原が大事。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ボックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987

中村登流・山岸哲・飯島一良・香川敏明 (1968) 泥炭地草原におけるホオジロ属の生活場所と行動圏の比較調査. 山階鳥研報、5 : 313-336.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# オオタカ

*Accipiter gentilis*

タカ科・留鳥

## 名前の由来

タカは高く飛ぶからという説、猛き（たけき）鳥という意味からという説などがある。オオタカ=大きい鷹。漢字名の蒼鷹は背中の中灰色に由来するのかもしれない。漢字名：蒼鷹、大鷹



オオタカ。円内は若鳥

## 特定種

種の保存法：国内希少動植物種

国レッドリスト（2007）：準絶滅危惧（NT）

北海道レッドデータ：絶滅危急種（Vu）

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オス50cm、メス56.5cm。翼を開いたときの端から端の長さ105～130cm。オスはカラスくらいの大きさ。強い足と鋭利な爪、頑丈で鉤型に曲がった鋭いくちばしを持つ。

成鳥の背面は暗青灰色。白く明瞭な眉斑（眉の様な模様）がある。下面は白く、黒く細い横じま模様が一面にある。尾には太く黒い横帯が4本（尾を広げると5本）ある。飛んでいるときには翼の下の面は白くて黒い横じま模様ははっきり見える。

また、飛んでいるときは翼の後縁にふくらみがあり、尾が長く見える。

幼鳥は背面が褐色、下面には褐色の縦斑がある。

声：ほとんど鳴かないが、繁殖期には「キッキキキ」と鋭く鳴き続ける。また「クァイー、クァイー」と鳴くこともあるという。

飛び方や歩き方：開けた空間を飛ぶときには、速い羽ばたきに短い滑空も交えて直線的に飛ぶ。上空で翼を水平に広げて円を描くように飛ぶこともある。

餌を捕らえるときには、入り組んだ樹間を身をひるがえしながら飛び抜け、急降下や急上昇をして獲物を捕る。

類似種と見分け方：クマタカ、ハイタカ。

オオタカは翼の後縁にふくらみがあり、尾が長く見える。クマタカは大きく、羽ばたきも遅い。

ハイタカはハト程度の大きさで羽ばたきも速い。



オオタカ。白い腹に横スジあり（この写真では見づらい）



オオタカの幼鳥。腹に褐色の縦スジが入る



ハイタカの腹(左)と背(右)。大きさはハト大と小さい



## 生息環境・分布

針広混交林（針葉樹と広葉樹の混ざった林）を好むが、農耕地の孤立林、防風林などにも生息する。営巣地は高木層と低木層の間に一定の空間を持つ樹齢40年以上の林が好まれるともいう。

分布：北アフリカおよびユーラシア大陸と北アメリカ大陸の温帯・亜寒帯南部で繁殖し寒地のは南下、越冬する。

日本では、四国の一部および本州、北海道の広い範囲で繁殖する。西日本に比べ東日本の方が繁殖記録が多い。北海道では留鳥で、平地～亜高山帯に通年生息する。十勝では留鳥で、平地～低山帯に生息する。平地の防風林や段丘林、孤立林などでも繁殖している。冬になると数が減るので一部は本州以南で越冬していると考えられている。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
繁殖												
一部南下												

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ



## 食性・他生物との関わり

主に小～中型の（ツグミくらいの）鳥類。ハト、カモ、シギなどの中～大型の鳥類や、ネズミ類、リス、ウサギなども捕食する。

入り組んだ樹間を身をひるがえしてくぐり抜け、まっすぐ

に急降下や急上昇したりして獲物の背後から襲うという。ヒナにはハトやカケス、リスなどを与えるという。捕食者であり、食物連鎖の頂点にたつ種のひとつ。成長してしまえば他の生物に襲われることはあまりない。

## 繁殖生態

営巣期は2～7月、一夫一妻で繁殖。早いもので2月からディスプレイ（誇示のための行動・動作）・巣作りが始まり、産卵期は4～6月。7月巣立ち。（→興味深い話の項参照）

広い行動圏を持つが巣が一定間隔に分布することから、つがいでなわばりを持つと考えられているようだ。

高木の太い枝の付け根に木の枝を積み重ねて皿形の巣を作る。巣作りはオスメス共同で行う。

2～4個卵を産む。夜はすべてメスが卵を抱き、昼もほと

んどメスが抱くという。

36～41日でヒナがかえり、ふ化したヒナは全身白い幼綿羽に覆われているという。初期にはオスが獲物を足でつかんで飛んできて、それをメスが引きちぎってヒナに与えるが、ヒナが育つと、オスメスともに餌を取りに出るという。（→興味深い話の項参照）

約40日でヒナは巣立つ。

1歳で繁殖するものもいるが、多くは2～3歳で繁殖する。

## 興味深い話

■かなり人間の生活圏に近いところにも生息しており、「里山」の鳥だともいわれる。

■繁殖の最中に道が近くにできたりすると、かなり神経質になり、観察者が背を向けたとたん急降下しながら鋭い声を上げ、襲ってきたりもするという。

■ワシタカ一般に求愛ディスプレイ（誇示のための行動・動作）では、空中で急降下や急上昇を行ったりするという。

■ヒナは一度にふ化するのではなく、10日ほどかけてだんだんとふ化し、早くふ化したヒナが遅くふ化したヒナをつつき殺すことがあるという。

■オスは巣に餌を運ぶ際、獲物の首を落としたり羽毛をむしるなど、ある程度「料理」してからメスに渡すという。

■鷹の威を借りているのか、巣の下にスズメが住んでいた

り、予備の巣をフクロウなどが利用していたりもするという。

■小鳥はタカの仲間でも襲うもの（オオタカ、ハイタカ、ハヤブサなど）か違うもの（トビなど）かをよく認識しているという。小鳥やカモなどが突然あわてて逃げるときには、近くにオオタカなど鳥を襲う猛禽が近づいているのかもしれない。

■古来より鷹狩りによく使われた種類のタカ。

■十勝地方のアイヌ語では「シチカプ」という。

## 配慮事項

防風林などで繁殖をしていることもあるが、むやみに近づくと繁殖に悪影響を与える可能性がある。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978  
「北海道のクマタカとオオタカ」藤巻裕蔵 編集、北海道猛禽類研究会、1999  
「図鑑 日本のワシタカ類」森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男、文一総合出版 1995  
「日本動物大百科 第3巻 鳥類 I」日高敏隆監修、平凡社 1996  
「動物名の由来」中村浩、東京書籍 1981  
「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ 編著、主婦と生活社 1997

「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「山川弘氏からの聞き取り記録」内田祐一（未発表）

遠藤孝一・若杉集・高松健比古・中山正匡（1987）那須野が原におけるオオタカの繁殖生態。日本鳥学会1987年度大会講演要旨。日鳥学誌、36：111。  
遠藤孝一・中山岳彦・飯沼覚寿・トーマス＝ミラー（1987）那須野が原におけるオオタカの繁殖期の生息状況と営巣環境。日本鳥学会1987年度大会講演要旨。日鳥学誌、36：111。  
遠藤孝一・飯沼覚寿・菊池知義・中山正匡・高松健比古（1984）栃木県西那須野町におけるオオタカの繁殖生態と生息地の現状。特殊鳥類調査報告、pp. 47-57。環境庁。  
鈴木伸（1990）オオタカ *Accipiter gentilis* の巣における兄弟殺しの観察。Strix、9：230-231。

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# オオハクチョウ

*Cygnus cygnus*

カモ科・冬鳥



オオハクチョウ

## 名前の由来

大きなハクチョウの意。ハクチョウは白鳥で白い鳥。古くは「くぐひ」「しらとり」「おほとり」「たづ」とも呼ばれた。漢字名：大白鳥

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）140cm。首が長く全身白色。幼鳥は灰色が混じる。

声：水上や地上では「コオー、コオー」と優しい声で鳴いてからお互いに首を上下させて、「コホーコホー」と騒がしく鳴き交わす。オスとメス同士で、あるいは家族同士も「コーコー」と柔らかな鳴き方であいさつを交わす。

飛んでいるときには「グァーン」とやや濁った声で鳴くことが多いという。

類似種と区別点：コハクチョウ。

コハクチョウは体が少し小さい。またくちばし黄色部が、オオハクチョウではくちばし半ばより先に突き出すようになっていているのに対し、コハクチョウでは丸く、小さい。



オオハクチョウのくちばし黄色部が突き出ている



コハクチョウのくちばし黄色部が丸くなっている

## 生息環境・分布

河川、湖沼、潟湖、水田、内湾、入り江などに生息する。

十勝には10月～4月にくる冬鳥。

分布：ユーラシア大陸の高緯度地方に繁殖分布し、冬は同大陸南部のあちらこちらに渡って過ごす。

日本には北海道から九州までの各地に冬鳥として渡来する。北海道（十勝でも）では冬鳥。各地の海岸や河川中・下流部、湖沼に渡来し、餌付けの普及にともない越冬する個体がかかり多くなった。渡りのときには山間部のダム湖など

に飛来することがある。

十勝では十勝川温泉白鳥護岸、帯広川下流などが代表的な越冬地として知られる。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
ユーラシア高緯度(繁殖期)												

## 食性・他生物との関わり

水草（内湾ではアマモ、湖ではヨシやガマなど）の葉・茎・地下茎・根茎・種子・果実などを餌とする。

地上を歩きながらついでに草の穂をしごいたりし、水面でくちばしをグチャグチャと動かしてこしとったりもする。あるいは浅い水中に長い首を突っ込んだり、逆立ちの姿勢で上半身を入れたりして、水底の草や堆積物をついばむこともする。

人による給餌（パンくず、茶殻穀類など）にもよく集まる。



上半身を水に入れて採餌するオオハクチョウ

## 繁殖生態

日本では基本的に繁殖を行わず（→興味深い話の項参照）ユーラシア大陸の高緯度地方で繁殖する。

繁殖期は5～7月で、一夫一妻で繁殖する。

巣は湿原の水に浸かるところに水草の葉や茎を積み重ねて作る。直径3m、高さ50～70cmにもなる。

オスは巣材を渡し、メスが巣を作り、産座には自分の綿羽を敷くという。

1つの巣には4～7個の卵が生まれ、メスのみが抱卵して35～42日くらいでふ化する。

## 興味深い話

■標識調査で11年10ヶ月生存という記録がある。

■平成15年（2003）6月、ウトナイ湖でオオハクチョウのヒナ2羽の誕生が確認された。国内でのオオハクチョウの自然繁殖例は非常に珍しい。

■ヒナは両親の世話を受けて育ち、78～96日くらいで飛べるようになるという。親は激しくヒナを守ろうとする。

■繁殖に成功したものは家族群を作って換羽地へ、また越冬地へ向かう。日本などの越冬地では様々な大きさの群れを作り、ねぐらでは大群にもなるが、家族は崩さない。

■家族間の絆が深く、群れの中にも家族は崩さず、冬の群れの中で家族間の一連のディスプレイ（他の個体に対する誇示行動）がしばしば見られる。

■日本へ渡来する数は全国で1万羽前後だといわれる。

■十勝地方のアイヌ語では「レタッチリ」という。



オオハクチョウの群れ。若鳥は灰色である

## 配慮事項

冬期でも凍結しない開水面を必要とする。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985（1995 2版21刷）

「原色日本野鳥生態図鑑（水鳥編）」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、（財）日本野鳥の会 1982（1994増補版7刷）

「日本野鳥の会全国一斉調査結果報告」日本野鳥の会研究部、S T R I X 3 1985

「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978

「山川弘氏からの聞き取り記録」内田祐一（未発表）

### インターネットページ

「ようこそウトナイ湖野生鳥獣保護センターへ」

<http://www.city.tomakomai.hokkaido.jp/kankyo-seikatu/utonaihohp/index.htm>

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）  
草花

（外来種）  
草花

哺乳類

（水辺）  
鳥類

（草原・樹林）  
鳥類  
ワシ・タカ

# オオルリ

*Cyanoptila cyanomelana*

ヒタキ科・夏鳥

## 名前の由来

背中が瑠璃色にちなみ「るりてう(るりちょう:瑠璃鳥)」と呼ばれたのが、後にコルリ(小瑠璃)と区別してオオルリ(大瑠璃)になった。漢字名:大瑠璃



撮影:浦幌野鳥倶楽部

オオルリ(オス)

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)16.5cm。スズメよりも大きい。ヒタキ類の中では大きい。

オスは頭上から背が目目のさめるようなルリ色で、顔からのど、胸が黒い。腹は白い。

メスは上面が茶褐色。のどと腹は白く、胸と脇は褐色。

声:繁殖期には高い木の梢などにとまって「ピーヒーリリ、ピーピーリリ、ピールリピールリ、ジェジェツ」とよく通る声でさえざる。メスもオスに似た声を出す。

地鳴き(さえずりではない普通の鳴き方)では「クワッ、クワッ」「タッタッ」と鳴く。

類似種と区別点:オスがコルリ(オス)と、メスがキビタキのメスと似ている。

オオルリのオスはのどが黒い。またオオルリのメスはのどと腹がはっきりと白い。



撮影:叶内拓哉

オオルリ(メス)



下から見たオオルリのオス。白い腹が目立ち、その周囲はほとんど黒い

## 生息環境・分布

低山帯から亜高山帯にかけて生息し、とくに溪流沿いのよく茂った林に多い。林の中の湖の畔や林と牧場の境などでも見られるという。渡りの時期には市街地の公園でも見られる。

分布:中国東北部、ウスリー地方、朝鮮半島、日本で繁殖し、冬はインドシナ半島やフィリピンなどに渡る。

日本には夏鳥として飛来し、南西諸島を除く全国各地で繁殖する。

北海道では夏鳥で、5月上旬に渡来し、繁殖する。低山帯の森林の、特に沢沿いに多い。

十勝には、夏鳥として5月上旬に渡来。低山帯の森林に生息し、繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期					繁殖							
東南アジア(越冬期)	越冬										越冬	

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(葦原・樹林) 鳥類  
ワシ(タカ)

## 食性・他生物との関わり

空中を飛ぶチョウ、ガ、アブ、羽化した水生昆虫などの昆虫。ヒナを育てるときには青虫などの昆虫の幼虫や成虫、ムカデなどを与える。

飛んでいる虫に向かって、枝先から飛び出し捕らえて元の枝に舞い戻る、というフライングキャッチ法で捕らえる。

ジュウイチというカッコウの仲間の鳥に托卵されることがある(托卵:他の鳥の巣に卵を産み付け育てさせること)。捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は5～8月、一夫一妻で繁殖する。

繁殖地には先にオスが飛来してなわばりを決め、そこへメスが飛来してつがいとなるという。(→興味深い話の項参照)

崖、溪流近くの落葉広葉樹林内の岩または土壁に巣を作る。多量のコケと少量の木の根や落ち葉を固めて、下から見ると木のこぶのように見えるお椀形の巣を作る。産座には細

い木の根などを敷くという。

3～5個産卵し、卵はメスだけが抱く。(→興味深い話の項参照)約14日でヒナがかえり、約12日で巣立つ。

巣立ち後も約10日間オス、メス、巣立ちヒナで家族群を作るといふ。

## 興味深い話

■ジュウイチというカッコウの仲間の鳥に托卵されることがある。(托卵:他の鳥の巣に卵を産み付け育てさせること)

■よくとおる声でさえずる。コマドリ、ウグイスと並んで日本の三鳴鳥といわれる。

■さえずりにはいくつかの替え歌があり、ほかの小鳥の鳴き方をまねることもあるという。

■オスの美しいルリ色は色素による発色ではなく、光の回折や散乱によって発生する構造色と呼ばれるものである。

■繁殖地にはオスが先に来て、谷沿いに1列になわばりを作る。

■なわばり作りの初期にはオス同士は身体的な争いも含む激しい争いを行い、その際「ジッ」という音や「パチン」というくちばしを鳴らす音が聞こえるという。

■ヒタキ類の中では遅くまでさえずる方で、8月上旬までさえずることがある。

■巣の近くに捕食者を発見した場合に、メスもさえずるともいふ。ヒナの巣立ち後もその近くの危険に対してさえずるともいふ。

■また、メスがオスと並んで交互にさえずることがあるという。

■メスの抱卵中、オスは木の梢でさえずっていて、メスが採餌のために巣を離れると一緒に連れ立って餌を食べるといふ。



オオトリのオス

## 配慮事項

山地の、特に溪流沿いの樹林が大事。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「鳥のおもしろ私生活」ビッキオ 編著、主婦と生活社 1997  
「野鳥の生活」羽田健三 監修、築地書館 1975  
「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. I ~ III」清棲幸保、講談社 1978

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原・樹林)  
鳥類  
フシ・タカ

# オオワシ

*Haliaeetus pelagicus*

タカ科・冬鳥

## 名前の由来

オオワシは「大きい鷲」の意。ワシは悪い鳥なので「悪し(あし)」から、車輪状に飛ぶので「輪如(わし)」から、動きが敏捷なので「捷(はし)」から、など諸説ある。

漢字名：大鷲



オオワシ

## 特定種

文化財保護法：天然記念物

種の保存法：国内希少動植物種

国レッドリスト(2007)：絶滅危惧Ⅱ類(VU)

北海道レッドデータ：絶滅危惧種(En)

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)オス88cm、メス102cm、翼を開いたときの端から端までの長さ220~245cm。トビよりずっと大きい、日本最大のワシ。翼は長くて幅広く、飛んでいるときには後縁がふくらんで見える。

黄色く大きなくちばしと、くさび型の白い尾が目立つ。成鳥では翼の前面が白色で、とまっている時は肩が白く見える。他の部分は黒褐色(細かく見ると額や腿のところも白い)。

声：ずっと鳴いているようなことはないが、警戒するときには「カッカカッ」と鋭く鳴き立てる。また、争うときなどには大声で「ガッガッガッ」とか「キャッキャッ」などと鳴いたりするという。

飛び方：ゆっくりと羽ばたき、時々滑空もしながら直線的に飛ぶ。翼を広げて円を描くように飛ぶこともある。

魚を捕るときには、海や湖の上空を旋回し急に高度を下げ水面に舞い降りて捕らえたり、低空を旋回したり直線的に飛んでそのまま降下して捕らえたりする。

類似種と区別点：オジロワシ。

オオワシの幼鳥や若鳥はオジロワシに似るが、オジロワシよりくちばしが大きく、尾も長く明瞭なくさび型。

オジロワシの尾は短くくさび形。



オオワシ。白く長い尾、白い肩(翼前縁)、長く幅広い翼



オジロワシ。白く短い尾、小さめのくちばし、四角っぽい翼



## 生息環境・分布

主に海岸や河口、海に近い湖沼で越冬する。十勝には11~3月にくる冬鳥。

分布：オホーツク海北部の沿岸域やカムチャツカ半島のみで繁殖する。冬は南下して、カムチャツカ半島南部、朝鮮半島、日本で越冬。中国南部やヤクーツク、アラスカまで移動するものもいる。

日本では冬鳥として本州中部以北に渡来し、越冬する。北海道には冬鳥として全道の沿岸などに渡来するが、山地の沢沿いにも渡来する。

十勝には冬鳥として主に沿岸~下流部に渡来するが、新得など山地の川沿いや湖沼などにも渡来する。千代田新水路に、迷い込んだ魚をとりに来ることもある。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■										■	
サハリン以北(繁殖期)			■									

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原)  
鳥類  
シタビ

## 食性・他生物との関わり

主に大型魚類。カモなどの水鳥やウサギなどの中型哺乳類を捕食する事もある。

とまり場から飛び上がり、海や湖の上空を翼を広げて旋回し、あるいは低い高度を旋回したり直線的に飛んだりして、

急激に高度を下げて水面に舞い降りて魚を捕らえる。繁殖分布が太平洋から遡行するサケの分布域と一致する。捕食者であり、食物連鎖の頂点にたつ種のひとつ。成長してしまえば他の生物に襲われることはあまりない。

## 繁殖生態

日本では基本的に繁殖を行わず、オホーツク海北部の沿岸地域やカムチャツカ半島でのみ繁殖する。

アムール川下流域で、3月末から4月始めにかけて渡来し、一夫一妻で繁殖する。

巣を中心としたなわばりを、つがいごとに持つと考えられている。

海や湖の近くの森林や沿岸の崖で繁殖する。カムチャツカではダケカンバ林で営巣している。営巣地は魚の捕れる海岸、サケ類の産卵する河川や湖の周辺など。

巣は展望が開けた針葉樹の枝の上や、海岸・湖岸の岩の上に作られる。皿形で、直径3m高さ2mに達するものもあるという。

1～3個卵を産み、34～36日でヒナがかえる。ヒナは全身灰白色の幼綿羽に覆われている。

6月中旬にふ化したヒナは8月下旬、遅いものは9月に巣立つという。



十勝川河口付近のオオワシ。北海道には冬やってくる

## 興味深い話

■オオワシはサケ・マス類を主食としていて、繁殖分布が太平洋から遡行するサケの分布域と一致するという。

■名前のおお、日本では最大のワシ。

■世界的にみるとオジロワシがヨーロッパとアジアの亜寒帯・温帯に広く繁殖分布するのに対して、オオワシは分布が非常に狭く、繁殖地はロシアオホーツク沿岸・カムチャツカやサハリン北部などで極東に集中している。

■世界全体のオオワシのうち70%がカムチャツカ半島南部と北海道で越冬するという。

■冬には明確ななわばりを持たず、魚が豊富な時期には同じ水域に数百羽が集中することもあるという

■越冬期にはいつも決まった樹木や岩崖を集団でねぐらと

する。

■餌不足の年には、先に生まれたヒナが後に生まれたものを襲い、くちばしで頭をつつき、頭をくわえて巣の中を引きずり回すという。

■越冬期の餌が十分な場合には、どのつがいもうまく繁殖に入り、産卵数も最大数に近く、有精卵となるという。

■オジロワシほど内陸に入らないが、最近ではシカ猟後の放置された死体を食べに、山間部へも飛んでくるようになったという。

■十勝でのアイヌ語名は不明。

## 配慮事項

シカ猟後の残された死体につく事があり、銃弾による鉛中

毒などが懸念されている。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「日本動物大百科 第3巻 鳥類I」日高敏隆監修、平凡社 1996

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「図鑑 日本のワシカ類」森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男、文一総合出版 1995  
「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978

花輪伸一・柚木修・山田元一郎・V. M. Khrabryi・E. P. Sokolov・S. I. Fokin・V. B. Masterov (1989) ソ連極東ウデイル湖岸におけるオオワシの繁殖生態. Strix, 8 : 219-232.  
Lobkov, E. G. (1991) カムチャツカのオオワシ—明らかにされた繁殖生態 (進士古径訳). アニマ, 231 : 76-83.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 花

(外来種) 花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# オジロワシ

*Haliaeetus albicilla*

タカ科・冬鳥（一部留鳥）



オジロワシ

## 名前の由来

オジロワシは「尾の白い鷲」の意。ワシは悪い鳥なので「悪し(あし)」から、車輪状に飛ぶので「輪如(わし)」から、動きが敏捷なので「捷(はし)」から、など諸説ある。漢字名：尾白鷲

## 特定種

文化財保護法：天然記念物

種の保存法：国内希少動植物種

国レッドリスト（2007）：絶滅危惧 I B 類（EN）

北海道レッドデータ：絶滅危惧種（En）

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オス80cm、メス95cm、翼を開いたときの端から端までの長さ180～230cm。トビよりもずっと大きい。

成鳥は、尾が白く短くさび形をしている。全体的に褐色。

頭部の色が淡いものが多い。くちばしと足は黄色い。

飛んでいるとき、翼は幅広く四角い感じに見える。

若鳥の尾は白くなく黒褐色で、くちばしも灰色っぽい。

声：繁殖期以外はほとんど鳴かない。

繁殖期には巣の近くで警戒するとき「カッ、カッ、カッ」と鳴く。また、けんかをするときには「クラッ、クラッ、カカカカッ」と鋭い大きな声で鳴くという。

飛び方：ゆっくりと羽ばたき、時々滑空もしながら直線的に飛ぶ。翼を広げて円を描くように飛ぶこともある。

餌を捕るときには、水面を低く飛び脚を垂らして魚を捕まえたり、上空から肩をすぼめて急に高度を下げ地上や氷上の鳥などを捕らえたりする。

類似種と区別点：オオワシ。

オオワシは成鳥では肩の部分の白色が非常によく目立つ。

また、オオワシの尾が明瞭な長くさび型だが、オジロワシでは短くさび型。

若鳥は似ているが、オオワシのくちばしは大きく目立つ。



オジロワシ。白く短い尾、小さめのくちばし、四角っぽい翼



オオワシ。白く長い尾、白い肩(翼前縁)、長く幅広い翼

## 生息環境・分布

河川沿い、湖沼、海岸沿いに生息するが、川沿いに内陸にも入る(日本野鳥の会十勝支部、1983)。十勝には11～3月にくる冬鳥であるが一部夏にもとどまる。

分布：ヨーロッパとアジアの亜熱帯・温帯で繁殖し、温帯から熱帯にわたって越冬する。

日本では冬鳥として北海道、東北地方、日本海沿岸に渡来

する。北海道では一部留鳥。

北海道には冬鳥として渡来するが、一部は夏にもとどまり少数が繁殖している。主に東部と北部で繁殖する。

十勝には冬鳥として渡来するが、一部は夏にもとどまり少数が繁殖している。河川沿い、湖沼、海岸沿いに生息する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	[Bar chart showing presence from March to November]											
サハリン以北(繁殖期)	[Bar chart showing breeding from March to October]											

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) ウシ・タカ



## 食性・他生物との関わり

海鳥やカモ類などの鳥類、魚類、哺乳類（アザラシの幼獣など）を食べる。動物の死体なども食べるが、明らかに腐った物は食べない。

餌を捕るときには、水面を低く飛び足を垂らして魚を捕まえたり、上空から肩をすばめて急に高度を下げ地上や氷上の鳥などを捕らえたりする。

捕食者であり、食物連鎖の頂点にたつ種のひとつ。成長してしまえば他の生物に襲われることはあまりない。



魚を求めて川に飛来するオジロワシ

## 繁殖生態

繁殖期は3～8月、一夫一妻で繁殖する。

1～2月になるとつがいはいは求愛行動を始める。(→興味深い話の項参照) 繁殖期になるとつがいごとになわばりを持つ。繁殖地は海岸近くか付近に川や湖沼のある森林で、ミズナラ、ダケカンバ、トドマツ、エゾマツなどの古巣を補強しながら、大きな皿形に巣をつくる。

巣作りは一年中行われるが、産卵期の3月になると活発になるという。巣の補強はオスメスともに行うが、枝を積み上げるのは主にメスが行うという。

3月下旬に1～2（まれに3～4）卵を産む。主にメスが卵を抱くが、メスが巣を離れるとすぐにオスが代わりをつとめるといふ。

37～40日でヒナがかえり、ヒナは全身に淡灰色の幼綿羽が密生する。オスメス共同でヒナを育てる。

70～90日で巣立つ。巣立ちまでの期間は個体によって大きく異なる。また巣立ち後も時々巣に戻って親から餌をもらいうという。

## 興味深い話

■求愛行動としては、オスメスがそれぞれ枝などにとまって向かい合い、オスが翼を広げて頭を上げるもの、オスが頻りにメスの上を飛んだり「クワッ、クワッ、クワッ」と鋭く鳴きながら追いかけてあうものなどがある。

■さらに、メスが300mほど上空で突然仰向けになり、オスに向かって足指を握ったり広げたりして見せ、そこへオスが上空から突進して互いに爪を絡ませ、海面すれすれまで落下する、という求愛行動も繰り返されるといふ。

■何らかの原因で親がヒナに餌を与えずにいると、強い方のヒナが弱い方のヒナを殺して食べることがあるという。

■オオワシが極東に分布しているのにくらべ、オジロワシは広く分布している。北海道には冬鳥として渡来するものが殆どだが、少数は海岸や内陸湖沼などで繁殖している。国外ではユーラシア大陸の北部と東部、アイスランド、グリーンランド、サハリン、千島列島などで繁殖しており、国後島ではトビよりも多いが、西欧では絶滅寸前である。

■十勝地方のアイヌ語名は不明。

## 配慮事項

シカ猟後の残された死体につく事があり、銃弾による鉛中毒などが懸念されている。

少数が海岸や内陸湖沼などで繁殖しているが、その様な場合にむやみに近づくとな繁殖に悪影響を与える可能性がある。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「日本動物大百科 第3巻 鳥類I」日高敏隆監修、平凡社 1996

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995  
「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978

日本野鳥の会十勝支部 (1983) 北海道十勝地方におけるオジロワシとオオワシの分布. *Strix*, 2 : 53-58.

岩見恭子・川辺百樹・石毛千栄子 (1998) オジロワシのカラマツ植林地での繁殖. *ひがし大雪博物館研報*, 20 : 75-78.  
森信也 (1980) オジロワシの繁殖生態. *鳥*, 29 : 47-68.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類

# オナガガモ

*Anas acuta*

カモ科・旅鳥（一部越冬）



オナガガモ（オス）

## 名前の由来

尾が長くながっているカモであることに由来する。古くは「さきがも」「さくがも」とも呼ばれた。「カモ」は「浮かぶ→うかむ→かむ→かも」だとする説や「雁（ガン）→かむ→かも」だとする説がある。漢字名：尾長鴨

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オス75cm、メス53cm。首が長く、オスの尾は長くのびていて、メスの尾も他の種に比べて長い。足は鉛灰色。

オスの頭は黒褐色で胸と腹の中央は白い。首から頭の側面やや後ろに白い線が入っている。くちばしは黒くて両側は青っぽい鉛色。背と脇は灰色で、腰の両側に淡い黄色の斑がある。翼の後縁は白い。

メスは褐色で黒っぽい斑がある。くちばしは黒くて両側は灰色である。

声：水面で泳ぎながら、オスは「ピリッ、ピリッ、ピリッ」とコガモに似た声で鳴くことがある。群れの場合には「プリッ、プリッ」と小声で鳴き合っていることがよく観察される。メスは「クワッ、クワッ」というような声で鳴く。  
類似種と区別点：ヒドリガモ、ヨシガモ、マガモ、ハシビロガモのいずれもメス。

ヒドリガモのメスは頭部の褐色味が強く、尾はとがらない。ヨシガモのメスはくちばしが黒く、尾は長くない。マガモのメスはくちばしと足がオレンジ色。ハシビロガモのメスは足の色がオレンジ色。



オナガガモのオス（右）とメス。オスは尾が長く、メスも他の種に比べると長い。オスの頭側面の白線も印象的

## 生息環境・分布

湖沼、河川。十勝には主に春と秋にくる旅鳥。

分布：ユーラシア大陸と、北アメリカ大陸の中高緯度地方に繁殖分布し、冬は両大陸南部とアフリカ大陸、中央アメリカに渡って過ごす。

日本では、主として本州から九州にかけて越冬する。北海道（十勝でも）では旅鳥。河川や湖沼に生息する。ハ

クチョウの餌付けされている所には多い。

十勝では、十勝川温泉白鳥護岸などで少数越冬している。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■	■	■	■					■	■	■	■
本州以南 （越冬期）	■	■	■								■	■
ユーラシア中高緯度 （繁殖）				■	■	■	■	■	■	■		

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）  
草花

（外来種）  
草花

哺乳類

（水辺）  
鳥類

（葦原・樹林）  
鳥類

## 食性・他生物との関わり

水草の種子や破片、水生昆虫を食べる。夜間湿地などで採食する。

浅い水たまりや池の縁などで、くちばしを水につけてグチャグチャと動かしてこしとるといふ。また浅い水底に首を入れたり、逆立ちするように上半身を入れたりして、採餌する。比較的長い首を持っているので、いくらか深い水底を利用できるが、潜って採食はしない。

しばしば人に餌づけられる。

捕食者は猛禽類など。



キンクロハジロ(手前)と一緒にいるオナガガモのオス(右)とメス

## 繁殖生態

日本では基本的に繁殖せず、ユーラシア大陸の中高緯度地方などで繁殖する。

繁殖期は5～7月。一夫一妻で繁殖するが、抱卵期になるとつがいは解消されるという。

巣は水辺の草むらになった地上で、枯れ草などを用いて皿形に作られる。メスが作り、産座には自分の綿羽を敷くという。

1つの巣につき7～9個の卵が生まれ、抱卵はメスのみ、22～24日くらいでふ化する。

## 興味深い話

■つがいの形成は12月ごろから4月ごろまで行われ、1～2羽のメスをめぐり、オスのグループディスプレイ(ディスプレイ:メスや他の個体に対して誇示をおこなう特徴的な行動)がよく見られる。オス達は下くちばしを引いて押し合うように、1羽のメスを群れから引き離し、ピロピロッと鳴きながら、メスの周りを泳ぎ回り、首を上げて下くちばしを引き、胸を上げ下げし、尾羽を上げるディスプレイを盛んに行う。

■オスどうしの対立のディスプレイは首を斜め上に向け、上下に振りながら相手に迫っていくもので、すべてのカモ類に共通である。またメスのオスに対する行動もすべてのカモ類に共通で、水面につくくらいに首を水平に伸ばして前に泳ぐディスプレイである。

■十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般(特にマガモ)を「ウォルンチカブ=水の中にいる鳥」という。



オナガガモ(メス)

## 配慮事項

水草や水生昆虫の生息する開放水面が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「最新版 北海道の野鳥」藤巻裕蔵監修・小堀煌治解説・北海道新聞社編、北海道新聞社 1997  
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# カッコウ

*Cuculus canorus*

カッコウ科・夏鳥



カッコウ

## 名前の由来

「カッコウ」という大きな鳴声による。漢字名：郭公

魚類

底生動物

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）35cm。尾は長く、くさび形。翼の先はとがる。頭部と体上面は青っぽい灰色。胸と腹は白く、細い黒帯が並ぶ。

声：繁殖期には「カッコウ、カッコウ」と大きな声で鳴く。少ししゃがれたような声で鳴くこともある。時々「カッカコー」と鳴いたり、「ゴーア、ゴーア」といった声も出したりする。「ポッ、ピピピピ」という声が地鳴き（さえずりではない普通の鳴き方）と言われている。

類似種と区別点：ツツドリ、ホトトギス。

ツツドリは下面の横斑が太くて粗い。

ホトトギスは小さく、胸の横斑が太くて少ない。

外見での区別は困難だが鳴き声には特徴があり、ツツドリは「ポポ、ポポ」、ホトトギスは「キョッキョッ、キョッキョキョキョ」と鳴く。

十勝にホトトギスはまず来ない。



カッコウ。さえずるときには背筋を伸ばすようにして尾羽を上げ下げする



類似種のツツドリ(円内も)

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシタカ

## 生息環境・分布

高原、明るい林、川原、低木が生えた草原、農耕地周辺に生息する。

分布：ユーラシア大陸全域とアフリカ大陸東部で夏鳥として繁殖する。東南アジアやアフリカ大陸南部では冬鳥。

日本には夏鳥として渡来し、北海道から九州までの各地で

繁殖する。

北海道（十勝にも）には夏鳥として5月中・下旬に渡来し繁殖する

十勝には、平野部の農地、河川敷など開けた環境に生息、繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期						繁殖						
東南アジア(越冬期)												

## 食性・他生物との関わり

主食は昆虫で、樹上でガなどの幼虫を好んで食べる。北海道では、ノビタキ、コヨシキリ、アオジなどに托卵す

る。(→興味深い話の項参照)  
捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は5～8月。オスは木の葉をくわえてメスに求愛するという。特定のつがい相手を持たない可能性もあるが詳しくは不明。

メスは卵を預ける他の鳥の巣から1個卵をくわえとり、その巣に自分の卵を1巣あたり1個産卵する(托卵という)。北海道ではノビタキ、コヨシキリ、アオジなどに托卵する抱卵は托卵された巣の親(仮親という)が行い、10～13日後に孵化、ヒナは20～23日で巣立つ。ヒナの世話も仮親が行う。(→興味深い話の項参照)



「仮親」となるコヨシキリ。全長13.5cmとカッコウの成鳥の半分にも満たない。育てているうちにカッコウのヒナに追い越される

## 興味深い話

■他の鳥の巣に卵を産みつける托卵を行う。メスは托卵相手の巣から卵を一つ取り出し、自分の卵を産む。北海道ではノビタキ、コヨシキリ、アオジなどに托卵する。卵は仮親の卵とよく似ている場合が多い。ヒナはいち早く孵化し、仮親の卵を巣から放り出す。

■カッコウ全ての托卵相手は日本全体で計28種に及ぶが、それぞれ1羽1羽は、自分の育て親と同じ種の鳥を托卵相手に選ぶという。

■托卵はいつも成功するわけではなく、托卵された鳥が気が付いて、カッコウの卵を放り出すこともある。托卵される側の鳥も、カッコウを覚え、カッコウが托卵しようとするのを撃退する行動をとるものもいる。全ての鳥に攻撃されるようになってしまったら、カッコウはどうするのだろうか。

■長野県では数十年前までホオジロが主な托卵の相手だったが、ホオジロがそれに気がついたようで、巣を放棄したりカッコウの卵を捨てるものが増え、現在ではホオジロ専

門のカッコウが減ってしまったらしいという。

■一方で新たな托卵相手を見つけるという報告(1970年頃から長野県などでオナガを相手にし始めた)もある。この場合、卵の模様が似ている家系が生き残るのではないかと、いわれているようだ。

■十勝に生息する托卵鳥は、他にツツドリとジュウイチがいる。北海道全体になるとホトトギス加わる(すべてカッコウ科)。

■カッコウが鳴く頃になると霜の心配が少なく、農家の人が種をまく目安とした、ということから「種まき鳥」と呼ばれることがある。

■「かんこどり」ともいい、かんこを「閑古」とあてて、商売などがはやらないときに「閑古鳥が鳴く」という。

■十勝地方のアイヌ語では「カッコク」「カッコクカムイ」などという。「カッコク」は「カッコウ」と同じく鳴き声に由来する。

## 配慮事項

林と草原が入り混じったところが大事。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987

「鳥のおもしろ私生活」ビッキオ 編著、主婦と生活社 1997  
「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978  
「広辞苑 第三版」新村出 編、岩波書店 1983  
「カッコウの生態」I. Wyllie著、安部直哉 訳、どうぶつ社 1981  
「復刻版 野の鳥の生態 1～5巻」仁部富之助、大修館書店 1979  
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004  
「本別町生活文化誌 抜刷 第九編 アイヌの生活と文化」

Nakamura, H. (1990) Brood parasitism by the Cuckoo *Cuculus canorus* in Japan and the start of new parasitism on the Azure-winged Magpie *Cyanopica cyana*. Jap. J. Ornithol., 39 : 1-18.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原樹林)  
鳥類

# カルガモ

*Anas poecilorhyncha*

カモ科・夏鳥（一部越冬）

## 名前の由来

万葉集の歌でうたわれた「軽ヶ池」からきたといわれる。単にカルと呼ばれる。色が泥のようなので泥鴨とか、夏にもいるので夏鴨とも呼んだ。「カモ」は「浮かぶ→うかむ→かむ→かも」だとする説や「雁（ガン）→かむ→かも」だとする説がある。漢字名：軽鴨



カルガモ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）61cm。オスもメスも同じ色。体は褐色で黒褐色の斑がある。頭の前部から頭頂を通して首の後ろまで髪の毛のように黒褐色。顔は淡い色で特徴のある2本の黒い線が走る。翼鏡（翼の上面中程の後縁にある金属光沢をした羽）は青色。足がオレンジ色、くちばしは黒く、先が黄色い。

声：オスもメスも「グェッ、グェッ」という濁った声で鳴く。水面から飛び立ったときには、たいていの場合「グェッグェッグェッ」と鳴き交わし、飛んでいるときにも同じように鳴くことがあるという。

類似種と区別点：マガモ、オカヨシガモ、ハシビロガモのメス。

マガモのメスはくちばしが黒くて周囲がオレンジ色、青色の翼鏡（翼の上面中程の後縁にある金属光沢をした羽）の上下に2本の白線があり、尾は白っぽい。

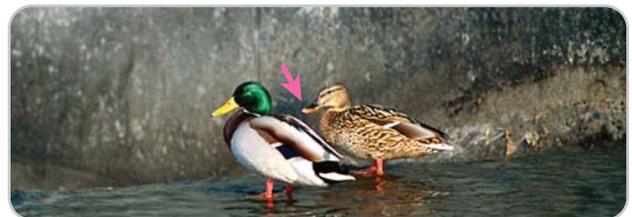
オカヨシガモのメスは少し小さくて、次列風切（翼後縁の

中程の羽）が白く、足は黄色。

ハシビロガモのメスはくちばしが大きく、雨覆（翼上面の体よりの羽）の色は青灰褐色。



カルガモ。くちばしの先が黄色い。顔の模様もくっきりしている



マガモのオス（左）とメス。マガモのメスのくちばしは周囲がオレンジ色

## 生息環境・分布

河川、湖沼、水田、湿地、干拓地、干潟など。繁殖期には草むらや藪の多い水辺に多い。十勝では主に夏鳥だが、越冬するものもいる。

分布：ユーラシア大陸東部のバイカル、ウスリー地方から中国を経てインドまで繁殖分布し冬は東南アジアまで渡って過ごすものもある。

日本全土に分布し、本州以南では留鳥として一年中いる。

北海道（十勝でも）では夏鳥で繁殖する。河川や湖沼に生息する。都市の公園で見られるカモ類ではマガモに次いで多い。北海道東部ではマガモに比べると少ない。

十勝では、主に夏鳥として主に河川の中～下流に飛来し繁殖するが、帯広川下流などで少数が越冬している。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
本州以南 (越冬期・通年)	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
					繁殖						一部越冬	

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類

## 食性・他生物との関わり

雑食性。草の葉・茎・種子などを主に食べ、水生昆虫や貝なども食べるという。

湿地を歩きながらついでに、草の穂をくわえてこそぎ落としたりする。また、水草のある岸辺の水面に浮き、首を伸ばしてくちばしを水面に置くようにしてグチャグチャと動かし、こしとるように採餌する。あるいは浅い水面で

首を水中に入れたり、逆立ちするように上半身を水の中に入れたりして、水底の植物をとりもする。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は4月～7月。12月から翌2月頃につがいが形成され、一夫一妻で繁殖する。つがい形成時には複数のオスがメスに求愛するグループディスプレイ（集団誇示行動）がみられる（→興味深い話の項参照）。つがいは産卵後抱卵期に解消されるという。

巣は水辺近くの草むらや藪の下で乾いた地上に作られるが、水辺から離れた場所に作られることも多いという。浅いくぼみに草の葉などを敷いた皿形。メスだけが作る。

10～12個の卵を産み、抱卵日数24日～26日、メスだけが抱卵する。カモ類は間をおかずにふ化し、親とともに一斉に巣から離れる。



カルガモの親子。ヒナの面倒はメスだけがみる

## 興味深い話

- 標識調査で7年11ヶ月生存という記録がある。
- 冬は群れをつくり、大きい開水面では大群になる。
- つがいの形成時の12月ごろから翌年2月ごろには、オスの求愛のグループディスプレイ（ディスプレイ：メスや他の個体に対して誇示をおこなう特徴的な行動）が見られる。2～10羽くらいのオスが集まり、1～2羽のメスの周りを泳ぎ回る。そして頭を上げて急に縮め、尻を上げるという動作を行う。
- 繁殖期にはつがいとなって分散するが、小さい島や湿地などで、しばしばコロニー（集団営巣地）状に多数のつがいが集まって営巣することがある。
- 真冬に決まったつがいもメスが卵を抱く頃には解消される。初夏にヒナをたくさん引き連れているのは母ガモである。巣から水辺にヒナを連れて行く際、普通は歩かせて行くが、親鳥がヒナを1羽ずつくわえたり、体にしがみつかせたりして飛んで運ぶという観察例もあるという。また急

流を泳ぎ渡る際、ヒナは親の上流側に密集していくという。

- 十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般（特にマガモ）を「ウォルンチカブ＝水の中にいる鳥」という。



カルガモの親子

## 配慮事項

繁殖には草むらや藪の多い水辺が必要である。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985（1995 2版21刷）  
「原色日本野鳥生態図鑑（水鳥編）」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ、主婦と生活社 1997  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982（1994増補版7刷）  
「野の鳥の生態 復刻版 1～5巻」仁部富之助、大修館書店 1979  
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# カワアイサ

*Mergus merganser*

カモ科・留鳥



カワアイサ (オス)

## 名前の由来

大きな川などにやってくるアイサだから。アイサの古名は「あきさ」で秋の早く（あきさ）に渡ってくることに由来するという。漢字名：川秋沙

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原) 鳥類  
ワシ  
シタカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オス71cm、メス60cm。くちばしは細長くて先に鉤（かぎ）があり、色は赤い。オスの頭部は緑黒色で長い冠羽（頭部の飾り羽）はない。背は黒く、胸は白く、体の下面は白くて淡紅色を帯びている。初列風切（翼後縁の先端付近の羽）は黒く、雨覆いと次列風切（翼後縁の中程の羽）は白い。くちばしと足は赤い。メスの頭部は栗色で冠羽があり、首が白く、胸、脇、背は灰色、頭部の栗色と首の白との境界は明瞭。

声：鳴くことはきわめて珍しい。オスは「アーフォー、アーフォー」と鳴き、メスは「グワッグワッグワッ」と低い声で鳴くという。またオスが飛びながら「グワッ、グワッ」と鳴いたという観察例があるという。

類似種と区別点：ウミアイサ。

カワアイサもウミアイサも赤いくちばしを持つが、ウミアイサの冠羽（頭部の飾り羽）はよく目立つ。またウミアイサのオスの胸は茶色く黒い縦斑があり、メスの首は灰色で頭の栗色との境界をはっきりとしていない。

カワアイサはアイサ類（ミコアイサ、ウミアイサ）の中では最も大きい。



カワアイサのオス。緑の頭、赤く長く鉤型のくちばし、白い胸



カワアイサ。繁殖終了後からつがいづくりまでの間にはオスもほとんどメスのようになる。左は冠羽が見えるのでメスだと思うが、右は冠羽が目立たないのでオスのようでもある。

## 生息環境・分布

低地の河川、湖沼に生息する。十勝では留鳥。

分布：ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の中緯度地方に広く繁殖分布し、冬は両大陸南部に渡って過ごす。

日本ではほぼ全土に冬鳥だが北海道では繁殖。

北海道では留鳥で繁殖する。山間部や平野部の湖沼や河川

に生息し、その周辺の森林で繁殖する。

十勝では、留鳥として河川の上～下流まで広く分布、繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期					繁殖							



## 食性・他生物との関わり

魚類を主に食べる。

頭を水中に入れて泳ぎ回っていることがよくあるが、魚を探しているのだといわれている。巧みに水中に潜り、魚を追いかけて捕まえる。捕らえた魚はくわえたまま浮き上が

り、水面で飲み込む。

繁殖には樹洞を利用する。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は4月～6月。

つがいは前年の11月頃、1～2羽のメスをめぐる数羽のオスのグループディスプレイ（→興味深い話の項参照）によって形成される。一夫一妻。

樹洞（あるいは草むら）に営巣する。メスだけが巣作りを行い、産座には自分の綿羽を敷くという。

7～13個の卵を産む。抱卵日数は30～35日。つがいは抱卵期に解消され、メスのみが卵を抱く。

ヒナは他のカモ類と同様、間をおかずにふ化し、親とともに一斉に巣を離れる。

ふ化後60～70日くらいでヒナは独立するという。



カワアイサの親子。ヒナの面倒はメスだけがみる

## 興味深い話

■1998年に音更町の市街地の神社境内で繁殖した例がある。

■魚を捕らえるため潜水する際、水中には20～110秒ぐらい潜り続けられ、深さ2～3m、ときには4mぐらいまで潜る。

■くちばしは一般的なカモ類とは異なり、細長くて先に鉤があり、上下のくちばしには表皮が変形した歯状の突起が並んでいて、魚を捕らえやすくなっている。

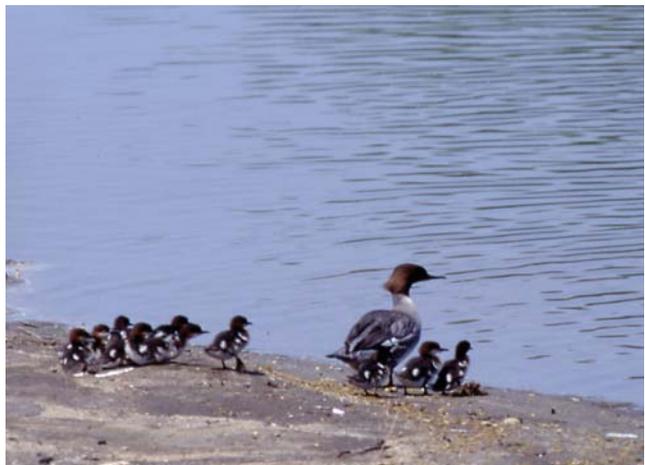
■11月頃つがいを作る際、オスは数羽で1～2羽のメスをめぐるグループディスプレイ（ディスプレイ：メスや他の個体に対して誇示をおこなう特徴的な行動）を行う。オスは首を上へ伸ばしてくちばしを上に向けたり、冠羽（頭の飾り羽）を逆立てて首を前後に投げ出すようにするという。

■1本の樹木の樹洞に3～4羽、あるいは10羽ものメスが巣を作ることがあるという。

■冬は単独やつがいで、あるいは小さな群れで見られるが、

時には数千羽の大群になることもあるという。

■十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般（特にマガモ）を「ウォルンチカブ＝水の中にいる鳥」という。



カワアイサの親子。ヒナははぐれたり天敵に襲われたりして徐々に減っていく

## 配慮事項

魚の生息する開水面が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)

「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994

増補版7刷)

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

Cramp, S. K. E. L. Simmons (1977) Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Vol. II. Oxford Univ. (eds.) Press, Oxford.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# カワガラス

*Cinclus pallasi*

カワガラス科・留鳥



カワガラス

## 名前の由来

川にすみ、カラスのように全身黒いことに由来すると思われる。漢字名：河鳥

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）22cm。全身チョコレート色で足は銀灰色。尾が短い独特の体型を持つ。

声：飛びながら力強く「ビッ、ビッ」と鳴く。

さえずりは早春の頃から。川の中や岸辺の岩や倒木にとまり、「ピスピス、ジョッジョッ、ピリッ、ピス、ジュビチュリリ」などと細かく複雑なさえずり方をするという。またさえずりを「チチージョイジョイ」と聞く人もいる。



カワガラス。色は黒っぽい独特の体型を持つ

## 生息環境・分布

低山帯から高山帯までの河川。川の上流部で岩や大きな礫の間を清流が流れているところを好むという。十勝では留鳥。季節的移動は少ないが、秋から冬にかけては平野部の河川に姿を見せることもある。

分布：ユーラシア大陸東部のウスリー地方から中国東部を経て、タイ北部、ヒマラヤに分布。

日本では、北海道、本州、四国、九州、屋久島まで留鳥として繁殖する。

北海道（十勝でも）では留鳥。繁殖する。河川上流部に生息する。秋から冬にかけては、平野部の河川に飛来することがある。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
					繁殖							

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 食性・他生物との関わり

カワゲラやトビケラ、カゲロウなど水生昆虫類を主に食べ、小魚も食べる。

浅い流水を歩いて採食したり、深いところでは水中に潜って採食したりする。水中では羽を半開きにして泳ぐように

したり、水底を歩いたりしているという。トビケラ類の巣からは幼虫をほじくり出したりもする。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は4月～6月（北海道）。

一夫一妻で繁殖する。

オスは岩の上などでさえずってなわばりを宣言する。なわばりは400～1,100mほどでオスは脅しのディスプレイ（他の個体に対して誇示をおこなう特徴的な行動）や、激しい追跡を行ってなわばりを守る。

滝の裏側や崖の裏側などの隙間、水辺近くの岩の割れ目やくぼみなどに営巣する。外側には大量のコケ類を用いて直径30cmものドーム状に作り、内側には枯草や枯葉を用いる。外はぬれていても中は乾いているという。

4～5個の卵を産む。抱卵はメスのみが行うが、オスも巣が見えるところから監視する。抱卵日数は15～21日くらい

で、育雛日数は22日くらいだという。

## 興味深い話

■羽毛が密生していて、尾部に大きくふくらんだ脂腺といわれる油壺があり、常に油を羽毛に塗りつけているので、水に入っても濡れることがない。

■潜水して水底を歩いたり、短い翼で水中を泳いだりして餌を捕らえる。こうした習性は日本ではカワガラスのみに見られる独特なもの。また、水に潜っているときは、羽についた空気の層が銀色に光って見えるという。

■潜水しているときには目を白い「瞬膜」（眼をまもる薄い膜）で保護するという。

■外敵などが近寄りたいたい滝の裏などにコケを材料にドーム状の巣をつくる。

■冬にはオスもメスも9割が、単独でなわばりを作って分散するという。

■冬にしる繁殖期にしる、なわばりを持った際には防衛の

ための行動を行う。水面上を「ビッ」と鳴きながら低く飛んでいくと、なわばり所有者が「ビッビッビッ」と連続音で叫ぶように鳴く。通過個体はこれでなわばり所有者の存在に気づくようで、激しい戦いや追いかける行動が始まるのだという。

■カワガラスはメスもさえずる。

■足寄（アイヌ文化では釧路地方の文化圏）などのアイヌ語では「ウォルンカッケウ」という。

## 配慮事項

水生昆虫などが豊富で、滝があるような溪流が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985（1995 2版21刷）  
「原色日本野鳥生態図鑑（陸鳥編）」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982（1994増補版7刷）  
「野鳥のくらし」水野伸彦、保育社 1996

「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ、主婦と生活社 1997

羽田健三・腰原正己（1969）カワガラスの生活史に関する研究。信大志賀自然教研業績、8：49-57.

浅見良平・芳賀良一（1983）北海道の十勝川上流におけるカワガラスの個体群生態に関する研究。鳥、32：75-94.

橋口大介・山岸哲（1981）冬季におけるカワガラス *Cinclus pallasii* の分散様式となわばり的行動。日生態会誌、31：161-170.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# カワセミ

*Alcedo atthis*

カワセミ科・夏鳥



カワセミ

## 名前の由来

平安時代までこの鳥をソビ、ソニといい、それが転じてセミとなった。そこに川がついてカワセミとなった。魚をとるため、「河の瀬を見る」鳥なので、カワセミ（河瀬見）になったという説もある。漢字名：翡翠

魚類

底生動物

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）17cm。光沢のある緑色、コバルト色、オレンジ色に彩られた美しい鳥。背面はコバルト色。腹面はオレンジ色で下腹は白い。頭上や翼、尾は金属光沢のある緑色。目の下はオレンジ色でその下は緑色。足は赤。体に比べて頭が大きくくちばしが長い。オスのくちばしは黒く、メスの下くちばしは赤い。

声：川面を飛びながら「チーッ」あるいは「ツチーイ」、「ツー」などと鋭い声で鳴く。飛び立つときにも2～3声鳴く。繁殖期には木の枝にとまって「チィチィチィ」と小声でオスとメスが鳴き交わすことがあるという。



カワセミの腹（上）と背中（下）

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

（在来種）  
草花

（外来種）  
草花

哺乳類

（水辺）  
鳥類

（葎原・樹林）  
ワシタカ  
鳥類

## 生息環境・分布

平地から山地の河川、湖沼、湿地、小川など。水辺の土質の崖に穴を掘って巣にするが、水辺からかなり離れた崖を利用することもある。

分布：ユーラシア大陸の熱帯から亜寒帯まで幅広く分布。日本では、北海道では夏鳥、本州以南では留鳥として全国に繁殖分布している。

北海道では夏鳥。繁殖する。4月下旬～5月上旬に渡来し、平野部の河川や湖沼に生息する。小さな流れのあるところにもよく飛来する。まれに小さな流れのある農耕地や公園に飛来することがある。

十勝地方では夏鳥として河川の上～下流部、湖沼などに渡来する。河岸の土壁や泥壁に穴を掘って繁殖する。

## 食性・他生物との関わり

主に小魚。ザリガニ、エビ、カニなども食べる。水辺の杭や枝、水草などにとまり水中の餌をねらい、見つけると水に飛び込んで捕食する。停空飛翔（ホバリング）後に水に飛び込むこともある。捕らえた魚を横ぐわえにし、枝などにたたきつけて殺すと、一息に頭から飲み込む。魚は3～7cmのウグイなどを食べる。捕食者はキツネなどの哺乳類や猛禽類など。



魚を捕らえたカワセミ

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
本州以南 (越冬期・通年)												

## 繁殖生態

繁殖期は3月～8月。ただし北海道には4月下旬～5月上旬に渡来するのでそれ以降。

一夫一妻でオスが争ってなわばりを作り、そこにメスが入りこんでつがいとなる。抱卵期前まで、オスがメスに魚をプレゼントする（求愛給餌）。

河岸の土壁にオスメス共同で巣穴を掘る。下頃辺川の観察によると巣穴は奥行き75cm、直径は6cmであり、一番奥の15cmは少し広がって巣室となっていた。巣室には巣材としてペリット（消化できなかった餌を吐きだしたもの。この場合は魚のウロコや骨）が敷き詰められていた。

4～7個の卵を産む。オスメス交代で卵を抱き、約19日でヒナがかえる。ヒナもオスメス共同で育て、約23日でヒナは巣立つ。



カワセミの巣穴を上から見たところ。写真ではわかりにくいですが、産室は少し広がっている（中央横の白線はメジャー）



産室に敷かれていた巣材。はき出された魚の骨やウロコ

## 興味深い話

- 土崖に横穴を掘って営巣する。近年は水際のコクリート壁の水抜きパイプなどで繁殖を行った例もある。
- 水中にダイビングして魚を捕らえるが、近くに適当な止まり木がない場合、空中でヘリコプターのように羽ばたきながら停止して（ホバリングという）からダイブする。
- カワセミはカワセミの仲間（カワセミ類：ヤマセミやアカショウビンなど）の中では一番小さい。
- 不消化物をはき出す（ペリットという）
- 完全に水中に潜って捕食するが、その際目の瞬膜（眼をまもる薄い膜）が閉じて目を保護するという。
- 本州（赤坂御用地）では年2回繁殖する例も報告されている。
- 抱卵はオスメス交代で行う。交代するときには後から巣に入る方が鳴き声などで合図してから交代するという。
- 夜はメスが卵を抱くという。
- ヒナに1日に与える魚の数は、オスが約20匹、メスが約10匹だという。初期には2cm程度の小さな魚を与え、後期には親が食べる大きさ（3～7cm）の魚を与える。

■1960年頃から日本の各地で生息域や個体数の減少が報告されているが、1985年の報告では多摩川を中心に生息域、個体数ともに増加してきたという。

■河川工事においてカワセミの繁殖用に「営巣パネル」が施工された例がある。1995年に施工された下頃辺川での例では、1997年6～7月に営巣が確認されたが、ヒナの巣立ちは確認されなかった。



下頃辺川のカワセミ営巣パネル(上)と営巣したカワセミ(下)

## 配慮事項

繁殖には切り立った土壁が必要。

### 参考文献

- 「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「続々野鳥の生活」羽田健三 監修、築地書館 1985

- 紀宮清子・鹿野谷幸栄・佐藤佳子・安藤達彦・柿澤亮三 (1991) 赤坂御用地におけるカワセミの繁殖。山階鳥研報、23:1-5.  
金子凱彦 (1985) 帰ってきた東京のカワセミ。動物と自然、15(2):7-10.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# カワラヒワ

*Carduelis sinica*

アトリ科・夏鳥



カワラヒワ

## 名前の由来

川原にたくさんいるヒワなので。ヒワは、弱々しい鳥の意で鶺鴒と書く。漢字名：河原鶺鴒

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）14.5cm。スズメよりややずんぐりした体つき。尾の先はM型に切れ込んでいる。体は緑がかった褐色で、くちばしは円錐型で太く淡いピンク色。翼の後部分は黒く、中央部が鮮やかな黄色。飛ぶとその黄色い帯が目立つ。

オスは頭が黄緑がかっており、目先が黒っぽい。メスは色が淡い。

声：飛びながら「キリキリコロコロ」と明るい声で鳴く。「チョンチョン」という声も入るという。

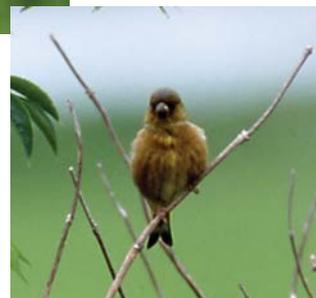
枝にとまって「キリキリコロコロ」の合間に「ビーン、ビーン」と濁った声でさえずる。

飛び方：浅く羽ばたいては、羽ばたきを休む、という動作を繰り返しながら直線的に飛ぶ。

翼を開いて羽ばたく際、翼の鮮やかな黄色い帯が目立って見える。



カワラヒワの後ろ姿  
翼の他に尾羽の脇も黄色い。  
尾のM型(逆Vの字)も特徴



カワラヒワの正面は地味

## 生息環境・分布

人家周辺、農耕地、雑木林、川原のいろいろな林に生息。

分布：中国、ウスリー川・アムール川流域、モンゴル、朝鮮半島、日本などに分布。

日本では北海道から九州までの全域に分布。北海道・雪国以外では留鳥である。

北海道には3月中～下旬に渡来し、夏鳥として繁殖。開けたところでよく見かける。雪の少ないところでは少数が越冬することがある。

十勝では、3月下旬に渡来し、夏鳥として繁殖。平地の草地から山地の樹林まで普通にみられる。少数が越冬するこ

とがある。



雪とカワラヒワ。新潟県では留鳥である

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				繁殖								
本州以南 (越冬期・通年)	越冬期・通年											

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
ワシタカ

## 食性・他生物との関わり

四季を通じて、キク科、イネ科、タデ科、マメ科などの植物の種子だけ食べる。ヒナにも種子だけを与える。(→興味深い話の項参照)

猛禽類などに捕食される。

## 繁殖生態

繁殖期は3～7月。越冬地から戻ったオスメスは集団になって、つがい作りのための集団ディスプレイ(誇示のための行動・動作)をわずか10分程度行って、一夫一妻のつがいを作る。(→興味深い話の項参照)

その後なわばりを作り巣を作る。巣作りはメスのみが行い、巣材として樹皮、羽毛、綿、枯れ草の根や葉を用いて、木の枝に外径8cmくらいのお椀形の巣を作る。オスはその周りで絶えず警戒と防衛に当たるといふ。

3～5個くらい産卵し、メスだけが卵を抱き、12～15日でヒナがかえる。抱卵期には餌をねだるメスに対してオスは求愛給餌を行うという。

オスメス共同でヒナを育て、12～17日後ヒナは巣立つ。餌

をねだる幼鳥は「チュンチュンチュン」と続けて鳴くという。



撮影：浦幌野鳥倶楽部

カワラヒワ。翼の黄色い帯が目立つ

## 興味深い話

- 標識調査で、7年の生存が確認されている。
- 樹木のある市街地の公園などでもよく見られる。飛びながらキリキリコロコロと明るい声で鳴く。
- つがい作りのための集団ディスプレイでは、まずオス同士が威嚇、攻撃をしあって強いオスを決め、そのオスがメスに求愛をする。求愛の際には頭頂の羽毛を逆立て翼を下方へ突っ張るようなポーズをとる。
- 繁殖期には各つがいが巣を中心に900㎡くらいのなわばりを作る。なわばりはルーズな集団営巣的に集まっているという。
- つがいを作り損なったオスは、他のつがいの集団営巣的ななわばりと重複したなわばりを作り、つがい相手のオスを失ったメスとつがいになるという。
- 市街地では巣の材料にビニール紐がよく使われる。
- タンポポの種子をよく食べる。

- ヒナに餌を与える際、親は種子の皮をむいて胚乳をそ嚢に貯えた後、ヒナに給餌するという。



カワラヒワ。種を食べるだけあって、くちばしがしっかりしている

## 配慮事項

市街地や農耕地などの樹木が大事。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996  
「新潟県探鳥地 雪国の鳥を訪ねて」日本野鳥の会新潟県支部 編著、新潟日報事業社 1997

中村浩志 (1991) カワラヒワ *Carduelis sinica* の誇示行動地域からの分散と繁殖期における社会構造. J. Yamashina Inst. Ornith., 22 : 9-55.  
羽田健三・中村浩志 (1970) カワラヒワの生活史に関する研究. 鳥, 20 : 41-59.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# キアシシギ

*Heteroscelus brevipes*

シギ科・旅鳥



キアシシギ

## 名前の由来

黄色の足(脚)をもっているシギだからこの名がついた。「シギ」は「騒ぎ(さやぎ)」から来ているといい(新井白石、大言海)シギの羽音から考えられたのではないかという。漢字名：黄脚鶺鴒

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)27cm。上面はのっぺりした灰褐色で、飛んだときにも翼上面に全く模様が出ない。足は黄色。

鳴き声は「ピューイ、ピューイ」と特徴的で、他に「ピューーイ、ピューーイ、ピピピピピ」とも鳴く。

## 生息環境・分布

海岸の砂浜、波打ち際や干潟、河川の砂泥地や砂礫地。十勝には5~6月、8~10月に旅鳥として飛来する。

**分布:** ユーラシア大陸の高緯度地方の東半分のごく限られた地域に点在して繁殖分布し、インドネシア、フィリピン、ニューギニア島に渡って越冬する。

日本には旅鳥として8月~10月と5月~6月に河口部などで

## 食性

昆虫類、カニやゴカイなど。

## 興味深い話

■繁殖についてあまり分かっておらず、ヒナの世話は両親が行うという記録、オスだけの記録、メスだけの記録があ

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期					■	■		■	■	■		
ユーラシア高緯度(繁殖期)						■	■	■				
東南アジア他(越冬期)	■	■	■	■						■	■	■

## 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

## 類似種と見分け方

メリケンキアシシギ、チシマシギ。

メリケンキアシシギは夏羽では腹部全体に波状横斑がある。冬羽では声以外でははっきり見分けられない。声はピッピッピッ……と6~10声連続する。チシマシギは胸から腹にかけて黒斑がつらなり、くちばしの基部は黄色い。

ふつうに見られる。九州、南西諸島では少数が越冬する。北海道では旅鳥。河口部。海岸近くの湖沼に飛来し、まれに内陸の河川沿いに飛来する。夏にも少数残っていることがある。

十勝地方では、主に旅鳥として8~10月と5~6月に河口、海岸付近に飛来する。

## 他生物との関わり

樹上のツグミ類の古巣に営巣した例があるという。

## 配慮事項

る。干潟や河川の砂泥地が、採餌場所、渡りの中継地として重要。

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ



# キセキレイ

*Motacilla cinerea*

セキレイ科・夏鳥



キセキレイ

## 名前の由来

胸から腹があざやかな黄色のセキレイだから。セキレイは鶺鴒と書き、背は背筋、令は冷たく澄んでいること。背筋が清冷な鳥という意味である。漢字名：黄鶺鴒

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）20cm。長い尾を持ち、腹面が黄色いセキレイ。頭の上、ほお、背、肩は青みがかった灰色。目の上には眉毛のように（眉斑）白い筋がくっきりとある。のどの脇の部分にも白い筋（顎線）がある。夏羽の時のオスののどは黒く、のどの脇の白線が目立つが、メスや冬羽のオスののどは白い。

**飛び方など：**地上に降りると尾や腰（後半身）を頻繁に上下にゆする。また飛ぶときには、羽ばたきと翼を閉じての滑空とを繰り返す、波のような飛行曲線を描く。飛んでいるときには翼に細い白帯が1本出る。

**声：**飛んでいるときには「チチン、チチン」「チチチ、チチチ」と金属的な声で鳴く。繁殖期には枝や大石、電線などにとまって「チチチチ」とか少し濁った「ヂヂヂヂ」という声でさえずる。

**類似種と見分け方：**ツメナガセキレイは尾が短くて、足は長めで黒く、翼に2本の白帯がある。ツメナガセキレイはサロベツ原野などに夏鳥として渡来する。



キセキレイのオスの夏羽。のどが黒い



キセキレイのメスのはのどが白い。冬羽のオスも

## 生息環境・分布

低地、低山帯に多く、亜高山帯から高山帯まで現れる。小さな水路から大きい川まで水辺をすみかとする。十勝には4月下旬～5月上旬に飛来する夏鳥。

**分布：**ユーラシア大陸の中緯度地方とアフリカ大陸南部に分布。

日本では、北海道、本州、四国、九州とその周辺の島々で繁殖し、冬は本州以南、琉球列島にかけて越冬する。

北海道（十勝でも）では夏鳥。繁殖する。4月下旬～5月上旬に渡来する。主に河川上流部の山地河川に生息する。秋には河川下流部にも飛来する。

十勝には4月下旬～5月上旬に飛来し、主に河川の中・上流部で見られる。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				繁殖								
本州以南 (越冬期・通年)	越冬											

## 食性・他生物との関わり

主にハエ目、カゲロウ目などの昆虫類を食べる。  
地上や水辺を歩きながら採食する。また水辺の石や流木にとまり、飛ぶ虫に向かって飛んで捕まえたり（フライングキャッチ）もする。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は4月～8月。一夫一妻で繁殖する。  
オスの求愛のための動作（求愛ディスプレイ）は体を低くして首を上、くちばしを垂直に起こし、翼を半開きにして下げてさえずるというもので、このとき腰や脇の羽毛を逆立て、尾羽は少し開いて幾分下げているという。  
溪流近くの崖のくぼみや樹木の幹に近い枝の上などに営巣する。巣はお椀型で、枯葉、細枝、樹皮、コケ類などで作られる。内側には細い根の他獣毛や羽毛などが使われると

いう。外装はオスメスで作るがメスの方が多く作業し、オスは近くで盛んにさえずる。内装はメスを作るという。  
4～6個の卵を産む。オスメス交代で卵を抱き、ヒナは11～14日でかえる。ヒナもオスメス共同で育て、11～14日ぐらいでヒナは巣立つという。

## 興味深い話

- 飛んでいる虫を空中で捕らえるフライングキャッチが得意。時にはふらふらと方向を変えながら虫を追い回したりもする。
- 繁殖期のオスのなわばり争いは激しく、カーブミラーやガラス戸に映る自分の姿に向かって飛びついて戦おうとしている姿は一般によく知られている。
- オスはとまってさえずる他、しばしば飛びながらもさえずる。
- オスのみでなくメスもかなり積極的に求愛ディスプレイ（繁殖生態の項参照）を行うという。
- 繁殖期にメスが近くに来ると、オスは巣の予定地に入ってみせては再びでてきて、求愛ディスプレイ（繁殖生態の項参照）を繰り返す。
- 卵はオスメス交代で抱くが、夜にはメスだけが抱く。ヒナを抱くのも同様。
- ふつう、小鳥のヒナは巣の中で親鳥から餌をもらおうとすぐに糞をする。これを親鳥は直接くわえてその場で飲み込んだり、捨てにいたりする。キセキレイは親鳥がヒナの糞を近くの水溜りや流れの中に捨てに行く。さらにはくちばしまで洗うきれい好きでまめな鳥だといえる。

- 地鳴き（さえずりではない普通の鳴き方）は、「チチン、チチン」とハクセキレイに似るが少し声量がある。
- キセキレイもセグロセキレイも、生息地として同じような場所を好むが、キセキレイの方が川のより上流部にすむ。
- 体長はセグロセキレイやハクセキレイとたいして変わらないが、体重は半分ぐらいしかないという。尾羽の割合が大きく、体つきも細い。
- 十勝地方のアイヌ語では、セキレイ類を「オチュチリ」という。



キセキレイはきれい好き？

## 配慮事項

水生昆虫類の豊富な水辺が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ 編著、主婦と生活社 1997  
「キセキレイ、子育ての観察」長谷川博、岩崎書店 1983  
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

羽田健三・市川武彦 (1967) キセキレイの生活史に関する研究。  
II繁殖期(2)繁殖期の諸行動の雌雄分担率、ナワバリ、家族生活、生産率、日生熊会誌、17:182-189.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# キバシリ

*Certhia familiaris*

キバシリ科・留鳥



キバシリ

## 名前の由来

樹の幹を走り回るから“木走り（きばしり）”とついた。  
漢字名：木走

魚類

底生動物

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）13.5cm。スズメよりも小さく細身。くちばしは細長く、先端が下に曲がっている。

体の上面は茶褐色と白の縦じまで、樹皮のような模様である。下面は白い。飛ぶと翼に黄褐色の細い線が出る。

声：繁殖期には「ツイー、ツイツイツイ」あるいは「ツイツイツイツリリ」と細く高きさえずる。さえずりの期間は短いという。

地鳴き（さえずりでない普通の鳴き方）では「ツイー」とか「ツリリ」というきわめて高く小さな声で鳴く。

飛び方や歩き方：飛ぶときは羽ばたいては休む、を繰り返して波のような飛行曲線を描く。

木の幹の下の方に縦にとまり、ジグザク、またはらせん状に上り、隣の木の根元に飛び移ってまた上る、ということを繰り返して餌を探す。

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
ワシタカ  
鳥類



キバシリ。曲がったくちばし、茶褐色の背、白い腹



キバシリの背。茶褐色に白の縦じまで樹皮に似ている

## 生息環境・分布

低山から亜高山にかけての、比較的樹木が大きい樹林。

分布：ユーラシア大陸の中緯度地方を横断するように分布する。

日本では、北海道、本州、四国、九州に留鳥として生息する。

北海道では留鳥。低山帯から高標高にかけてのいろいろな森林に生息し、繁殖する。北海道に生息するものはキタキ

バシリという亜種(亜種とは、同じ種が地理的に隔離されることによって独自の分化をとげ、形態的に変化が確認できるもの)。

十勝では留鳥で、低山帯から高標高にかけてのいろいろな森林に生息し、繁殖する。冬は平地の森林にもいる。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
					繁殖							

## 食性・他生物との関わり

木の地衣類やコケ類の間、樹皮の裂け目などの細かい隙間に隠れている小型の甲虫、アブ、鱗翅類（ガなど）の幼虫、あるいはクモ類を食べる。

木の幹の下の方に縦にとまり、ジグザク、またはらせん状に上り、隣の木の根元に飛び移ってまた上る、ということを繰り返して餌を探す。先端が下に曲がったくちばしをいろいろな角度から隙間に差し込み餌を捕らえる。

捕食者は猛禽類など。



キバシリ。樹皮の隙間の虫を探す

## 繁殖生態

繁殖期は3～6月、一夫一妻で繁殖する。繁殖期には強いなわばりを持つ。

自分で穴は掘らず、立ち枯れた木の割れ目や樹洞の中に椀形の巣を作る。外装は樹皮片などとクモの巣を用い、内装には獣毛を敷くのだという。

4～5個産卵し、メスだけが卵を抱き、オスは餌を運ぶ。14～15日でヒナがかえると、オスメス共同でヒナを育てる。

14～15日くらいでヒナは巣立つ。

巣立ったヒナはしばらく群れていて、時折樹幹の一部にかたまって休んでいるという。

## 興味深い話

■木に縦にとまるが、木をつついたりはずせず、キツツキではない。

■春だけでなく秋にもさえずりがよく聞かれるという。

■秋から冬にかけて、しばしばシジュウカラの仲間やコゲラあるいはエナガなどと混群をつくる。

■餌を探しながら、木の幹を螺旋状に登っていくが、ゴジュウカラの様に下向きに下りてくることはない。

■尾羽の中軸が固く、先がとがっている。木に登る際にはこの尾羽の先を幹の表面に押しつけるようにして体を支え、よじ登るように登っていくという。

■縦の幹でなく、大枝の下面をよじ登ることもできる。

■木を降りるときには、後ろ向きで（バックして）降りることはできるが、頭を下にして降りることはできない。



キバシリ。尾羽を樹皮に押しつけるようにしてよじ登る

## 配慮事項

樹洞ができるような大きな木がある、成熟した樹林が大事。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997

「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「野鳥の生活」羽田健三 監修、築地書館 1975

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# キビタキ

*Ficedula narcissina*

ヒタキ科・夏鳥

## 名前の由来

黄色いヒタキの意で、江戸時代は「黄火焼」と書いた。ヒタキはヒタキの仲間のジョウビタキの地鳴きが「ヒッヒッ、カッカッ」と火打石をたたく音に似ているので「火焼き(ヒタキ)」になったといわれる。多くのヒタキ類は「カッカッ」という声を出す。漢字名：黄鶺鴒



撮影：飯嶋良朗

キビタキ (オス)

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）13.5cm。スズメより少し小さい。

オスは色彩鮮やかで、頭から背、尾が黒く、のどはオレンジがかかった黄色で、そこから胸にかけて黄色く、腹は白い。また、目の上の眉斑（眉のような模様）や腰も黄色い。メスは全体がオリーブがかかった褐色で、のどと腹の中央は白っぽい。

声：繁殖期には「ピッコロロ、ピッコロホイホイ」「ホイヒーロー」「ピピロピピロピピロ」などと変化に富んだ、遠くまで聞こえる美しい声でさえずる。「ピッピク、オーシー」とセミのツクツクハウシのような声も出すという。地鳴き（さえずりではない普通の鳴き方）では「ピッ、ピッ、ピッ、クルル」と鳴く。

飛び方：飛んでいる虫を捕る際、枝から飛び上がってくわえ、元の枝（または近くの枝）に戻る、というフライングキャッチを行う。

類似種と区別点：マミジロキビタキ、ムギマキ。マミジロキビタキの眉斑（眉のような模様）は白い。ムギマキののどから胸は、オレンジっぽい褐色。



キビタキのオス。のどから胸の黄色と真っ黒な上半分とのコントラストが鮮やか



キビタキのメス



キビタキのオスの背中。腰も鮮やかに黄色い

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期						繁殖						
フィリピンなど (越冬期)	越冬期										越冬期	

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
ワシタカ

## 生息環境・分布

丘陵や山地の森林。北海道では平地の林にも生息。木が大きくて樹冠の下に空間がある薄暗い林を好む。

**分布：**サハリンなどアジア東北部で繁殖し、冬はフィリピン、インドシナ半島、ボルネオ島などに渡る。

日本では夏鳥として渡来、繁殖し、ほぼ全国に分布する。北海道には夏鳥として5月中旬に渡来し、繁殖。平地から

低山の樹林に生息する。

十勝には、夏鳥として5月下旬に渡来し、繁殖。平地から低山の樹林に生息する。

## 食性・他生物との関わり

飛んでいる昆虫や木の葉の裏面にいる虫などを食う。

虫を捕る際、枝から飛び上がってくわえ、元の枝（または近くの枝）に戻る、というフライングキャッチを行う。盛んにとまる枝を変えて、採食場所を移動するという。

秋の渡り時期には液果も食べるという。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は5～8月、一夫一妻で繁殖する。

繁殖地に渡ってくると、オスは盛んにさえずってなわばりを作り、つがいを作る。(→興味深い話の項参照)

巣は樹洞や木の裂け目、茂ったつるの間などに、枯れ葉や枯れ草、コケ類や細根などを利用して、深い碗形に作る。巣作りはメスのみが行い、オスはその間メスの後を追う。

4～5個産卵し、メスだけが12～13日卵を抱く。メスの抱

卵中、オスはなわばりを守っているようだという。

ヒナがかえるとオスメス共同でヒナを育てる。育雛の初期には、オスがヒナを抱いているメスに餌を与え、メスはそれをヒナに与えるのだという。

約12日でヒナは巣立つ。

## 興味深い話

■春から初夏の樹林で、遠くまで聞こえる美しい声で鳴く。ただし木の梢に現れたりせず、林の中層の枯れ枝などとまってさえずることが多い。

■なわばりの広さは直径100～150mくらいだという。

■オス同士でなわばり争いが行われ、鋭い羽音やパチパチとくちばしを鳴らす音を出すという。枝の上で10～30cm間隔でにらみ合ったり、6～7mの枝の上から垂直に地上まで追い込んで、地上でつきあうという、激しい争いもあるという。また争いの際「ブーン」というハチの羽音のような声を出したりもするという。

■なわばり争いはオスだけではなく、巣の周辺ではメスも

参加するという。

■巣作りの際、キツツキの古い巣穴や巣箱を利用することもある。

■メスだけが卵を抱くが、1回の抱卵時間は1～2時間ほどで、平均16～17分ほど巣を離れる間に採食するのだという。

■ヒナを育てる際、初期にはオスが餌を運びメスに渡すが、全体を通してはオスもメスもほぼ同じ回数餌を運ぶのだという。

## 配慮事項

樹洞や裂け目がある大きな木がある樹林が大事。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)

「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997

「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987

「鳥のおもしろ私生活」ビッキオ 編著、主婦と生活社 1997

江崎良彦 (1970) キビタキ. 長野県上水内郡誌自然篇、動物. 上水内郡誌、pp. 759-764. 上水内郡誌編集会.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# キンクロハジロ

*Aythya fuligura*

カモ科・冬鳥



キンクロハジロ(オス)

## 名前の由来

黄色または金色の目をもつ黒と白のカモだからこの名が  
ついた。漢字名：金黒羽白

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オス44cm、メス38cm。  
目は金色。

オスの頭部は紫色光沢のある黒で、後頭には垂れ下がった  
冠羽（頭部の飾り羽）がある。胸、背、腰、上下尾筒、尾  
は黒く、脇と腹は白い。くちばしは青灰色で先端が黒く、  
その内側に白い帯がある。目は黄色。

メスは全体が黒褐色で、後頭に短い冠羽があるが、くちば  
しの基部の周囲がわずかに白い個体や、下尾筒（尾の下、  
尻のあたり）が白い個体もある。

オスメスともに、飛ぶと翼に広く白い帯が目立つ。

声：あまり鳴くことはないが、オスは「クックッ、ピュル  
ルル」というような声で鳴き、繁殖期には「フィー」とい  
う口笛のような声を出すという。

類似種と区別点：スズガモ。

スズガモには冠羽はなく背中に白い細かい波模様がある。

メスはくちばしの基部周囲に幅広い白色部がある。



キンクロハジロ(メス)

撮影：叶内拓哉



キンクロハジロのオス。黒地にくっきり白い脇腹、金色の目



キンクロハジロの群れ。後方左の2羽（ピンク矢印）がメス。  
オスの頭に冠羽が見られるものも（白矢印ほか）

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■									■		
ユーラシア高緯度 (越夏・繁殖期)				■		■		■				

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(葦原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

## 生息環境・分布

湖沼、大きい河川、潟湖、内湾、河口などに生息する。十勝では冬鳥で10月～5月に見られる。

**分布：**ユーラシア大陸の高緯度地方で繁殖し、同大陸南部、アフリカ大陸に渡って越冬する。

日本では全土に冬鳥として渡来し、北海道、本州、四国、九州で越冬する。北海道の道東で少数が繁殖する。

北海道では道東で留鳥、繁殖する。河川や湖沼に生息し、

春や秋に多くなる。

十勝では冬鳥で、河川や池に10月～5月まで普通にみられる。夏に見られる場合もある。

## 食性・他生物との関わり

巻貝類や二枚貝類など水底に棲む貝類を食べる。水草などの植物質も食べる。

水中に深さ0.6～3 mほども潜り、潜水時間は14～17秒ほどだという。餌は水中で飲み込んでしまう。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

日本では道東で少数繁殖。千島、サハリン、ユーラシア大陸高緯度地方で繁殖する。

繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。オスの求愛ディスプレイ(求愛のための誇示行動)では頭部を上背後に跳ね上げるようにする。

卵は6～12個産む。産卵後つがいは解消され、メスのみが卵を抱く。ヒナは23～28日でふ化し、メスの世話で育つ。45～50日で一人前になるという。

## 興味深い話

- 標識調査により9年11ヶ月生存という記録がある。
- 水中に潜水して貝類を食べる。水中には14～17秒ぐらい、水深では0.6m～3 mぐらい潜る。
- 繁殖地では水辺近くの草むらの地上に、草の葉や茎で皿形の巣を作るといふ。
- 一夫二妻の記録もある。
- スウェーデンでの観察例では、メスが飛び立つときに「グエーグエー」と濁った声で鳴いたという。
- しばしば大群で過ごし、春の渡り時期には数千～数万羽の大群にもなるという。
- 十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般(特にマガモ)を「ウォルンチカマ=水の中にいる鳥」といふ。



キンクロハジロとオナガガモ

## 配慮事項

ある程度水深のある、貝類が生息する水域が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

鳥類  
(水辺)

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ



# クロツグミ

*Turdus cardis*

ツグミ科・夏鳥



(上) クロツグミ (オス)  
(イラスト: タカダヒロキ)



クロツグミ (メス)

## 名前の由来

黒いツグミの意。ツグミは「囁み」で、夏至の後さえずらなくなり口をつぐんでしまうからついたといわれるが、実際には夏至の後でもさえずる。

漢字名: 黒鶇

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)22cm。ムクドリくらいの大きさ。オスは頭から胸、背から尾まではっきりした黒で、白い腹に黒い斑。くちばしと足は黄色。メスは頭から背中が灰色。

**声:**「キョロイ、キョロイ、コッキョーヨコッキョーヨ、コケエコ、ケコ、チョロ」などと変化に富んだ鳴き方で、音楽的かつ声量豊かにさえずる。

**類似種と見分け方:** マミジロは腹が黒くて白い眉がある。

## 生息環境・分布

低山帯から山地の、広葉樹林、人工針葉樹林などに生息。  
**分布:** 中国中部と日本で繁殖し、中国南部やインドシナ半島に渡って越冬する。

低山まで生息。日高山脈東部では少なかったが、近年観察頻度が高くなっている。

日本には夏鳥として渡来し、九州以北の各地に分布、繁殖。北海道には夏鳥として4月下旬の渡来し、繁殖。平地から

十勝地方には4月下旬の渡来し、平野部から標高600mくらいまでの森林で繁殖するが、日高山脈の西側に比べて少ない。

## 食性・他生物との関わり

地上をはね歩きながらミミズやゴミムシなどの虫を食べる。植物の果実も食べる。捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は5~7月、3~5個産卵し、13~14日抱卵、11~13日育雛する。巣作り・抱卵はメスのみ、育雛はオスメス共同で行う。

## 興味深い話・配慮事項

- 標識調査で、5年の生存が確認されている。
- 木の枝の上にお椀形の巣を作る。

■ ヒナに餌を与えるとき、オスはミミズを、メスは昆虫を運ぶことが比較的多いという。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期						繁殖						
フィリピンなど(越冬期)	繁殖											

## 参考文献

「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
 「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982(1994増補版7刷)  
 「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
 「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985(1995 2版21刷)  
 「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管

理学研究室 2000  
 「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
 「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
 「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所 1996  
 「日本の野鳥図鑑1 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995  
 石塚徹(1991) 繁殖期のクロツグミの行動上の性差. 日本鳥類学会1990年度大海講演要旨. 日鳥学誌, 39: 130-131.

# コガモ

Anas crecca

カモ科・冬鳥



コガモ（オス）

## 名前の由来

体が小さなカモの意味。古名は「たかべ」で、たかは「高」べは「群(め)」の転じたもので高く群れ飛ぶ鳥の意。カモは「浮かぶ→うかむ→かむ→かも」だとする説、「雁(ガン)→かむ→かも」だとする説がある。漢字名：小鴨

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オス41cm、メス34cm。オスの頭部は栗色と緑。体は灰色で、肩羽の外側が白いのので、体の中央に白い水平の線となって見える。腰の両側には黒線で囲まれた淡黄色の三角形斑がある。くちばしも足も黒い。飛行時に翼鏡（翼の上面中程の後縁にある金属光沢をした羽）の上下に2本の白線が出るが、上の線の方が太い。

メスは褐色で黒褐色の斑があり、飛行中に見える2白線はどちらも細い。

声：水面で群れているときには、オスは「ピリッ、ピリッ」と、笛のような声で鳴くことが多い。メスは「グェーグェーグェー」と鳴く。飛んでいるときにも鳴くことがあるという。

類似種と区別点：シマアジ。

シマアジのオスは白い眉斑（目の上の眉のような線）が明瞭、メスは眉斑と顔の黒線が明瞭。



コガモのオス。顔の模様と腰脇の黄色い三角が特徴的



コガモのメス  
地味だが翼の緑色の部分(翼鏡)が見えると美しい

## 生息環境・分布

河川、湖沼、ダム湖など。草むらの多い氾濫原の小さな水域にも入る。十勝では冬鳥で9月～4月に見られる。

分布：ユーラシア大陸と北アメリカ大陸中・北部に繁殖分布し、冬は両大陸南部に渡って過ごす。

日本では大部分が冬鳥として各地で越冬し、ごく少数が北海道、本州の山岳地で繁殖する。

北海道では冬鳥。一部留鳥。河川や湖沼に生息し、夏にも少数が見られる。

十勝では河川や池沼に主に9月～4月まで普通に見られる。一部繁殖も確認されている。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■					■	■	■	■	■	■	
ユーラシア高緯度(越冬・繁殖期)					■							

## 食性・他生物との関わり

雑食性だが草の種子・葉・茎などを主に食べる。湿地や水辺を歩きながら泥水をついばんだり、枯れ草をしごいたりして餌をとる。また水面に浮いて水草の間でグチャグチャとくちばしを動かして植物質をこしとったりもするという。

ヨシなどが生える岸辺近くの水草の間にいることが多いという。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

日本では、ごく少数が北海道や本州の山岳地で繁殖期にも見られる。千島、サハリン、ユーラシア大陸の中・北部、北アメリカ大陸の中・北部で繁殖する。

繁殖期は5～7月、一夫一妻。つがいは10月から翌6月に形成されるので、越冬地で秋から春にかけて、オスの求愛ディスプレイ（興味深い話の項参照）が見られる。

巣はメスのみが作る。水辺の草むらや藪の下にある浅いくぼみに、草の葉などを敷いた皿形である。産座には自分の胸や腹の綿羽を敷く。

6～12個の卵を産み、産卵後つがいは解消されてメスのみが卵を抱く。ヒナは28～29日くらいでかえり、体が乾くと

すぐ親とともに巣を離れる。メスのみがヒナの世話をし、50～60日くらいで親から独立するという。

## 興味深い話

■十勝では基本的に冬鳥だが、一部繁殖も確認されている。大樹キモントー沼で1981年7月20日に子連れの群れが観察された。

■標識調査で9年3ヶ月生存という記録がある。

■冬は狩猟が行われるため、日中は休んで夜間に採食することが多い。

■草むらの多い氾濫原の小さな水域にも入る。ハクチョウなどの給餌場近くにもいるがマガモやオオハクチョウなどと比べると餌付けはされにくいようだ。

■オスの求愛ディスプレイ（ディスプレイ：メスや他の個体に対して誇示をおこなう特徴的な行動）は秋から春にかけて見られる。水面に数羽のオスが集まって1羽のメスの周りを泳いだり、ピロピロツという声を出しながら首を伸び縮みさせ、尻を持ち上げるディスプレイをする。このとき下尾筒の黒緑の黄色がよく見える。

■つがいは1年ごとに解消し、越冬地で毎年新しいつがいが作られる。

■警戒時には「クワツ、クワツ」と鳴くという。

■広い湖にいるときは開けた水面で群れているより、奥まった入り江の岸にすることが多いという。

■十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般（特にマガモ）を「ウォルンチカブ＝水の中にいる鳥」という。



コガモ。オスとメス

## 配慮事項

水際に植生の多い水域が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)

「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・

谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# コゲラ

*Dendrocopos kizuki*

キツツキ科・留鳥

## 名前の由来

小さなキツツキの意。日本最小のキツツキ。「ケラ」はキツツキの古名「けらつつき」の略で、けら(虫)をつついて捕るのでついたといわれる。漢字名：小啄木鳥



コゲラ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）15cm。スズメくらいのおおきさで、キツツキの仲間では一番小さい。薄い茶色と白のまだら。

頭上から体の上面（背面）は黒褐色で、顔は褐色、背と翼には白く横に並んだ斑がある。胸の横から脇にかけて、褐色の短めの縦スジが何本もある。

オスの後頭両側に赤い小さな斑があるが、野外では普通は見えない。

声：「ギョーッギョーッ」と床がきしむように鳴く。また、「ギョーキッキキッキ」と甲高い声を出すこともある。早春には枯れ枝などをたたいて音を出すドラミングを行う。「トロロ」というような低い音を出す。短い太鼓たたきを数回連続させる。

飛び方やとまり方：飛ぶときには、羽ばたきと翼を閉じての滑空とを繰り返し、波のような飛行曲線を描く。木の幹に垂直にとまる。また、つるにぶら下がり気味にとまったり、細い横枝に普通の鳥のようにもとまる。

類似種と見分け方：コアカゲラ。

コアカゲラのオスは頭部が赤く、メスは額が白い。



コゲラ。顔は褐色、脇に褐色の縦斑がある



コアカゲラ(オス)。顔は白、脇に目立つ縦斑はなく、頭に大きな赤斑がある

## 生息環境・分布

低地や低山帯のいろいろな樹林。樹木の多い公園でも繁殖する。

分布：ユーラシア大陸中緯度地方の東部と、日本海を取り巻く地域だけに分布する。

日本では北海道から沖縄まで広い範囲で留鳥。

北海道では留鳥で平野部から山地まで森林に生息する。平野部の林には冬に降りてくる程度。北海道に生息するもの

はエゾコゲラと呼ばれる亜種。（亜種とは、同じ種が地理的に隔離されることによって独自の分化をとげ、形態的に変化が確認できるもの）

十勝では留鳥で、平野部から山地まで森林に生息する。平野部の林には少ない。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
						繁殖						

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類  
ワシタカ

## 食性・他生物との関わり

木、低木や藪、あるいは枯れ草の茎で昆虫の幼・成虫を捕る。アブラムシもよく食べるという。秋から冬にはハゼ、ヤマウルシ、ハリギリ、ミズキなどの果実も食べる。虫を捕る際は、樹木の幹から大枝、小枝にかけて、天辺に

向かってよじ登りながら採食する。樹皮表面や葉からつまみとったり、コケ類や地衣類の中をのぞいてつまんだり、小渋をつついてほじくったりしてとる。捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。秋から冬につがい作りやなわばり決定のための行動を行う。(→興味深い話の項参照) 枯れ枝や枯れ木にオスメス共同で穴を掘り、巣を作る。巣は地上1.5～10mくらいの高さに作られ、穴の直径は3～4cm、深さは15～30cmくらいで、巣材はないという。5～7個産卵し、オスメス交代で卵を抱くが、夜はオスだけが抱卵するという。約12日後にヒナがかえり、約22日間オスメス共同で養う。



巣穴から顔をのぞかせるコゲラ

## 興味深い話

- 標識調査で、9年11ヶ月の生存が確認されている。
- 春には、木を叩くドラミングをおこなうが、その音はアカゲラなどに比べるとずっと小さく、そばにいないと聞こえない。
- 秋から冬にかけて行われるつがい作りやなわばり作りの時には、木の幹にとまって、翼を半開きにしてふるわせたりバタバタとあおったり「キキキキ」と鳴いて首を振ったりするディスプレイ（誇示のための行動や動作）を行い、飛んで回転したりもする。
- つがいのなわばりは直径300～500mだという。
- 小型のキツツキなので生木ではなく、枯れ木にくちばしで穴を掘って巣にする。巣の深さは15～30cmくらいである。
- ヒナは巣立つと巣穴から一気に飛び出し、幹に縦にとまって餌を探すが、数日間は親から餌をもらうのだという。時には7ヶ月も親元を離れないことがあるという。
- 冬には餌台に来て脂身を食べることもある。冬にはシジュウカラの仲間と混群とよばれる群れを作ることがある。
- 小さいので固い生木に穴を開けられず、枯れ木や枯れ枝

に巣を作る。生木に人工的に枯れ木の一部をくくりつけ、コゲラに巣を作らせた例があるという。■ 上信越地方より北ではニューナイスズメがコゲラの巣から卵をくわえ出し、巣を乗っ取ってしまうことがあるという。



木をよじ登るコゲラ

## 配慮事項

枯木や枯れ枝のある樹林が大事。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997

「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「日本の野鳥図鑑1 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部 1987  
「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ 編著、主婦と生活社 1997  
「続野鳥の生活」羽田健三 監修、築地書館 1976

松岡茂 (1977) 同所性キツツキ類の生態的重複と差異. 北海道大学農学部博士論文.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(鳥水辺)類

(葎原樹林)類  
ツタカ

# コサメビタキ

*Muscicapa latirostris*

ヒタキ科・夏鳥

## 名前の由来

小さなサメビタキの意。背中の色が鮫皮の色に似ているヒタキなのでサメビタキという。ヒタキはヒタキの仲間のジョウビタキの地鳴きが「ヒッヒッ、カッカツ」と火打石をたたく音に似ているので「火焼き(ヒタキ)」になったといわれる。漢字名：小鮫鵜



撮影：叶内拓哉

コサメビタキ

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類  
ワシタカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)13cm。スズメより小さい。頭から背中、尾にかけて灰色で、腹は白い。目の周りが白く、目がクリッとした印象を与える。

声：渡来直後には「ピィピィ、クチュクチュ、ツチツチ、ピチピチピョピョ」などと早口で複雑な声で鳴くが声が小さく、際立つさえずりではない。つがいになると鳴かなくなる静かな鳥。

地鳴き(さえずりではない普段の鳴き方)では「ツィー」「チッチッ」と鳴く。

飛び方：林内で飛んでいる虫に向かって枝からパッと飛び立ち、瞬間的に空中の一点で停止して虫を捕らえ、元の枝に戻る。

類似種と区別点：サメビタキ、エゾビタキ。

サメビタキは少し大きく、腹は白くない。エゾビタキは胸から腹にかけて黒褐色の縦じまがある。

コサメビタキの胸から腹が一番白っぽい。



コサメビタキの巣立ったばかりの幼鳥



コサメビタキの背



類似種のサメビタキ。胸から脇が褐色

## 生息環境・分布

平地から標高1,000mくらいまでのいろいろな林。明るい林を好む。十勝では夏鳥。

分布：ヒマラヤ、シベリア南部から中国東北部、朝鮮半島などで繁殖し、冬にはインドから中国南部、ボルネオ島などに渡る。

日本には夏鳥として渡来し、全国各地で繁殖する。北海道(十勝地方も)には夏鳥。5月中旬に渡来して繁殖する。平地や低山の林に生息する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期						繁殖						
中国南部など(越冬期)	繁殖										繁殖	

## 食性・他生物との関わり

空中を飛ぶチョウ、ガ、ウンカ、アブなどの昆虫。まれに木についた青虫も食べるという。

木の枝にじっととまり、林内で飛んでいる虫を見つけるとそれに向かってパッと飛び立ち、瞬間的に空中の一点で停止してすばやく虫を捕らえ、元の枝に戻る（フライングキ

ャッチ法）。（→興味深い話の項参照）

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。つがいごとになわばりを作る。

高木の葉がない水平な木の枝に、樹皮などでお椀形（または皿形）の巣を作り、コケで周りを覆う。多量のコケ類、樹皮、鳥の羽毛、クモの糸を用い、産座には哺乳類の毛や鳥の羽毛などを敷くという。一見木のこぶのような巣で、オスメス共同で作る。

4～5個産卵し、ほとんどメスのみが卵を抱く。オスはメスに給餌することがあるという。（→興味深い話の項参照）12～14日でヒナがかえり、12～14日くらいオスメス共同でヒナを育てる。メスがヒナを抱いている間はオスがメスに餌を渡し、それをメスがヒナに給餌するのだという。



コサメビタキと巣。抱卵や抱雛はメスが行うという

## 興味深い話

■サメビタキの仲間（コサメビタキ・サメビタキ・エゾビタキ）の中では一番小さい。

■さえずる声は小さく、期間も短い静かな鳥。時々他の鳥の鳴き真似を、これも小声ですることがあるという。

■オスのメスに対する求愛ディスプレイ（誇示のための行動・動作）では胸の羽毛をふくらませ、尾羽を開いて左右に揺するのだという。

■空中で虫を捕らえる際「パチッ」というくちばしで虫をはさむ音がする。

■林内の空き地を好み、大木の下枝をとまり場所にすることが多いという。虫を捕らえる際、とまり場所よりさらに下の方へ飛び立つことが多いという。

■なわばりの広さは直径100mくらいだという。

■オスメスまたは単独で行動することが多く、渡りの時で

も群れることはまれにしかないという。

■オスが、卵を抱いているメスに対して給餌をする際、飛びながら空中停止して与えるのだという。

■別名「ばかつちょ」（埼玉県）、「ばかめ」（長野県）などとも言われるらしい。意味は不明。

■地味だが目がクリッとしたかわいい小鳥。目の周りが白い上に、黒目周囲の肉質リングが黒いため、目を際立たせている。

## 配慮事項

平地から山地までの、あまり鬱閉していない明るい林が大事である。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997

「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987

「鳥のおもしろ私生活」ビッキオ 編著、主婦と生活社 1997

「続野鳥の生活」羽田健三 監修、築地書館 1976

「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. I～III」清棲幸保、講談社 1978

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原・樹林)  
鳥類  
ツシタカ

# コチドリ

*Charadrius dubius*

チドリ科・夏鳥



コチドリ

## 名前の由来

チドリの中では小さいのでこの名がついた。チドリの語源はその鳴声からきたという説がある。漢字名：小千鳥

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）16cm。頭部に白と黒の模様があり、前頭部（おでこ）の黒と頭頂の褐色の間に白い部分がある。目の周りにはっきりと金色の輪がある。体の上面は砂褐色。翼に白帯は全くない。足は黄色。

声：「ピオ、ピオ、ピオ」あるいは「ピピ、ピピ」と鳴く。繁殖期には巣の近くやなわばりの中を「ピッピッピッ（ピオ、ピオ）ビュー、ビュー」「ピピピピピ、ピピ、ピィョ、ピィョピィョ」などと鳴きながら飛び回る。

類似種と見分け方：イカルチドリ。

イカルチドリの方が少し大きくて、目の周りの黄色が薄い。またイカルチドリのくちばしは長く、顔の黒色は淡くて、

足の色も薄い。飛んでいると翼に淡白色の帯がみえるのもイカルチドリの特徴。またイカルチドリは「ビュービュー」と聞こえる声は出さないという。



コチドリ。顔の黒白模様と目の周りの金色が印象的



類似種、イカルチドリ。目の周りの黄色や黒色が濃い

## 生息環境・分布

河川敷地内の中洲、水辺、河口の三角州や干潟、海岸の砂浜、植生が疎らで裸出土の多い荒地などに生息する。水辺に多く、砂泥地や砂礫地を好むが、必ずしも水辺である必要はなく、どこか近くに水域があればいいとも言われる。

分布：ユーラシア大陸の低・中緯度地方に広く繁殖分布し、同大陸南部からインドやアフリカ大陸中部に渡って越冬する。

国内では北海道、本州、四国、九州などに夏鳥として渡来して繁殖する。九州以南で少数が越冬する。北海道では夏鳥。繁殖する。主に河川の中・下流部の河川敷に生息する。十勝地方では夏鳥として4月に飛来し、繁殖する。河川の中下流部の河川敷で普通に見られる。

## 食性・他生物との関わり

砂泥地に生息する昆虫類などの小動物を食べる。砂地を急速に走って急停止し、思いがけない方向にくちばしを突き出して虫を捕る。走る方向を急に変えて進むのでジグザグに進むように見える。ぬれた泥の表面を片足でたたいて虫を追い出す行動も見られるという。

捕食者は猛禽類やキツネなど。



河口部の湿地で餌を捕るコチドリ

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
九州以南 (越冬期・通年)												

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(葦原・樹林) ワシ・タカ類



## 繁殖生態

繁殖期は4月～7月。一夫一妻。オスは河原などの砂礫地に直径10mくらいのなわばりを持ち、他のオスにたいして脅しのディスプレイ（誇示するための行動や動作）や、上空を広めに「ピュー、ピュー」と鳴きながらチョウのように旋回するフライトディスプレイ（飛びながら行う誇示行動）を行う。（→興味深い話の項参照）

メスは複数のオスを訪ね、オスは訪れたメスに求愛ディスプレイを行う。巣作りの場所に足や体でくぼみを作りながら「ピッピッピッ・・・」と呼びかける。メスが動かないときには場所を変えて繰り返すという。（興味深い話の項参照）

巣は砂地にオスメスで浅いくぼみを掘り、内装に小石や貝殻の破片や植物片などを敷く。環境によって巣材が使われない場合もあるという。

3～5個の卵を産むがほとんどが4個で、巣の中に十文字に並べられているという。オスメス交代で卵を抱き、22～25日でヒナが孵る。ふ化後半日ほどで巣を離れ、両親の世話の下ヒナは育つが、ヒナは初めから餌を捕るという。ヒナは25～27日位で親から独立するという。



ヒナがそばにいるため、擬傷（ケガをしたふり）するコチドリ

## 興味深い話

■草や枝などの巣材を使わず地面に直接卵を産む。卵は砂礫地の小石とそっくりで非常に見つけにくい。捕食者が卵や雛のいる巣に近づくと、親鳥はケガをしているフリをして自分に注意を引き付けて捕食者を巣から遠ざける擬傷行動を行う。

■走る方向を急に变えて進むのでジグザグに進むように見える。「千鳥足」の語源。

■オスのなわばりでのディスプレイ（誇示のための行動・動作）には空中を「ピュー、ピュー」と鳴きながら旋回するフライトディスプレイの他に地上部での対立行動もある。背面の羽毛をなでつけ、脇の羽毛を水平に逆立てて、体を水平にして平行に走ったり、突進したりするものと、首や頭頂の羽毛を逆立てて体を起こしてにらみ合うものがあるという。

■オスのメスに対するディスプレイは、巣作り場所として紹介する場所でうずくまり胸を地上に押しつけ足で砂を蹴飛ばし、体を回転させてくぼみづくり（スクレイブ）を行いながら「ピッピッピッ・・・」と鳴くものである（スクレイピングディスプレイと呼ぶ）。メスが動かないと場所を変えて繰り返し、メスが近づくと、くぼみの縁につま先立ちになり、体を水平にして尾羽を扇のようにくぼみに

開く。メスはその尾羽の下にうずくまったり足で掘る仕事をしたりするという。つがいつくりの時だけでなく、交尾や巣作りの時にもこのディスプレイが使われるという。

■ヒナの頭や背は白色・黄褐色・黒色がまばらに配置された羽毛をしていて、危険を感じてうずくまると周囲の小石の中でよい保護色となる。

■親鳥はオスメスとも擬傷行動（翼を大きく開き引きずるように歩く）を激しく行う。敵をおびき寄せるためだともいわれている。



湿地を歩くコチドリ。両足を交互に出して素早く、またジグザグに歩く

## 配慮事項

砂泥地や砂礫地など植生が少ない土地を好むため、氾濫原などの変化の激しい不安定な環境が必要。

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「野の鳥の生態 復刻版 1～5巻」仁部富之助、大修館書店 1979

# コムドリ

*Sturnus philippensis*

ムクドリ科・夏鳥



撮影：飯嶋良朗

コムドリ（オス）

## 名前の由来

小さいムクドリの意。ムクドリは、椋（むく）の実を食べるのでついたといわれる。漢字名：小椋鳥

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種) 花

(外来種) 花

哺乳類

(鳥類) 鳥

(鳥類) 草原・樹林  
ワシタカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）19cm。ムクドリより小さい。体の大きさの割に尾がやや短く見える。くちばしと足は黒い。

オスは頭・顔が白く、頬が赤茶色。背は黒く紫色の光沢がある。翼は黒いが緑の光沢もあり、大きな白い斑がある。腰は淡いオレンジ色。脇が黒っぽい灰色。

メスは頭・顔が灰白色で、つながるように下面が灰白色。翼は褐色で先は黒っぽい。

声：繁殖期には木の茂みの中で「チィチョチィチョー、ピューィキュルキュル、ジョィジョィジョィ」などと明るい声と濁った声を交えてさえずる。

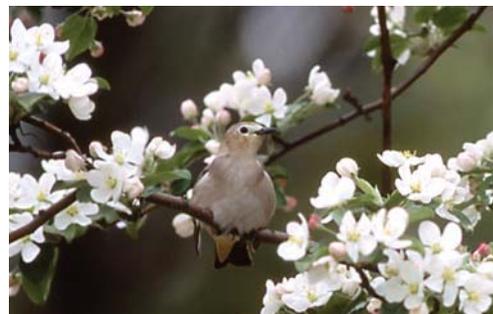
地鳴き（さえずりではない普通の鳴き方）では「キュルリキュルリ」などと鳴く。また、警戒声として「ジェーッ」と濁った声も出す。

類似種と区別点：ムクドリ。

ムクドリは全身が黒っぽく、顔に白い羽があり腰が白色。くちばしと足が黄橙色。



コムドリのオス。赤茶色のほおが目立つが、背や翼に見られる紫や緑の光沢も美しい



コムドリのメス

## 生息環境・分布

東北及び北海道では平地の村落が近い明るい林（本州では山地の村落や市街地）に生息する。十勝では夏鳥。

分布：主にサハリン南部、南千島、日本で繁殖する。冬はフィリピン、中国、ボルネオ島に渡る。

日本には夏鳥として渡来し、本州中部以北で繁殖する。

北海道には4月下旬に渡来する。平地に生息し、繁殖する。十勝地方には4月下旬から5月上旬に渡来する。平地から低山帯に生息、繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期					繁殖							
フィリピンなど (越冬期)	繁殖										繁殖	

## 食性・他生物との関わり

動植物を食べる。クモや昆虫、サクラやヤマザクラ、ブドウなどの果実を食べる。

主な採食場所は木の上で、樹幹部で餌を探して、枝から枝へと移りながら採食する。

秋の渡りの時期にはミズギヤアカメガシワなどの木の実を食べるという。

捕食者は猛禽類など。



ハルニレの実をついばむコムクドリ（オス）

## 繁殖生態

繁殖期は4月中旬から7月、一夫一妻で繁殖する。

繁殖期にはつがいになわばりを持つ。同じ地域に多数が営巣することもあるという。

樹洞やキツツキの古巣穴の中に巣を作る。営巣前にはオスが巣の周りでさえずり、侵入から巣穴となわばりを守る。定着後2週間で巣作りを始める。まず古い巣材の持ち出しをして、その後で新しい巣材として青葉を持ち込むという。オスメスともに巣作りを行うが、作業量はオスが78%を占

めるという。

新しい巣材を運び入れている間に交尾が多くされ、オスが求愛のさえずりをした後、メスがオスに近づいて交尾する。3～7個産卵し、オスメス交代で卵を抱くが、メスの方がはるかに多くの時間抱卵し、夜もメスのみが抱卵する。約15日でヒナがかえり、オスメス共同でヒナに給餌する。約15日育雛する。

## 興味深い話

- 標識調査で、7年の生存が確認されている。
- 渡ってきた当初はオスはできるだけ多くの営巣場所を確保する傾向があるという。そのため一時的に一夫二妻や一夫三妻になることがあるという。メス同士の争いでたいはいは一夫一妻に落ち着くという。
- なわばりの面積は150～200㎡くらいで採食はなわばりの外で行うという。
- 巣箱を利用したり、人家の屋根の隙間などに営巣したりすることもある。
- コムクドリ同士の争いは、巣作りの時期から産卵期にかけてが最も多く、オス対オス、メス対メスの争いが多いという。
- 親鳥はヒナを育てる際、途中（ふ化後10～13日）までは

鱗翅類（ガなど）の幼虫やセミといった動物質の餌を与え、その後、クワ、サクラなどの果実を与えるのだという。

■ ヒナへの給餌回数はオスメスほぼ同じくらいで、オスが給餌協力しないとヒナは巣立つことができない。まれに一夫多妻のままヒナがかえると、オスは最初にかえったヒナの巣の世話しかなくなるため、他のヒナが育たなくなってしまうことがあるという。

■ 繁殖後、夏の間は集団でねぐらを作るという。

■ 渡りの頃は群れで見られ、特に秋は大群を作る。ムクドリの群れに混ざっていることもある。春の渡りは秋ほどの大群にはならないという。

## 配慮事項

林冠が鬱閉していない、明るい落葉広葉樹林が大事。

### 参考文献

- 「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987

- 「鳥のおもしろ私生活」ビッキオ 編著、主婦と生活社 1997  
「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所 1996  
「日本の野鳥図鑑1 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995

- 小池重人 (1988) コムクドリの繁殖生態. *Strix*, 7 : 113-148.  
羽田健三・牛山英彦 (1966) コムクドリの生活史に関する研究. I 繁殖期 (1) A. 繁殖期の生活の経過: 繁殖準備・巣作り・交尾・産卵・抱卵・育雛・巣立ち. *日生態会誌*, 16 : 225-235.  
羽田健三・牛山英彦 (1967) コムクドリの生活史に関する研究. II 繁殖期 (2) B. 繁殖期の行動と生活場所 C. 種内関係 D. ナワバリ E. 生産率 F. 繁殖諸仕事の雌雄分担. *日生態会誌*, 17 : 49-53.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原樹林)  
鳥類

# コヨシキリ

*Acrocephalus bistrigiceps*

ウグイス科・夏鳥



コヨシキリ

## 名前の由来

小さいヨシキリの意で、「葦切(ヨシキリ)」はヨシの茎を切り裂いて中の虫を食べるのでこう呼ばれた。漢字名：小葦切

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)13.5cm、翼を開いたときの長さ19cm。スズメよりも小さい。

体の上面はオリーブ茶褐色で、白い眉斑(眉毛の様な斑点)の上に黒い線がある。下面はうっすらと黄褐色がかかった白色。

声：繁殖期には低木の枝先や草の茎の上にとまり、「カカチ、チリリ、キョッキョッ」「ジョッピリリ、ジョッピリリ、ギョッキョキリキリ、チリリ」などと金属的で高い細かな声で連続的にさえずる。

地鳴き(さえずりではない普通の鳴き方)では「ジュジュ」「ジジジ」などと鳴く。

類似種と区別点：シマセンニュウ、マキノセンニュウ、オオヨシキリ。

外見は互いに似ているが、さえずりで区別できる。シマセンニュウは「チッチッ、チュルチュルチュル」などと早口にさえずる。草むらから垂直に舞い上がってさえずることもある。

マキノセンニュウは「チリリリリ」と聞かれる高い細かな声でさえずる。

オオヨシキリは「ギョシヨシ、ギョギョシ、ケスケス」というような、少し濁った声でさえずる。



コヨシキリ。白い眉斑の上に黒い線がある



シマセンニュウ。さえずるとき舞い上がることも

## 生息環境・分布

水辺の丈の高い草原に生息。十勝では夏鳥。

分布：中国東北部、モンゴル、ウスリー地方、朝鮮半島で繁殖。冬は東南アジアに渡る。

日本では本州、九州の主に標高の高い草原で繁殖。冬は東南アジアに渡る。

北海道には5月下旬から6月上旬に渡来する。平地の草原でふつうに繁殖する。

十勝地方には5月下旬から6月上旬に渡来する。川原のヨシ原などに多数繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期						繁殖						
東南アジア(越冬期)	繁殖											

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
ワシタカ  
鳥類

## 食性・他生物との関わり

昆虫を食べる。

茎から茎へと移動しながら細くとがったくちばしで昆虫を捕らえる。

ヒナにはコオロギ類、アワヨトウの幼虫、バッタ類、ガの成虫、クモ類など草原の昆虫を与えることが多いという。カッコウの托卵対象になる。(→興味深い話の項参照)

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は5月中旬から8月、一夫一妻の番が多いが、まれに一夫多妻の可能性もあるという(木内、1970)。

オスの方がメスより早く繁殖地に渡来し、ヨシ原になわばりを作ると、丈の高い草の上部にとまってさえずる。

巣作りは6月初旬から始まり、ヨモギなど丈の高くなる草の茎やヤナギの幼木など低木の枝に、縫い付けるようにコップ形(ないしはお椀型)の巣を作る。巣材としてはイネ科の枯れ葉を主な材料として用い、産座には羽毛を利用するという。

巣作りはオスメス共同で行うが、巣材の運搬回数はメスの方がオスの倍以上だという(木内、1970)。

4~6個産卵し、オスメス交代で卵を抱くが、メスが巣にいる時間が約90%と圧倒的に多いという(木内、1970)。

13~14日でヒナがかえる。ヒナへの給餌はオスメス共同で行う。ヒナを抱く期間にはオスメスほぼ同じ割合で給餌す

るが、全体的にはメスの方が約70%を占めるという。ヒナは13~14日で巣立つ。巣立ち後も約2週間はなわばりの近くで親に養われるという。



さえずるココシキリ

## 興味深い話

■標識調査で、7年10ヶ月の生存が確認されている。

■アオジ、モズなどと共に、カッコウの托卵相手である。托卵とはカッコウの仲間が自分で巣作りをせずに、他の鳥の巣に卵を産み付け、抱卵や育雛をその仮親にさせてしまうこと。早めに生まれたカッコウのヒナは、仮親の卵を全て巣の外に落としてしまう。

■オスのさえずりはメスが繁殖地に来る前から始まるが、メスがなわばり内に姿を見せるとより盛んになるという。一方つがいができるとさえずりは極端に少なくなるという。

■北海道のヨシ原ではココシキリが優勢でオオヨシキリはその周辺で見られ、本州ではその関係が逆転しているのだ

という。



カッコウ。ココシキリなどに托卵する

## 配慮事項

湿地と周辺の草原、川原の草原や堤防の草地などでも繁殖を行っている。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ボックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所 1996  
「日本の野鳥図鑑1 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995

木内忠一 (1970) コヨシキリ. 長野県上水内郡誌自然篇、動物. 上水内郡誌, pp. 708-711. 上水内郡誌編集会.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# シジュウカラ

*Parus major*

シジュウカラ科・留鳥



シジュウカラ（オス）

## 名前の由来

「カラ」はシジュウカラ類などのよくさえずる小鳥の総称。地鳴きを「シジュウ」と聞きなしてつけた名。

漢字名：四十雀

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）14.5cm、翼を開いた際の長さ22cm。スズメくらいの大きさ。

のどから胸、腹にかけてネクタイのような黒い筋がある。頭は黒く、頬は白。首の後も白い。頭の黒とどの黒が首のスジでつながっている。背中では青灰色だが首の周りは黄緑色。

オスの「ネクタイ」は特に下腹で太くなっているが、メスでは細め。

声：ツツピーツツピーとさえずる。

類似種と見分け方：ハシブトガラ、コガラ、ヒガラ。

これらの種にはネクタイ状の黒い筋がない。

ハシブトガラはコガラと非常によく似ていて、ほとんど見分けがつかない。

ヒガラはくちばし下の黒色がのどから首周りを通って頭上の黒色とつながるが、ハシブトガラとコガラはのどまで。シジュウカラとヒガラは首の後ろが白いが、ハシブトガラとコガラは白くない。

日本のカラの仲間ではシジュウカラが一番大きく、コガラが一番小さい。



シジュウカラ。黒いネクタイが大きな特徴だが（左）、首の後ろが白く、背中の上部分の黄緑色も美しい（右円内）



ハシブトガラ。ネクタイはなくのどの黒が小さい



ヒガラ。ネクタイはないが、のどの黒は大きい。首後が白い

## 生息環境・分布

低地から低山帯の、原生林から人工林まで、様々なタイプの樹林にすむ。冬には平地の公園や住宅地などでもよく見られる。

分布：ユーラシア大陸中緯度地方から南はボルネオ島、ジャワ島まで分布する。

ほぼ全国にいる普通の留鳥である。

北海道では留鳥で、平地から山地にいる。

十勝では留鳥で、平地から山地の樹林に普通にいる。森林の主要種である。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
					繁殖							

## 食性・他生物との関わり

昆虫(成・幼虫)やクモ類を食べる。植物の種子、果実も食べる。

樹林内の下層部で枝から枝へと移動しながら餌を探す。春夏には樹皮につかまり、くちばしで樹皮をほじくったり樹皮片をはぎ取ったりすることが多い。秋には地上部において、落ち葉をひっくり返したりはねのけたりして餌を探すことも見られる。枯れ葉がからみ合った固まりを盛んに壊

して、隠れている虫を探し出すこともよくするという。シジュウカラ以外の鳥の行動をよく観察していて、追いついて餌を探したり、コガラやヒガラの貯えた種子などを奪って食べたりもするという。捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は4～7月、基本的に一夫一妻で繁殖する。繁殖期にはなわばり性が強く、オスのさえずりやいろいろな対立行動、あるいは実際の争いなどによって守られる。(→興味深い話の項参照)

巣は樹洞やキツツキの古巣などに作られる。春先にオスはメスにピッタリくっついて回りながらあちこちの巣作り候補地を紹介して回るという。(→興味深い話の項参照)

樹洞に大量のコケ類を運び込み、お椀形の巣を作り、産座

には獣毛などを敷くという。巣づくりはメスだけが行う。8～10個産卵し、メスのみが卵を抱く。その間オスはメスに給餌をする。

12～13日でヒナがかえり、ヒナへの給餌はオスメス共同で行う。20～22日でヒナは巣立ち、その後巣立ったヒナは約1ヶ月で独立するのだという。

## 興味深い話

- 標識調査で、6年の生存が確認されている。
- つがいのうち2%くらいは一夫二妻や一夫三妻が記録されている。
- つがいは冬になっても離れないことが多く、別の相手とつがうのは全体の10%程度だという。
- なわばり争いでは、オスは胸から腹の「ネクタイ」を見せ合ったりするという。
- オスはメスに巣作りの場所を紹介する際、入り口に飛びついて見せたり、樹洞にはいって入り口からのぞき、ほおの白いところをチラチラ見せたりするという。
- 巣箱もよく利用する。

- 生息環境に対しては柔軟性を持っていて、樹木さえ点在していれば、人工化された林(公園など)にも生息する。
- 繁殖期の後半からは、若鳥がルーズな群れを作り、時には100羽くらいの群れにもなるという。
- 冬の間も群れを作るが、しばしば他のカラ類やエナガなどとの混群でいることも多い。
- 秋から冬の群れは夕方になると解散し、それぞれのねぐらへ帰るのだという。
- 冬は餌台に来て脂身やヒマワリの種を好んで食べる。
- 十勝地方のアイヌ語で「エチキチキ」という。

## 配慮事項

低地から低山の樹洞がある落葉広葉樹林が大事。

### 参考文献

- 「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部 1987  
「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ 編著、主婦と生活社 1997

- 「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. I～III」清棲幸保、講談社 1978  
「山川弘氏からの聞き取り記録」内田祐一 (未発表)

- 中村登流 (1970) 日本におけるカラ類の群集構造の研究. II 摂食場所、食物の季節的変動および生態的分離. 山階鳥研報、6 : 141-169.  
斎藤隆史 (1987) シジュウカラ繁殖期の生活を定める冬の群. アニマ、171 : 78-87.  
Saito, T. (1979) a Ecological study of social organization in the Great Tit, *Parus major* L. II. Formation of the basic flocks. J. Ymashina Inst. Ornith., 11 : 137-148.  
Hinde, R. A. (1952) The behaviour of the Great Tit (*Parus major*) and some other related species. Behaviour Suppl., 2 : 1-201

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類

# シノリガモ

*Histrionicus histrionicus*

カモ科・冬鳥(少数越夏・繁殖)

## 名前の由来

「シノリ」は不明。漢字名の「晨(しん)」は夜明けの意。江戸時代中期から「をきのけんてう」として知られ、後期には「しのりがも」と呼ばれたという。「カモ」は「浮かぶ→うかむ→かむ→かも」だとする説、「雁(ガン)→かむ→かも」だとする説がある。漢字名：晨鴨



シノリガモ

## 特定種

国レッドリスト (2007) : 絶滅の恐れのある地域個体群 (東北以北) (LP)

## 形態的特徴

全長 (くちばしの先から尾の先まで) 43cm。体は丸く、くちばしは小さく、尾が比較的長くてとがっている小型のカモ。くちばしも足も青黒色。

オスの頭、背、胸、腹は紫黒色で、顔の前半、目の後方、首の上部、胸側に黒い線で囲まれた線状の白斑がある。脇は赤栗色、尾筒 (尾羽の付け根付近) の上下は黒い。

メスは全体が灰黒褐色で腹の中央がやや淡く、顔に3個の白斑(目先の上下と目の後ろ)がある。

声：冬に海上で泳いでいるときにはほとんど鳴くことはない。ただオスが「フィー」と口笛のような低い声で鳴くという記録があるという。アイスランドでの観察では、夏にオスとメスが「キッキクイー」あるいは「クイーアクイー」というような声を出していたという。

類似種と区別点：メスがクロガモやビロードキンクロのメスと似ている。

クロガモのメスは体が黒褐色で、目より下の顔半分が淡く見える。

ビロードキンクロのメスは大きくてくちばしも長く、その基部は厚い。また顔に淡色斑が2個あり、次列風切(翼後縁の中程の羽)は白い。



シノリガモのオス  
顔の前に大きな白い模様がある。目の後やさらにその後下にも白斑がある



シノリガモのメス  
目先の上・下と目の後に合計3つの白斑がある

## 生息環境・分布

冬は海岸の岩場や崖の多いところ、特に岩礁地で見られる。繁殖地は河川上流で滝と淵の連なる溪流。十勝では冬10～4月に海岸で普通に見られ、春から夏には十勝川、札内川などの上流部で少数見られる。

分布：ユーラシア大陸東部と北アメリカ大陸の高緯度地方に繁殖分布し、冬は幾分南方に渡る。

日本では九州以北に現れるが特に本州北部と北海道に多い。

北海道と本州北部では繁殖も確認されている。北海道では冬鳥。一部は留鳥で繁殖する。海岸や沿岸海上に普通に生息する。

十勝では冬に海岸で普通に見られる。春から夏には十勝川、札内川などの上流部で少数見られ、十勝川水系上流部ではヒナ連れのメスの観察により繁殖が確認されている。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	[Blue bar spanning all months]											
ユーラシア高緯度(越夏・繁殖期)	[Green bar from May to October]											



## 食性・他生物との関わり

冬は海で主に貝類、魚、甲殻類、ウニを食べ、繁殖地（河川の上流部）では水生昆虫、藻類などを食べる。

冬は荒波をかぶるような岩礁地で、水中に潜って採食する。カニを食べるときにはくちばしで捕らえて浮上し、足をくわえて振り回して足をもいだ上で、水面に落ちた胴を拾っ

て飲み込むのだという。

繁殖地では、水中に頭だけ入れて捕ったり、水際の岩についた藻類をこそげ取ったり、水中に5～20秒くらい潜って捕食したりするという。

猛禽類などに捕食される。

## 繁殖生態

日本では、北海道（十勝川水系上流部でも）や本州北部で一部繁殖が確認されている。ユーラシア大陸東部と北アメリカ大陸の高緯度地方で繁殖する。

繁殖期は5～7月、一夫一妻。つがいは冬から春にかけてに形成されるので、越冬地で秋から春にかけて、オスの求愛ディスプレイ（興味深い話の項参照）が見られる。

巣は溪流からあまり離れない場所にあり、草むらや岩陰、あるいは流路内の小島などの地上に作られる。浅いくぼみに羽毛の内張があるという。巣は充分離れて作られるが、なわばりははっきりせず、オスはメスの周りだけを守っているようだという。

卵は4～8個産まれる。オスは抱卵期の初めに群れとなって繁殖地を去ってしまい、メスのみが卵を抱く。ヒナは28～29日くらいでふ化し、体が乾くとすぐに巣から離れる。ヒナは60～70日くらいで独立する。



十勝で夏に見られたシノリガモのメス(左)とオス  
(十勝川上流のペンケニコロ川：新得)

## 興味深い話

■非繁殖期には海上で5～30羽ぐらいの群れで見られる。冬から春にかけてつがい形成のディスプレイ（誇示のための行動や動作）が行われる。5～9羽ぐらいのオスが1羽のメスを囲んで鳴きながら体を起こしてはばいたり、短い飛翔を繰り返したりする。また、頭を背の上に跳ね上げたり、くちばしを開いて上の方に向けたり、頭を前方や下の方に投げかけたりもするという。

■上記の他「会釈ディスプレイ」といわれるものがある。頭を水面と平行にし、くちばしを水平にして頭を楕円状に動かすというものだという。

■ヒナが現れる頃になると繁殖に失敗したメスたちが群れ

になり、他のメスのヒナを共同して警戒するようだという。

■宮城県花山村にある栗駒山一迫川（いちほがまがわ）では1973年頃から餌づけられ、毎年4～5月中頃までに3～4つがいが訪れる。5月中・下旬に葉オスがメスを追い回す行動や交尾が見られ、6月中旬になるとオスは群れでいなくなる。そのころふ化したてのヒナを連れたメスが1～2家族現れ、数週間過ごして一旦いなくなる。その後7月下旬にすっかり大きくなったヒナが再び現れるのだという。

■十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般（特にマガモ）を「ウォルンチカマ＝水の中にいる鳥」という。

## 配慮事項

主に岩礁のある水域を必要とする。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

佐藤広巳・小湊郁夫 (1988) 栗駒山麓一迫川におけるシノリガモの繁殖とその生態. *Strix*, 2 : 113-114.

Palmer, R. S. (1976) *Handbook of North American Birds*, Walterfowl (Part 1 & 2). Yale Univ. Press, New Heaven.

Cramp, S. & K. E. L. Simmons (1977) *Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa*. Vol. II. Oxford Univ. (eds.) Press, Oxford.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# シマセンニュウ

*Locustella ochotensis*

ウグイス科・夏鳥



シマセンニュウ

## 名前の由来

シマは島で、北海道のこと。センニュウは仙遊（せんゆう）から変化したと考えられている。“潜入”から来ているとする説もある。漢字名：島仙入

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(葦原・樹林) 鳥類

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）15.5cm。スズメより少し大きく、ウグイスほどの大きさ。

ウグイスに似たオリーブ褐色で、下面が淡い。淡色の眉斑（眉の様なもよう）がある。

尾は先が円く、先端が灰白色。

声：枯れ茎にとまって「チリリリチャカチャカ」「チッチッ、チュルルル」などと早口にさえずる。草むらの中から上方に短く舞い上がってさえずることもある。夜も鳴く。地鳴き（さえずりではない普段の声）は「チァチァチッ」あるいは「ジェジェエ」というような声だという。

飛び方：さえずる際、草地から5～10mの高さまで急角度で上昇し、翼を開いたままで滑空しながらさえずることがある。

類似種と区別点：ウグイス、エゾセンニュウ、マキノセンニュウ、コヨシキリ。

ウグイスは下面があまり淡くない。コヨシキリは白い眉斑の上に黒っぽい線がある。それぞれ互いによく似ているが、さえずりで区別できる。ウグイスのさえずりは有名な「ホーホケキョ」。エゾセンニュウは「トッピンカケタカ」とけたたましく鳴く。

マキノセンニュウは「チリリリリ」と聞かれる高い細かな声でさえずる。

コヨシキリは「カカチ、チリリ、キョッキョッ」「ジョッピリリ、ジョッピリリ、ギョッキョキリキリ、チリリ」などと金属的で高い細かな声で連続的にさえずる。



シマセンニュウ



ウグイス。眉斑があまり目立たない。水平に枝にとまる



コヨシキリ。白い眉斑の上に黒っぽい線

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期						繁殖						
フィリピンなど (越冬期)	越冬期									越冬期		

## 生息環境・分布

平地の草原。北海道では海岸の草原や川下流部に生息し、内陸に少ない。十勝では夏鳥。

**分布：**オホーツク海、日本海、太平洋の沿岸で繁殖する。フィリピンやボルネオ島、セレベス島などに渡って越冬する。

日本では主に北海道に夏鳥として飛来。

北海道には5月下旬～6月上旬に渡来し、沿岸で繁殖。道東と道北に比較的多い。

十勝には、6月上旬に渡来。十勝川など、河川の河口部を中心に分布。

## 食性・他生物との関わり

ムカデ、ヤスデ、ワラジムシなどやバッタ、アブラムシ、カメムシ、キリギリスなどの昆虫といった、地上にいる虫を食べる。

草から草へと敏捷に移動しながら餌を捕らえる。捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は6～8月、一夫一妻で繁殖する。オスはメスより1～9日早く渡来し、枯れ草などにとまったり、舞い上がったりしながらさえぎってなわばりを宣伝する。(→興味深い話の項参照)

草原の地上や低い草本の枝の上に、イネ科の葉や茎を材料にして深いお椀型の巣を作る。巣作りはオスメス共同で行うという。交尾は巣作りの時期に見られるという。(→興味深い話の項参照)

2～5個くらい産卵し、メスだけが卵を抱く。オスはこの間なわばり内でさえぎったり採餌したりする。

最後の産卵から13～14日でヒナがかえり、オスメス共同でヒナを育てる。

11～14日でヒナは巣立つが、ヒナは巣立ち後も飛ばず、さらに10～14日は親から給餌されるという。



さえぎるシマセンニュウ。舞い上がってさえぎることもある

## 興味深い話

- 標識調査で、7年の生存が確認されている。
- 潜入という字をあてたほうがふさわしいと思えるほど、草むらに潜って姿を見せないが、オスは草の上に出てきてさえぎることもある。
- さえぎる際、草の茎にとまってさえぎる他に、草地から5～10mの高さまで急角度で上昇し、翼を開いたままで滑空しながらさえぎってなわばりを宣伝する。この「飛行さえぎり(さえぎり飛翔)」は繁殖期を通じて見ることができる。

- 1,800㎡ほどのなわばりを守るという。
- 交尾直前には翼を半開きにして垂らし、一定のリズムで上下に動かす、という行動が見られるという。この行動は、つがい作りの時やなわばり争いの時にも見られるという。
- オスメスともに毎年同じ場所にやってくる。ただオスはほぼ同じ場所になわばりを作るがメスは同じ場所に定着しないので、毎年つがいの相手は変わるという。

## 配慮事項

藪のある海岸草原が大事。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
中田千佳夫 (1976) シマセンニュウ *Locustella ochotensis ochotensis* (Middendorff) の繁殖生物学的研究。I. 繁殖の概要と繁殖期にみられる歌、行動、整理生態、17(1.2) : 237-246.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# ショウドウツバメ

*Riparia riparia*

ツバメ科・夏鳥



ショウドウツバメ

## 名前の由来

土の壁に小さな穴を掘ってすむツバメであることからこの名がつけられたと思われる。ツバメの意はくちばしで土をくわえていき巣をつくるので「土食み(つちばみ)」と呼ばれ、チを略しミがメに変わりツバメになったという説、「ツバ(光沢)クラ(黒)メ(鳥)」からというもの、他に「ツバクラという鳴き声」から、「ツバ(鳴き声)クラ(小鳥)メ(鳥を示す接尾語)」から、など諸説がある。漢字名：小洞燕

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)13cm。茶色い小型のツバメ。尾の切れ込みは浅く、上面は暗褐色、下面は白く胸にT字形の褐色帯がある。「ジュジュ」と鳴く。

**飛び方**：ひらひらと羽ばたく感じで飛び、イワツバメよりも遅い。

**声**：地鳴き(さえずりでない普通の鳴き声)では「ジュー」とか「ビー」「ビルル」といった短い声で鳴く。「ジイジジジ、ピージイジジ」とせわしなく鳴き続けるのがさえずりではないと言われる。ヒナは「ジュジュ」と鳴く。

**類似種と区別点**：イワツバメ。

イワツバメは腰が白く胸にT字形の褐色帯がない。



ショウドウツバメの腹(左)と背中(右)。胸に「ネクタイ」があり、腰は白くない



イワツバメの背中。翼の下、腰が白いのが少し見える

## 生息環境・分布

河川や湖の岸、海岸の砂土、泥炭などの崖に集団で営巣する。十勝には5月中下旬に渡来する夏鳥。

**分布**：北半球の温帯以北に広く繁殖分布し、冬はアフリカ大陸、東南アジアなどの熱帯で越冬する。

日本では北海道のみで繁殖する。春と秋の渡りの時期に、本州以南を旅鳥として通過する。

北海道(十勝でも)では5月中～下旬に渡来する夏鳥。繁殖する。平野部の河川沿い、湖沼周辺などに生息し、河岸段丘や海岸段丘などの急斜面、水辺以外でも採土跡などの土質の崖に営巣する。

十勝には5月中下旬に飛来し、河岸段丘などの急斜面の土壁に集団営巣する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期						繁殖						
東南アジアなど(越冬期)	-									-		

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 食性・他生物との関わり

飛行中のウンカ、フウセンムシ、ミズムシ、ハエなどの昆虫類を食べる。

営巣地周辺の原野、湿地などの上を飛び回り、空中で捕食

する。ひらひらと羽ばたいて飛ぶ。イワツバメより飛び方が遅く、ツバメより滑空することが少ない。

猛禽類などに捕食される。

## 繁殖生態

繁殖期は6～8月で、年2回、一夫一妻で繁殖する。

土崖などに横穴を掘って巣穴とする。巣穴は直径5～9cmで深さは1mに及ぶものもある。巣の最深部に獣毛、羽毛、枯れ草を利用した椀形の産座がある。巣づくりはオスメスともに行い、2週間以上かけて巣穴を掘る場合があるという。集団で営巣し繁殖する。

産卵数は3～5個。オスメス交代で卵を抱く。抱卵日数は12～16日、オスもメスも同程度に抱卵するという。ヒナに対する給餌もオスメス両方が行い、約19日でヒナは巣立つ。



ショウドウツバメのコロニー(集団営巣地)とヒナに餌をやる親鳥(円内)

## 興味深い話

■人家に近い集団営巣地(コロニー)ではスズメに巣を横取りされることも多いという。

■産卵前の1週間はメスが外に出るとオスはその後ろにピッタリくっついて飛び、婚外交尾を防ぐためにメイトガードを行う。

■産卵期のメスは体内に卵を持っているため体が重く、その重々しい飛び方を見て周りのオスは婚外交尾を試みるという。

■巣立ち間際のヒナは巣から飛び出すようになる。巣穴に戻るときに隣接する巣穴に飛び込むことがあるため、親が間違えて自分以外の子に給餌することがある。しかしヒナは成長に従って「認識コール(signature call)」と呼ば

れる2音節の声を発達させ、これによって親は自分の子を区別できるようになるのだという。

■渡りの時期である春や秋には本州以南で旅鳥として見られるが、特に秋には河原や干潟に大群で現れ、しばしばツバメと混じってヨシ原などで集団ねぐらを形成するという。

■茨城県霞ヶ浦などで一部が越冬するという。

■繁殖活動を終わるとまず成鳥がコロニーを離れて渡りを開始し、幼鳥は成鳥より遅れて渡りを開始するという。

■一方で明らかに渡りの途中と思われる群れの中で餌やりが行われている写真もあり、渡り時に親子関係が続いている場合もあるらしいという。

■十勝地方のアイヌ語で「トメンピロ」という。

## 配慮事項

繁殖には段丘などにある切り立った土壁が必要。水衝部などで削れたそれ程高くない土崖などにも営巣する。

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)

「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「わたり鳥」吉井正・叶内拓哉、東海大学出版会 1979

「野鳥識別ハンドブック」高野伸二、日本野鳥の会 1980

「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. I」清棲幸保、講談社 1978

「山川弘氏からの聞き取り記録」内田祐一 (未発表)

Cramp, S. (ed.) (1988) Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Vol. V. Oxford Univ. Press, Oxford.

Beecher, M. D., I. M. Beecher & S. Hahn (1981) Parent-offspring recognition in Bank Swallows (*Riparia riparia*): II. Development

and acoustic basis. *Anim. Behav.*, 29: 95-101.

玉田克巳・大河原彰・柏川眞隆・阿部嗣 (1993) 中標津町におけるショウドウツバメのコロニーの個体数推定. 日本鳥類標識協会誌, 8(1): 15-18.

# セグロセキレイ

*Motacilla grandis*

セキレイ科・留鳥



セグロセキレイ

## 名前の由来

体の上面が黒いセキレイだから、こう呼ぶ。セキレイは鶺鴒と書き、背は背筋、令は冷たく澄んでいること。背筋が清冷な鳥という意味である。漢字名：背黒鶺鴒

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）21cm。背中が黒い、白黒のセキレイ類。

頭部、顔から胸、それに体の上の面が黒く、腹は白色。眉斑（目の上の眉のような模様）がくっきりと白く、左右がつながっている。のどのところも白い。

翼も白く、飛ぶと背中黒とのコントラストが目立つ。

声：「ジュジュ、ジュジュ」「ジジジ」と濁った声で鳴く。飛びながらも鳴く。

繁殖期には「ツイツイツイー、チーチー、ジョイジョイ」などと澄んだ声に少し濁った声を交えながら鳴く。

飛び方や歩き方：飛ぶときには、羽ばたきと翼を閉じての滑空とを繰り返す、波のような飛行曲線を描く。

両足を交互に出して素早く歩き、とまると尾を上下に振る。

類似種と見分け方：ハクセキレイ。

ハクセキレイは頭（顔）が白っぽくくちばしから目を通る黒い線がある。また「チュチュン、チュチュン」と鳴く。



セグロセキレイ。顔は黒く白い線がある



ハクセキレイ。顔は白く黒い線がある

## 生息環境・分布

低地、低山帯、時には亜高山帯の河川とその周辺に生息する。十勝では河川の中・下流部で1年中見られる留鳥。

分布：基本的に日本列島のみに分布する日本固有種。ただし、ウスリー川（ロシア沿海地方、中国国境）南部と朝鮮半島での繁殖記録がある。

日本では、北海道、本州、四国、九州で留鳥として繁殖し、

対馬、伊豆諸島、奄美大島には冬鳥として現れる。北海道では夏鳥。一部留鳥で繁殖する。河川中・下流部の河原に生息する。河川上流部でもダム湖や河原など開けた環境があると生息する。冬にも少数が残留する。十勝では留鳥で繁殖する。河川の中・下流部に生息する。

## 食性・他生物との関わり

トビケラ、カワゲラ、カゲロウ、ハエ目の幼虫や成虫を主に食べる。

水辺の地上などを歩いて餌をついばむ。キセキレイほどで

はないが、飛んでいる虫を河原の石上から飛びついて空中で捕らえるフライングキャッチをしばしば行う。猛禽類などに捕食される。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
					繁殖							

## 繁殖生態

繁殖期は3～7月で、一夫一妻。オスは冬の間からさえずり始め、なわばりを持ってオスに脅しのディスプレイ（誇示のための行動や動作）を行ったり、メスに求愛ディスプレイを行ったりする。（→興味深い話の項参照）

オスメスで巣作りの場所を探して回り、土手の窪み、河原の石や流木の下、建物の屋根の隙間などに枯草などで腕型の巣を作る。内装は獣毛・羽毛・綿クズなどを使うという。巣作りはメスが先行、オスはその間巣の近くで頻繁にさえずるという。

## 興味深い話

■繁殖期にはなわばりを持つ。行動圏は10～30haでその範囲に1～16haのソングエリア（よくさえずる場所を含む範囲）があり、なわばりにあたる。なわばりの境界での、オスどうしのディスプレイ（他個体に対する誇示行動）は、追いかけ、頭を上下させる、ジャンプする等の威嚇などがある。

■求愛行動は、メスが前傾姿勢で尾羽を上げるポーズをとるディスプレイで始まる。これに対してオスは尾羽を開き翼を下げる。冬は埒(ねぐら)に集まるが、日中は埒を離れ、川や水田などに出向き、オス単独かつがいで行動する。採餌のためのなわばりを持ち、境界では繁殖期と同様のディスプレイを行う。

■基本的には一夫一妻だが、一夫二妻の記録もあるという。  
■セグロセキレイの社会は女性に厳しく、巣立ったヒナがある程度大きくなると、メスのヒナは先に親のなわばりから追い出され、オスのヒナのほうが長い間給餌される。なわばりをつくって守るのは主にオスであるため、オスを優先して育てることが自分の子孫を残すのに有利になるからではないかといわれている。

## 配慮事項

餌となる昆虫類が生息する水辺が必要。

4～6個の卵を産み、卵はオスメス交代で抱くが、夜間はメスのみが抱くという(篠田,1975)。12～13日でヒナがかえる。

ヒナは両親の世話を受け、13～15日くらいで巣立ち、その後約15日で独立する。

多くのつがいは2回目の繁殖をするという。

■十勝地方のアイヌ語では、セキレイ類を「オチュチリ」という。

■日本神話ではセキレイは国産みの神に性行為を教える鳥として出ており、またアイヌ語名の「オチュチリ」も「交尾する鳥」の意だという。

■セキレイの古名の稲負鳥(いなおうせどり)は刈り取った稲穂のゆれる様子がこの鳥の尾をふるのに似ていたからである。



セグロセキレイ

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「日本の野鳥590」真木広造・大西敏一、平凡社 2000  
「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ 編著、主婦と生活社 1997  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「分類アイヌ語辞典」知里真志保、日本常民文化研究所 1962  
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

Nakamura, S. (1985) Clutch size and breeding success of the Japanese Wagtail *Motacilla grandis*, with a special reference to its habitat and mating system. J. Yamashina Inst. Ornith., 16 : 114-135.

Nakamura, S. (1982) Social structure of the Japanese Wagtail *Motacilla grandis*. J. Yamashina Inst. Ornith., 14 : 325-343.

# センダイムシクイ

*Phylloscopus coronatus*

ウグイス科・夏鳥



センダイムシクイ

## 名前の由来

「チョチョチョ、ビー」という鳴声から「千代(ちよ)むしくい」と呼ばれたのが、後に「千代(せんだい)むしくい」に転じたと言われる。ムシクイは「虫食い」で、昆虫食であることから。漢字名：仙台虫食

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)12.5cm。スズメよりも小さい。

体の上面は緑っぽいオリーブ色で、下面は汚れた白色で緑褐色を帯びる。

目の上に白い眉斑(眉のような模様)があり、その上はわずかに暗い色。頭頂部の前から後にかけてやや明るい灰緑色の線が通っている。

声:「チョチョ、ビー」「チョチョチョ、ビー」とさえずり、これを「焼酎一杯、グイー」と聞きなしている。「チェーンチェーンチェーン」などともさえずる。

地鳴き(さえずりではない普段の声)は「フィッ、フィッ」という声だという。

類似種と区別点:エゾムシクイ、メボソムシクイ。

エゾムシクイは褐色味が強い。メボソムシクイは下面が黄緑色。

ウグイス類(ムシクイの仲間、センニュウの仲間、ヨシキリの仲間)はあまり目に触れる所に出てこないうえによく似ていて識別が難しいが、さえずりで区別出来る。

エゾムシクイは「ヒーツーキー、ヒーツーキー」と高い声でさえずる。

メボソムシクイは「リュッリュッリュ」と小さく鳴いてから「チョチョリ、チョチョリ、チョチョリ」と歯切れのいい声でさえずる。



センダイムシクイの頭には、中央部縦に薄い色の線がある



センダイムシクイはさえずるときも、葉の陰に多い

## 生息環境・分布

低山帯の落葉広葉樹。北海道では平地の林に普通にすむ。林床に藪が多いところを好む。十勝では夏鳥。

分布:ウスリー地方から朝鮮半島、日本にかけて繁殖し、東南アジアで越冬する。

日本には夏鳥として渡来し、北海道から九州までの各地で

繁殖する。

北海道には5月上旬に渡来。おもに標高600m以下に分布する。

十勝には、低地から低山に分布、繁殖する。平地では河畔林にも多い。小規模林にはいない。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期					繁殖							
東南アジア(越冬期)												



## 食性・他生物との関わり

主に甲虫、ハチやアリ、ハエやアブなどの幼・成虫を食べる。

藪の中で虫を捕らえるのだが、木の上で餌を探すことが多く、地上に降りて採餌することはまれだという。枝から枝に飛び移りながら葉や枝についている虫を捕らえ、枝から見上げるように葉の裏を探し、見つけた虫に飛びついて捕らえもする。

しばしばツツドリに托卵される。

捕食者は猛禽類など。



センダイムシクイ

## 繁殖生態

繁殖期は5～6月。

草の根元や崖のくぼみに、枯葉、樹皮、イネ科の茎、コケ類などを材料にして、横に出入り口のある球形の巣を作る。産座には菌糸束や獣の毛、羽毛を使うという。

4～6個産卵し、約13日卵を抱いて、ヒナをかえす。

ふ化したヒナはオスメス交代で抱かれ、ふ化後約14日で巣立つ。

繁殖期の生態など不明な点が多いという。

近縁のニシセンダイムシクイについて：(アフガニスタンで繁殖する鳥) 一夫一妻で繁殖。巣材運びはオスメスともに行うが、実際に巣を作るのは主にメス。3～4個産卵し、オスメス協力して卵を抱き、オスメス共同でヒナに餌を運んだり巣から糞を運び出したりするという。

## 興味深い話

■センダイムシクイは常に林の中で生活し、さえずり場合でも広葉樹の茂みの中などに隠れていて目立つ場所にてこないため姿をなかなか見られない。繁殖期の生態、つがい作りやその解消などについても不明な点が多いという。

■センダイムシクイの卵の色は純白で斑紋がない。

■しばしばツツドリ(カッコウの仲間)に托卵される。托卵とは他の鳥の巣に卵を産みつけ、その鳥にヒナを育てさせること。

■「チョチヨチヨ、ビー」とさえずり、これを「焼酎一杯、グイー」と聞きなしている。

■センダイムシクイのさえずりは繁殖地のみでなく、春の渡りの途中でも聞かれることがあるという。

■カラ類の混群やメジロの群の後について採食することがあるという。

■センダイムシクイは繁殖を終えると本州でも8月中旬から山を降り始め、9月中旬までには平地の林を通り抜け南

下してしまう。センダイムシクイとエゾムシクイは南下が早いので、10月にムシクイの仲間を見かけたら、ほとんどがメボソムシクイだと見て良いという。

■山口県では「すけべどり」とも呼ばれるという。

■「むしくひ」はかつて「ウグイスの老鳥」「ホトトギス類」を指していたという。



センダイムシクイと托卵するツツドリ(円内)

## 配慮事項

小規模な林には見られず、林床に藪のある林を必要とする。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)

「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997

「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987

「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. I」清棲幸保、講談社 1978

「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ 編著、主婦と生活社 1997

「The Birds of Pakistan. Vol. 2, Passeriformes」Roberts, T. J., Oxford Univ. Press 1992

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# タンチョウ

*Grus japonensis*

ツル科・十勝では夏鳥(一部越冬)



タンチョウ

## 名前の由来

丹は赤のことで、頂は頭の上をさす。頭の上が赤い色なので、タンチョウという名がついた。「ツル」の語源は「列る(つらなる)」からという説、鳴き声から来たという説がある。漢字名：丹頂(別名、丹頂鶴)

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類

## 特定種

文化財保護法：国指定特別天然記念物  
種の保存法：国内希少野生動植物種

国レッドリスト(2007)：絶滅危惧Ⅱ類(VU)  
北海道レッドデータ：絶滅危惧種(En)

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)140cm。頭頂が赤く、白と黒の大きなツル。ほぼ全身が白く、目の前から長い首にかけてと、翼の後縁が黒い。翼の黒い部分の内より体に近い方(三列風切)は長く、飛んでいないときには黒い尾のように見える。くちばしは黄色く、足は黒い。

声：繁殖期に鳴き声を聞く機会は少ないが、親鳥がヒナを連れ歩いているときに警戒声として「カックルルー」「コ

ロロ」というような声を上げる。幼鳥は「ピーー」と鳴く。秋から春先にかけては(釧路方面で)人里近くにいるため鳴き声がよく聞かれる。夜明けとともに「コロローン、コロローン」とか「クワーオ、クワーオ」とよく響く声で鳴き交わす。

## 生息環境・分布

繁殖地は広い低層湿原(水位の高い湿原)、河川、湖沼、海岸などに接する湿原。越冬期には湿地、耕地、不凍河川、湖沼、干潟に生息するが、多くは給餌場集まる。

分布：アムール川中流域及び沿海地方、中国東北部で繁殖し、朝鮮半島、中国東部(揚子江河口北部など)で越冬する。

国内では北海道道東の湿原に分布。

北海道では留鳥で、道東および国後島、歯舞諸島の湿原で繁殖。越冬は主に鶴居村、阿寒町、音別町、標茶町の給餌場周辺。

十勝地方には夏鳥として3~4月に飛来し、太平洋岸の湖

沼群および十勝川流域の湿地で繁殖する。非繁殖期(11月ごろ)には釧路方面へ渡去するが、越冬するものもいる。



つがいや家族を作っていないタンチョウの小群

## 食性・他生物との関わり

雑食性で湿地に生息するあらゆる動植物を食べる。植物の新芽・葉・種子・果実、穀類のほか昆虫、ミミズ、貝類(タニシなど)、甲殻類、カエル、魚類、小鳥の雛、ネズミも食べる。ゆっくり歩きながら長い首を下げて地上の餌を

ついでむ。また河川や湖沼では水の中を歩き、小魚をくちばしで捕らえる。ヒナのうちはキツネや猛禽類などに捕食されることもある。

営巣地はヨシやスゲ類を主とする湿原。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
一部越冬												
繁殖						■	■	■	■	■	■	■

## 繁殖生態

繁殖期は3～10月で、年に1回、一夫一妻で繁殖する。つがいは一度形成されると、どちらか一方が死ぬまでパートナーを変えることはないと言われていたが、変える場合もある。

繁殖地に向かう前、春先になるとつがいの求愛行動が行われ、向かい合って飛び跳ねたり大声で鳴きあったりする、いわゆる「ツルの舞」が見られる。(→興味深い話の項参照) 営巣地はヨシやスゲ類を主とする湿原。

繁殖地ではつがいに分かれて湿原に分散する。湿原の中の地上に枯れたヨシを積み上げ、大きな皿形の巣をつくる。巣作りはオスメス共同で行われるが、巣材集めはオス、巣の成形はメスという作業分担があるという。

卵は3～4月に2卵を産む。オスメス交代で卵を抱き約1

ヶ月でヒナがかえる。ふ化後3～5日で巣を離れるが、巣にいる間には2羽で激しい突き合いをし、時として殺してしまうこともあるという。ふ化後約100日で飛べるようになるが、翌年の子別れ時期(2～3月頃)まで「ピーピー」と鳴いて親に餌をねだる。(→興味深い話の項参照)



タンチョウのつがい



タンチョウの親子(右端が巣立って間もないヒナ)

## 興味深い話

- 寿命は飼育下では約40年、野生では14年(H16生存中)。
- 日本産鳥類の中で最大級のもののひとつ。翼を広げると240mにもなる。
- 求愛ディスプレイ(他個体に対する誇示行動)の際には、まずオスが「クァー」と鳴き、その後メスが「カッカ」と鳴く。
- オスメスが抱卵を交代するときにも、くちばしを上に向け「クァー、カッ・カッ、クァー、カッ・カッ・・・」と鳴きあうという。
- 卵はいわゆる卵形、長さは(飼育下のもので)長さ9.6～11.1cm。(ちなみにニワトリのMサイズ卵で長さ5.6cmほど)
- 抱卵は3から7月、特に4～5月に行われるが、この間に何かの事故で卵が無くなると、直ちに巣につくのをやめ、だいたい2週間くらいで再産卵を行うという。ただし再産卵しないつがいもいる(特に時期が遅くなった場合)。
- 巣立ち後の給餌では、親は餌を運んできた際に「グルルルー」というかすかな音をたててヒナに合図する。また、ヒナが小さなうちにはくちばしからくちばしへ直接餌を渡すが、大きくなるにつれ、餌を子どもの前に置いて拾い上げさせることが増えてくるという。
- 冬は給餌を受けられる阿寒町や鶴居村など人里で群れを

作って越冬する。群れにリーダーやボスは存在せず、つがいやヒナ連れの家族単位で行動し、これに若鳥が加わるといふ。

■冬の夜は凍らない川の浅瀬を畴(ねぐら)とし、大きな群れとなって休む。

■2～3月頃親鳥は前年に生まれた子どもに対する給餌回数を減らし、一方で突く回数を増やして子別れを行うという。

■タンチョウの生存率は、①産卵数の70～80%がふ化、②ふ化数の22～36%(産卵数の17～27%)が10ヶ月生存、③10ヶ月齢のうち70%ほど(産卵数の10%ほど)が5年生存するという。

■十勝地方のアイヌ語では「サロルンカムイ」という。



秋、河川敷の水たまりにやってきたタンチョウの家族

## 配慮事項

繁殖にはヨシなどの植生のある湿地が必要である。

### 参考文献

「タンチョウ そのすべて」正富宏之、北海道新聞社 2000  
「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編) 中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978  
「北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック2001」北海道 2001  
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

釜田美穂・富岡辰先 (1991) 北海道鶴居・伊藤タンチョウサンクチュアリにおけるタンチョウの家族群の解消過程. Strix, 10 : 21-30.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# チゴハヤブサ

*Falco subbuteo*

ハヤブサ科・夏鳥

## 名前の由来

チゴハヤブサは「稚児隼」で小さいハヤブサの意。ハヤブサの語源は速く飛ぶことから「速飛翼（はやとびつばさ）」→「速翼（はやつばさ）」→「はやぶさ」となったという。漢字名：稚児隼



チゴハヤブサ

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原) 鳥類  
フシタマシ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）28～37cm。両翼を開いたときの長さ69～84cm。およそハトくらいの大きさ。

翼は長く、先端はとがっている。頭上から背面は青灰黒色。頬の黒いひげ状の斑が目立つ。

体の下面は白く、胸と腹には縦に黒いスジ模様が入っている。成鳥の下腹は赤茶色。

強い足と長く鋭利な爪、ガッシリとして鉤型に曲がった鋭いくちばしを持つ。

声：鳴くことはまれ。繁殖期に親鳥は「キュッキュッキュ」  
と警戒の音を出すという。

飛び方：とがった翼でやや深い羽ばたきと滑空を交えて直線的に早く飛び、急旋回や急降下をして鳥を捕らえる。

類似種と区別点：ハヤブサ。

ハヤブサは大きくてカラスより少し小さい位の大きさ。成鳥の胸腹には横線があり、下腹部は赤茶色にならない。



チゴハヤブサの飛んでいる形。ハヤブサの仲間は翼の先がとがっている



チゴハヤブサ。ハトくらいの大きさ。成鳥には縦じま。耳あたりまで白い（円内）



ハヤブサ。カラス近くの大きさ。成鳥は横じま。耳のあたりは黒い

撮影：浦幌野鳥倶楽部

## 生息環境・分布

平地の疎林で繁殖するが、札幌市内でもかなりの数が営巣している。十勝では夏鳥。

分布：アフリカ大陸の北岸とユーラシア大陸の亜寒帯から温帯に広く繁殖地を持つ。

日本では北海道と東北地方北部で少数が繁殖し、冬はイン

ド北部から中国南部に渡る。一部本州中部以南にとどまるものもいるという。

北海道には夏鳥として4月下旬～5月上旬、全域に渡来し、繁殖する。

十勝には、夏鳥として渡来し、平地の疎林などで繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期					■							
中国南部・インド北部（越冬期）	■									■		
						繁殖						

## 食性・他生物との関わり

主にヒバリ、ツバメ、スズメといった20～30gくらいの小鳥類。ヒヨドリやイカルなどの中型の鳥も捕食する。またトンボ、バッタなどの昆虫やコウモリなども食べる。飛んでいる小鳥を上空から翼をすぼめ急降下して襲ったり、逃げまどう鳥を急旋回して追いかけたりする。捕らえた鳥は一定の食事場所へ運んで食べるという。また、トンボな

どの昆虫は飛びながら食べるという。巣はカラス、ハイタカ、カケスなどの古巣を利用する。捕食者であり、食物連鎖の頂点にたつ種のひとつ。成長してしまえば他の生物に襲われることはあまりない。

## 繁殖生態

一夫一妻で繁殖し、つがいいでなわばりを持つ。5月上旬前後に繁殖地にやってくると営巣地上空でつがいによる求愛飛翔が行われるという。(→興味深い話の項参照) 自分では巣は作らず、カラス、ハイタカ、カケスなどの古巣を利用し、産座には小枝を敷く。5～6月に、2～3個卵を産む。主にメスが卵を抱く。

約28日でヒナがかえり、ふ化後2週間ほどでヒナは自力で餌を食べられるようになるという。28～34日で巣立つという。巣立ち後間もないヒナは1ヶ月から1ヶ月半くらい親から給餌を受ける。(→興味深い話の項参照)

## 興味深い話

- タカ科の鳥(オオワシ・ハイタカなど)が足の爪で獲物を殺し、くちばしを使って肉を引き裂くのに対し、ハヤブサ科の鳥(チゴハヤブサ、ハヤブサなど)は足の爪で獲物をつかみ、くちばしの一撃で殺す。
- ハヤブサ科の鳥はタカ科の鳥のように上空を舞って餌を探すのではなく、高速追撃を行い、上空からの急降下によって獲物を捕らえる。その際のスピードは、瞬間的には時速200kmを超えるという。
- 繁殖地にやってくると、営巣地上空をつがいいで旋回しながら、オスがメスに向かって急降下したり、2羽一緒に急降下し、樹冠をかすめるように高速で飛んだりする求愛飛翔を行う。
- 繁殖期にはオスが差し出す獲物をメスが体をひねり、空中で受け取る求愛給餌も行われるという。
- 巣立ち後間もないヒナは親の姿を見つけると「キーキー」と鋭い声で鳴いて、親に餌をねだるという。

■十勝地方のアイヌ語名は不明。



チゴハヤブサ。

## 配慮事項

営巣するための樹林と、その周辺に農耕地、草地、牧草地、原野などの広く開けた空間が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)  
「日本動物大百科 第3巻 鳥類I」日高敏隆監修、平凡社 1996

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995  
「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978  
米川洋 (1992) 北海道の集約農業地域におけるチゴハヤブサの食性。上土幌町ひがし大雪博物館研究報告、11: 49-53.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 花

(外来種) 花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類

# チュウヒ

*Circus spilonotus*

タカ科・夏鳥（一部留鳥）



撮影：浦幌野鳥倶楽部

チュウヒ

## 名前の由来

低く飛ぶので「中飛」とされたと考えられる。鳴き声からという説もある。漢字名：沢鷲

## 特定種

国レッドリスト（2007）：絶滅危惧 I B 類（EN）

北海道レッドデータ：絶滅危急種（Vu）

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オス48cm、メス58cm、両翼を開いたときの差し渡し翼開長113~137cm。

地上で餌を捕るためか、左右の目がフクロウのように前向きについている。

オスの色彩は変化が大きい。頭部が灰色で灰褐色の縦縞があり背面が灰色で腰と下面が白く、翼端に黒色横斑があるタイプが一つ。頭部が黒く背面にも黒色斑があり翼端が黒いタイプがもう一つ。さらに、これらの中間型もある。

メスは頭部や胸が黄白色、背面は褐色、下面は茶褐色のものが多い（これは幼鳥だとする説もある）。

声：繁殖期以外にはほとんど鳴かない。繁殖期のディスプレイ（誇示のための行動）時に、オスは「ミューア、ミューア」とか「ミューミュー」とかと鳴くという。給餌の時には「クイークイー」とか「キキキキキッ」とかと鳴くことがあるという。

飛び方：獲物を探す際は、丈の高いヨシなどの草地や道沿い、水路沿いで、地上2~3mの低空を、ゆっくりとした羽ばたきと翼をVの字に保っての滑空とを繰り返しながら飛ぶという。獲物を見つけると尾羽をいっぱい広げ、垂直近くの角度で地上に舞い降りて捕らえる。

繁殖期前になると、高空と地面すれすれの間で急上昇・急降下を繰り返すなど、様々なディスプレイ（誇示のための行動）の飛び方をするという。（→興味深い話の項参照）

類似種と区別点：トビ。

チュウヒは上昇気流に乗って舞っている際に正面から見ると両翼が浅いV字になるが、トビはほぼ水平。またトビも全身褐色であるが尾が凹型で、下面の翼角（翼前縁で前に突き出たところ）近くに白いパッチ状の斑がある。



チュウヒ。翼を浅いV字にして低空を飛行する。

## 生息環境・分布

平地の広い草原。特にヨシ原など河川敷や湖沼周辺の湿原に生息する。十勝では夏鳥。

分布：ヨーロッパおよびアジアの温帯・亜寒帯で繁殖し、北方のものは熱帯に渡って越冬するという。

日本では多くが冬鳥として本州以南で越冬する。本州中部

以北および北海道で少数が繁殖する。

北海道では夏鳥（一部留鳥）で、平野部の草原、特に河川敷や湖沼周辺の湿原に生息する。

十勝では夏鳥（一部留鳥）で、ヨシ原のある広い湿地などに生息する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
本州以南 (越冬期・通年)	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
繁殖					■	■	■	■	■	■	■	■
一部越冬											■	■

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
ワシ・タカ

## 食性・他生物との関わり

草むらに潜むネズミ類、小鳥類、カエルなどを食べる。晩秋の干拓地などではカマキリなどの昆虫も食べる。獲物を探す際は、丈の高いヨシなどの草地や道沿い、水路沿いで、地上2～3mの低空を、ゆっくりとした羽ばたきと翼をVの字に保っての滑空とを繰り返しながら飛び、獲物を見つけると、尾羽をいっぱい広げ垂直近くの角度で

地上に舞い降りて、捕らえる。

捕らえた獲物は高さ1m前後の草むらの中にある料理場に直行して解体するという。

捕食者であり、食物連鎖の頂点にたつ種のひとつ。成長してしまえば他の生物に襲われることはあまりない。

## 繁殖生態

繁殖期は4～7月、一夫一妻で繁殖する。

越冬地では2月下旬頃からオスが他のチュウヒを追い始め、3月下旬にかけて、様々な飛び方による求愛ディスプレイ（誇示のための行動・動作）が見られるという。（→興味深い話の項参照）

巣作りはメスのみが行う。他の多くの猛禽類と異なり、樹上に巣を作らず、地上に枯れたヨシやススキの茎を積み重ねて作り、産座には柔らかなイネ科植物の枯れ葉を敷くという。

5～7卵を産む。昼夜連続して、もっぱらメスが卵を抱く。抱卵中メスは巣を離れることは少なく、オスが餌を運ぶという。（→興味深い話の項参照）

31～38日ほどでヒナがかえる。ふ化したヒナはスズメくらいの大きさで、全身が純白の幼綿羽に覆われる。メスがヒナに餌を与え、オスは運んできた餌を空中でメスに受け渡す。（→興味深い話の項参照）

約35日ヒナを育てる。ヒナはふ化後28日くらいで巣を離れるがその後も親から給餌を受けるのだという。

## 興味深い話

■標識調査では13年生存の記録がある。

■他の多くの猛禽類と異なり、樹上に巣を作らず、ヨシ原の中の地面に営巣する。巣は枯れたヨシやススキなどの茎を積み重ねた上に、軟らかいイネ科草本などの枯葉を敷いた産座をつくる。また、古巣を利用せず、毎年新しい巣をつくる。

■他の猛禽類よりも顔盤（細かい羽が顔の輪郭を作るように並んでおりパラボラアンテナの様に集音効果があると言われる）が発達しており、目が正面寄りについているので、少しフクロウっぽい顔をしている。

■求愛ディスプレイのための飛び方としては、上昇気流に乗ってらせん状に舞っているメスの隣でオスが波のような飛行曲線を描いて飛んだり、オスメス2羽でらせん状にかなりの高空まで昇ったり、連れ添ってヨシ原上を低く飛ん

だりする。

■あるいは高空からほぼ垂直に急降下し、地面すれすれのところで急上昇に転じ、上昇後また急降下、というのを繰り返す、コイルを横にしたような軌道で飛ぶ、といったものもあるという。

■さらに外敵を追い払ったときには高空で宙返りしてから急降下し、途中でひねりを入れて着地するという。

■抱卵中やヒナを育てているときには、餌を持ってきたオスが巣の上空を「キューイ、キューイ」と鳴きながら旋回すると、メスも飛び立って「キャキャキャキャ」と鳴きながらオスを追いかける。オスは高くまで急上昇した後メスがけて急降下し、メスが反転して向き合った瞬間に、空中で餌が受け渡されるという。

## 配慮事項

湿原など、広いヨシ原をもった環境が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「鳥類標識調査報告書」(財)山階鳥類研究所、1994  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「日本動物大百科 第3巻 鳥類I」日高敏隆監修、平凡社 1996

「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995

「図鑑 日本のワシタカ類」森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男、文一総合出版 1995

西出隆 (1979) 八郎潟干拓地におけるチュウヒの繁殖記録. 山階鳥研報、11: 109-120.

若林稔 (1982) 鍋田でチュウヒが繁殖. 愛知県弥富野鳥園事務所「野鳥園だより」、17: 3-4.

中川富男 (1991) チュウヒの移動 (日本鳥学会1990年度大会ポスター発表要旨). Jap. J. Ornithol., 39(4): 139.

彦坂富志 (1984) チュウヒ観察記. 愛知県弥富野鳥園事務所「野鳥園だより」、22: 1-4.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシタカ

# ツルシギ

*Tringa erythropus*

シギ科・旅鳥



ツルシギ

## 名前の由来

黄赤い脚がととも長く、くちばしも長い鳥で、まるでツルのようなところ呼ばれた。「シギ」は「騒ぎ(さやぎ)」から来ているといい(新井白石、大言海)シギの羽音から考えられたのではないかという。漢字名：鶴鷗

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)32cm。くちばしは細くて長く、黒くて基部は赤い。足も長く、暗赤色。夏羽では全体がすすけた黒色で目の縁は白く、体の上面には白い羽縁(羽毛の縁)と斑点がある。飛翔時は背の中央と腰が白く見える。冬羽では頭上は灰色で黒い縦斑があり、体の上

面も灰色で白い羽縁とその内側に黒線がある。体の下面は白く、首の横や脇などに灰褐色の斑紋がある。

**類似種と見分け方**：冬羽でアカアシシギと似るがツルシギの方がくちばしは長く、下のくちばしだけが赤い。ツルシギの白い眉斑(眉毛の様な斑点)は目の後ろまで明瞭。

## 生息環境・分布

海岸や湖沼沿いの砂泥地、水田、ため池などに現れる。十勝には3~5月、8~10月に旅鳥として飛来する。

**分布**：ユーラシア大陸の高緯度地方や北極圏に繁殖分布し、アフリカ大陸中部からインド、東南アジアにかけて越冬。日本には旅鳥として各地に現れ、8~10月と3~5月に見

られるが、飛来数は春の渡り期のほうがずっと多い。北海道では旅鳥。河口部や海岸近くの湖沼、まれに内陸の水域にも飛来する。十勝地方には、旅鳥として渡来。河口部や海岸近くの湖沼、まれに内陸の水域にも飛来する。

## 食性・他生物との関わり

干潟などの砂泥地に生息する水生昆虫の成虫・幼虫、甲殻類、軟体動物などを食べる。猛禽類などに捕食される。

## 興味深い話

- 足が長い為、他のシギ類よりは深い所で採餌する。
- 春には多く、秋には少ないという。

## 配慮事項

採餌環境として干潟などの砂泥地が必要。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
ユーラシア高緯度(繁殖期)												
東南アジア他(越冬期)												

## 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

魚類

底生動物

爬虫類  
両生類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原樹林)  
鳥類



# トウネン

*Calidris ruficollis*

シギ科・旅鳥



トウネン

(イラスト：タカダヒロキ)

## 名前の由来

トウネンは「当年」で今年のこと。この鳥は体が小さく、今年生まれたばかりのシギのように見えるのでこの名がついた。漢字名：当年

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）15cm。くちばしの短い小型のシギ。夏羽では顔から首は赤褐色。頭上から体の上面は赤褐色で黒い軸斑と白い羽縁がある。胸から腹は白い。飛翔時は翼に白帯が出る。くちばしと足は黒い。冬羽は上面が褐色で黒い軸斑があり、下面は白くて胸側に褐色

斑がある。

類似種と見分け方：ヒバリシギ、オジロトウネン。

ヒバリシギは上面の茶褐色味が強く、足は黄緑色。オジロトウネンの冬羽は灰色味が強く、足は黄緑色。

## 生息環境・分布

海岸の砂浜の波打ち際や水溜り、内湾や河口部の潮干帯の干潟砂泥地、湖沼、ため池、河川の岸辺や中洲の砂泥地などに現れる。十勝には3～5月、7～11月に旅鳥として立ち寄る。

ナ川河口部、チュコト半島、アナジュール川河口部などのごく限られた地域に繁殖分布し、冬は東南アジアからニューギニア島、オーストラリア大陸に渡る。

分布：ユーラシア大陸の北極圏のハタンガ川、レナ川、ヤ

日本には旅鳥として各地の河口部や海岸近くの湖沼に多数現れる。

## 食性・他生物との関わり

浅い水域の砂泥地に生息するミミズ、ゴカイ類、甲殻類、昆虫、小貝、などの底生動物や草の種子などを食べる。猛禽類などに捕食される。

## 興味深い話

■非繁殖期には群れで生活し、渡りの時には数千羽の大群になることもある。

採餌環境として干潟などの砂泥地が必要。



撮影：千嶋淳

トウネン幼鳥。成鳥の冬羽はこれと似た色合い

## 配慮事項

採餌環境として干潟などの砂泥地が必要。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				■				■				
ユーラシア高緯度(繁殖期)				■			■					
東南アジア他(越冬期)	■										■	

繁殖の詳細は不明

## 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管

理学研究室 2000

「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

# トビ

*Milvus migrans*

タカ科・留鳥



トビ

## 名前の由来

トビが空高く飛ぶことから「飛び」という名が付いたという。トンビともいう。漢字名：鳶

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 特定種

該当無し

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オス58.5cm、メス68.5cm。翼を開いたときの端から端の長さ157～162cm。

トビは日本でみられるタカ科の中で唯一尾の形が凹型（広げると三味線のバチ形）。全身褐色で翼の下面翼角（翼前縁の前に突き出たところ）付近に白い斑がある。

声：木の枝や屋根の上などにとまり「ピーーヒョロロ」と鳴き、上昇気流に乗って上空を舞っているときにも良くなく。タカ類の中で最もよく鳴く鳥で、四季を通じて鳴くが、春頃に一番よく鳴くという。

飛び方：両方の翼を水平に保って上昇気流を捕まえ、上空を円を描くように舞い、時々ゆっくりした羽ばたきを交えて軽々と飛ぶ。

翼や開いた尾羽の角度を細かく変えながら、漂うように飛んでいることが多い。

類似種と見分け方：他のタカ類、特にチュウヒのメスやノスリ。

トビの尾の形は凹型（広げると三味線のバチ形）であるのに対して、オオワシのくさび形の尾や、ノスリ等の扇型の尾の様に他の猛禽類の尾は凸型なので他の種と間違える事は少ない。

ノスリは下面が白く、翼角（翼前縁の前に突き出たところ）

に褐色のパッチ状の斑がある。

チュウヒのメスは全身茶褐色だが、下面の翼角に白いパッチ状斑は無い。



トビ。尾羽が凹状になっている（左）  
飛んでいるときには尾羽は開いて三味線のバチ状になり、開いた翼の下面に白いパッチもようがある（円内）

## 生息環境・分布

低地～山地の河川、湖沼、農耕地、海岸など。山地の樹林には少ない。

分布：ユーラシア大陸の亜寒帯以南、アフリカの一部、オーストラリアなどに広く繁殖地を持つ。

日本では、九州以北に留鳥として分布。寒地のものは冬に暖地へ移動する。

北海道では、全域に留鳥（一部夏鳥）として、平地～山地の河川、湖沼、農耕地、海岸などに生息する。

十勝では留鳥（一部夏鳥）として平地～山地の河川、湖沼、農耕地、海岸などに生息する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
					繁殖							

## 食性・他生物との関わり

主に獣や魚などの屍肉食だが、小動物、鳥のヒナなどを襲う事もある。生きた魚やネズミ、ヘビ、カエルといった生きた小動物もかなり捕るようだ。

地上や水面に餌を見つけると、急降下して足でさらうよう

に捕る。

ゴミ捨て場や漁港などには大群でいる。

他の生物に捕食されることはあまりない。

## 繁殖生態

繁殖期は2～9月(北海道では3月から)、一夫一妻で繁殖する。つがいはなわばりを持つが、なわばりの大きさは様々であるという。(→興味深い話の項参照)

巣は樹上に作られることが多く、巣作りはオスメス共同で行われる。枯れ枝を積み重ねて皿形の巣を作る。(→興味深い話の項参照)

3月下旬～4月ごろに産卵し、産卵数は普通2～3個。卵

は主にメスが抱き、オスはそのメスに給餌をするという。約30日でヒナがかえり、ふ化したのヒナは幼綿羽に覆われ、メスによって抱かれる。オスメス共同で給餌するが、ヒナの餌もメスの餌もほとんどオスが捕るともいう。

40～50日で巣立つが、遅れてふ化したヒナが83日後に巣立った例もあるという。

巣立ち後もしばらくは親が給餌をするという。

## 興味深い話

■猛禽類の中では日本で最も数が多く、一般的な猛禽類であるが、他の猛禽類と異なり主に死肉を食べる。ゴミ処理場や漁港など、餌となるものが多い場所では集団でいることも多い。

■標識調査では5年11ヶ月生存の記録がある。

■尾と翼が長い大型のタカだが、体重は軽いという。

■なわばりの大きさは様々で、集団的に営巣しているところでは巣間距離が50～180m、ヨーロッパでは直径約600mのなわばりを持つものもいるといい、十勝地方での最短巣間距離は平均約2kmであるという。

■木の枝を組み合わせて皿形の巣をかけるが、巣の材料に軍手やボロ布などを使用している事も多い。条件の良い場所では多数の巣が集中する場合もある。

■普通は樹上に巣を作るが、まれに高圧線鉄塔のような人工物に営巣した例があるという。

■遅れて生まれたヒナは先にふ化したヒナに攻撃され、や

が給餌時にもあまり鳴かなくなってしまう。そして先に生まれたヒナが満腹して餌に興味を示さなくなると、突然激しく餌を求めるといふ。

■このため後に生まれたヒナは餌が少ないときには餓死したり、場合によっては食べられたりもする。これはタカの仲間一般にある。ただしトビの場合は死肉を餌にするので、すべてのヒナが巣立つことが多いという。

■繁殖期以外には集団でねぐらをとる。

■十勝地方のアイヌ語では「ヤトッタ」という。



トビの幼鳥。  
調査のために一時的に  
捕獲されたもの

ので、ある程度太い木があることが必要。

## 配慮事項

低地から山地までの広い範囲に生息し、段丘林や河畔林などの高木にも営巣している。直径数十cmになる大きな巣な

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)

「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000

「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「図鑑 日本のワシタカ類」森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男、文一総合出版 1995

「日本動物大百科 第3巻 鳥類I」日高敏隆監修、平凡社 1996

「鳥類標識調査報告書」(財)山階鳥類研究所 1994

「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996

「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ 編著、主婦と生活社 1997

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995

「様似アイヌ言語文化研究所」

<http://city.hokkai.or.jp/~ayaedu/samawo/samawoin.html>

「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978

「山川弘氏からの聞き取り記録」内田祐一 (未発表)

羽田健三・小泉光弘 (1965a) トビの生活史に関する研究. I 繁殖期. 日生態会誌, 15: 199-208.

羽田健三・小泉光弘 (1965b) トビの生活史に関する研究. I 繁殖期(承前). 日生態会誌, 15: 221-228.

岩見恭子・池田翔・山崎里実 (1998) 高圧線鉄塔でのトビの営巣例. Strix, 16: 160-162.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類

# ノゴマ

*Luscinia calliope*

ツグミ科・夏鳥



ノゴマ (オス)

## 名前の由来

喉が赤いことから「喉紅(のご)」と呼ばれていたが、これが後に、コマドリと似ていることから野原のコマドリ→ノゴマになったという説がある。漢字名：野駒

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種) 花

(外来種) 花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(葦原・樹林) フシタカ類

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)15.5cm、両翼を開いたときの長さ23cm。スズメより少し大きい。

体の大部分はオリーブ褐色で、下面は淡い。目の上に白い眉斑(眉のようなもの)があり、くちばしの脇からも白い線がほおにかけてある

オスののどは赤く目立つ。メスののどは白(赤みのあるものもある)。

声：繁殖期には草の上や低木の梢などにとまって「チーチョチチョチ、チョロロ、チリリ」というようによく通る高い声でさえざり続ける。

地鳴き(さえざりではない普通の鳴き方)は「ヒッヒッヒッ」と高い声であったり、「クワッ、クワッ」と低い声であったりするという。

歩き方：地上で餌をとるときにはホップするように、はねているという。

類似種と区別点：シマゴマ。

シマゴマは小さく、白い眉斑がない。



さえざるノゴマのオス



さえざるノゴマ(オス)の正面。のどの赤もふくらまず

## 生息環境・分布

灌木が多い草原状の場所に住む。ハイマツ帯にも多いが、森林には少ない。十勝では夏鳥。

分布：ユーラシア大陸中・高緯度地方の東半分に分布し、冬は東南アジアに渡って過ごす。

日本では北海道だけで繁殖する。本州以南では渡り期に各地で見られる。

北海道には夏鳥として5月上～中旬に渡来し、低地から高

山まで幅広く生息、繁殖する。

十勝には、5月上～中旬に渡来する。平野部の農耕地や河川敷と高山のハイマツ帯に生息し、繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期					■							
東南アジア(越冬期)	■											■

## 食性・他生物との関わり

昆虫やミミズなど。

地上の開けたところを軽くはねながら餌に飛びついてとらえる。しばしば藪の縁の裸地や路上にでてホップしているという。

ヒナに与える餌は主として昆虫であるが、ミミズなど地上で捕らえるものも多いという。

秋の渡りの際には小さな果実も食べるという。

捕食者は猛禽類など。



ノゴマ。  
餌は地上で捕るとい  
うが、よく見られる  
のは低木の梢など

## 繁殖生態

繁殖期は6～8月、一夫一妻で繁殖する。

渡来してすぐにオスは盛んにさえずり、繁殖期はなわばり性が強い。(→興味深い話の項参照)

地上の、草株や藪の根元のわき、谷地坊主の脇、崖地などのくぼみを利用して、ドームのある球形の巣を作る。外装は枯れ草や細い草の根などを使う。お椀型の上にルーズな枯れ草のドームがあり、内装は細い草の茎や根で作られるという。

巣作りはおそらくメスのみで作るのではないかといわれるが、十分な観察例はないという。

3～5個産卵し、メスのみが卵を抱くらしいが十分な観察例がなく、オスがどうしているかについての報告もないという。

13～14日でヒナがかえり、オスメス共同で養う。巣立ちまでの日数は不明である。

## 興味深い話

■ 標識調査で、6年9ヶ月の生存が確認されている。

■ 海辺の草地などから中央高地のハイマツ帯でも姿が見られる。これは生息条件として、標高や気候以上に環境の様子(低木がまばらに生えた草原)が重要になっている例である。

■ オスはのどが鮮やかな赤なので、「日の丸」と呼ぶ人や、バラの花びらを加えたようだと形容する人もいる。

■ オスはさえずる際に、赤色ののどを大きくふくらませてさえずる。背筋を伸ばして尾を斜め上に立てたりもする。

■ さえずる場所としては灌木の上や草の上などがあるが、電線の上にとまってもさえずる。

■ 夜9時や10時になってもさえずり続けていることがよくある。

■ 春の渡りの途中でもしばしばさえずって来るという。

■ 渡りの時期には本州以南の各地を通過し、川原、海辺の草地、平地や低山の藪などで見られたり、窓ガラスにぶつかったものが見つけられたりするという。単独かあるいは小さな群で見られるという。



ノゴマのさえずり場所。  
上からフキの上、  
電線の上、  
電柱の上

## 配慮事項

木、藪がないと繁殖できない。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)

「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997

「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987

魚  
類

底生  
動物

両生  
類

トン  
ボ

チヨ  
ウ

樹  
木

(在  
来種)  
草  
花

(外  
来種)  
草  
花

哺  
乳  
類

(鳥  
水  
辺)  
類

(葎  
原  
樹  
林  
カ)  
鳥  
類

# ノスリ

*Buteo buteo*

タカ科・留鳥

## 名前の由来

古くは「のせ」と呼ばれていたようで、これを元に、ノスリが野の上を低く滑空することから「野擦り」と変わった、という説がある。漢字名：鵟



ノスリ

## 特定種

該当無し

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）54cm、翼を開いたときの端から端の長さ122～137cm。トビより少しだけ小さく、ずんぐりした体型をしている。黒目がちでかわいい。

背面は褐色で淡い色で羽が縁取られている。頭部は淡褐色でヒゲ状の褐色もようがある。胸から腹は黄白色で、黒っぽい縦スジもようがあるが、個体によって差がある。

尾は褐色で不明瞭な暗色帯がある。翼の下面は淡い褐色で、翼端の黒色と翼角の褐色のパッチ状の斑が目立つ。

声：割合よく鳴く鳥である。繁殖期には巢の上やその付近で「ピーヨ」とか「ピョー」などと優しい声で鳴く。飛んでいるときには「ピョー」というような少し調子を変えた声で鳴くこともあるという。

飛び方：羽ばたきはトビより速く、しなやかさが無い。翼を伸ばし円を描くように舞いながら獲物を探し、羽ばたきながら空中で停止してねらいを定め、急降下して捕らえるという。

円を描いて飛ぶとき、両翼は浅いV字形。

類似種と見分け方：ケアシノスリ、チュウヒ、トビ。

冬期に少数が渡来するケアシノスリは白と黒のコントラストが強く、尾の基部は白く先端は黒い。

チュウヒは翼や尾が長く、ヨシなどの上を低く飛ぶ事が多い。チュウヒの帆翔(翼を伸ばし円を描くように舞うこと)

は翼がV字型で、ノスリより深い。特にチュウヒのメスは全身褐色であるが、ノスリでは下面が白っぽい。

トビは全身茶褐色で下面翼角には白いパッチ状の斑があるが、ノスリは下面が白く翼角に褐色のパッチ状斑がある。



ノスリ。白っぽい胸から腹、黒っぽい目、ヤッコヒゲのような顔のもよう。円内は後ろ姿



トビ。尾が凹型

## 生息環境・分布

亜高山から平地の林で繁殖し、周辺の荒れ地、原野、農耕地、河原などで狩りをする。北海道では平野部の農耕地や放牧地周辺のカシワ林、カラマツ林などでも繁殖する。

分布：ユーラシア大陸の温帯から亜寒帯に広く繁殖する。日本では、北海道から四国で繁殖し、秋・冬には全国に分

散する。四国以南で冬鳥、四国以北では留鳥となる。北海道では留鳥で、全域の平野部から山地の森林に生息する。

十勝では留鳥で、全域の平地～亜高山帯に生息。秋から冬には平地でも多く見られる。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
						繁殖						

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 食性・他生物との関わり

主にネズミなどの小哺乳類の他、カエル、ヘビ、昆虫、鳥など。

木の上にとまって待ったり、翼を広げて円を描くように舞いながら獲物を探す。羽ばたきながら空中に停止してねら

いを定め、急降下して獲物を襲い、鋭い爪で窒息死させる。捕食者であり、食物連鎖の頂点にたつ種のひとつ。成長してしまえば他の生物に襲われることはあまりない。

## 繁殖生態

繁殖期は5～9月、一夫一妻で繁殖する。つがいはなわばりを持つ。1月末ないし2月末からなわばり上空でディスプレイ（誇示のための行動・動作）が見られるという。（→興味深い話の項参照）

3月下旬から巣作りと交尾が始まる。巣は、林内の高木の枝の又に、枯枝を積み重ねて皿形に、オスメス共同で作ら

れる。産座には緑の葉のついた小枝が敷いてあるという。

5～6月（4月上旬から下旬という記述もある）に2～3卵を産む。メスのみ、またはオスメス共同で卵を抱き、約33～35日でヒナがかえる。

ヒナは6週間で飛べる様になり、2ヶ月後に独立するという。それまで親はオスメスともに給餌する。

## 興味深い話

■開けた農耕地や原野などで狩りをするので、比較的目にする事の多いタカ。特に冬期などは山間部から平地に下りてきているものも多く、見る機会も増える。

■ノスリのディスプレイ（誇示のための行動・動作）の飛び方としては、①単独またはつがいで営巣地上空で輪を描くように翼を広げて舞うもの、②上空にいる側（多くはオス）がもう一方を攻撃するまねをするもの（まれに両者が爪を絡ませ回転しながら落下）、③風上に向かい少し羽ばたいた後滑空して急上昇、体が垂直になり失速したところで急降下、翼を広げて再び急上昇、を繰り返すというもの、があるという。

■小笠原諸島産亜種であるオガサワラノスリは文化財保護法によって国の天然記念物、環境省レッドリスト(2007)絶滅危惧I B類(EN)として、またオガサワラノスリと別亜種のダイトウノスリは種の保存法によって国内希少野生動物種、環境省レッドリスト(2007)絶滅危惧I A類(CR)として指定されている。（亜種とは、同じ種が地理的に隔離されることによって独自の分化をとげ、形態的に変化が確認できるもの）



ノスリ



停空飛翔するノスリ

## 配慮事項

巣をかける事のできる高木のある樹林と、その周辺が開けた環境である事が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「図鑑 日本のワシタカ類」森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男、文一総合出版 1995  
「日本動物大百科 第3巻 鳥類I」日高敏隆監修、平凡社 1996

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995

「鳥のおもしろ私生活」ビッキオ 編著、主婦と生活社 1997

「Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa—The Birds of the Western Palearctic Vol. II」Cramp, S. & K. E. L. Simmons (eds.), Oxford Univ. Press 1980

真木広造 (1990) 原野に狩る—ノスリの四季. アニマ、212 : 74-83.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# ノビタキ

*Saxicola torquata*

ツグミ科・夏鳥

## 名前の由来

野のヒタキの意。「ヒタキ」はヒタキの仲間のジョウビタキの地鳴きが「ヒッヒッ、カッカッ」と火打石をたたく音に似ているので「火焼き(ヒタキ)」になったといわれる。多くのヒタキ類は「カッカッ」という声を出す。漢字名：野鶺鴒



ノビタキ (オス)

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)13cm、両翼を開いたときの長さ21cm。スズメより小さい。

オス(夏羽)は頭から顔、のど、背、翼、尾にかけて黒い。胸から腹にかけて白く、胸のオレンジ色が映える。

腰も白く、低空を飛ぶとき黒と白のコントラストが目立つ。メスの上面は黄褐色に黒い縦線、と地味。下面は淡く黄色いオレンジ色。

声：繁殖期には草の上、低木などにとまって「ヒーチョロリ、チーロー」「チチョーチィ、チュウチューイ」などと澄んだ声でさえずる。

地鳴き(さえずりではない普通の鳴き方)では「ヒッ、ヒッ」「ジャッ、ジャッ」といった声で鳴く。

飛び方：草丈程度の低いところを飛ぶことが多い。



ノビタキのオス。黒白の体、胸にオレンジ色



ノビタキのメス



ノビタキの幼鳥

## 生息環境・分布

海岸から高山帯までの広い範囲の草原にすむ。北海道では平地の草原に多い。十勝では夏鳥。

分布：ユーラシア大陸の中・低緯度地方とアフリカ大陸に分布。ユーラシアのものは冬はアフリカ大陸東部、アラビア半島、インド、東南アジアなどに渡る。

日本では本州中部以北で夏鳥、西南日本では渡り鳥として

通過する。

北海道には夏鳥として4月上旬に渡来し、草原や農耕地に普通に生息し、繁殖する。

十勝には、4月中旬に渡来。河川敷や農耕地周辺などに普通に生息し、繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				繁殖								
東南アジアなど(越冬期)	越冬										越冬	

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) フシタカ



## 食性・他生物との関わり

空中や地上の昆虫を捕える。

草原の中で突出している灌木の枝やススキの枯茎の上など、目立つところにとまり、そこから飛んでいる虫や地上の虫

に飛びついて捕らえる。虫から少し離れた位置から空間を隔てて一気に近寄り、不意打ちのような形で捕らえる。捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は5～8月、一夫一妻で繁殖する。

オスは渡来した頃に、灌木の上や空中に飛び上がってさえずり、なわばり性が強い。メスに対し求愛ディスプレイ（誇示のための行動・動作）を行ってつがいとなる。（→興味深い話の項参照）

地上の草むらの中の草の根元や石の下、岩陰など隠されたところに巣を作る。たいていは土くれ、石、草などのひさしがあるという。巣はお椀型で、外装は草の茎や枯れ葉、根などで作られ、内装は細い茎や根、植物の綿毛、獣毛、羽毛などで作られるという。巣作りはメスのみが行い、オスはそのメスについて回って「メイトガード」を行うのだという。

3～7個産卵し、メスのみが卵を抱く。約14日でヒナは孵化し、両親の給餌を12～14日間受けて巣立つ。

ふ化後1週間ほどメスのみがヒナを抱くという。



巣立ちヒナに空中給餌するノビタキのオス

## 興味深い話

■草原の中で突出している灌木の枝などにとまり、そこから飛んでいる虫や地上の虫に飛びついて捕らえる。電線や牧柵などにとまっているのを見ることも多い。

■草原では最も目立つ鳥である。

■なわばりの面積は、10,000～26,000㎡程だという。

■さえずり地域はなわばりの中にあり、なわばりの境界には中立地帯があるという。中立地帯ではオス同士が背を向けあって1～10mの間隔でとまり、尾羽を開閉したり、上下にゆすったりする脅しのディスプレイ（誇示のための行動・動作）を行うという。

■オスの求愛ディスプレイはメスの前の地上で行われる。空中にはね上がっては降りる、ということを繰り返し、翼を半開きにして白斑を見せながら飛び上がった頂点で逆立ちをするのだという。

■巣作りはまだあまり草が茂っていない早い季節におこな

われ、同じ草原性のホオジロ類より繁殖を早く始めるという。

■オスの体色は冬から夏にかけて、褐色から黒く変化するが、これは羽毛が抜け代わるのではなく、羽毛の先端の褐色部分がすり減るためである。

■比較的低いところを飛ぶためか、農耕地を通る道では車にはねられることが多いようだ。

■渡りの時期には単独か小さな群で現れるという。



電線にもよくとまっているノビタキ（メス）

## 配慮事項

草丈のある草原が大事。繁殖期に草刈されてしまうと繁殖できない。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995  
「野鳥の生活」羽田健三 監修、築地書館 1975

中村登流 (1963) 繁殖期における山地草原性鳥類の群集構造について. 山階鳥研報, 3 : 334-357.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# ハイタカ

*Accipiter nisus*

タカ科・夏鳥（一部留鳥）

## 名前の由来

ハイタカは「はしたか」が転じたもので、疾い鷹、嘴の鋭い鷹、波斯（はし：ペルシャの意）の鷹などの説がある。タカは高く飛ぶからという説、猛き（たけき）鳥という意味からという説などがある。

漢字名：鷯（よう、はしたか）、灰鷹



ハイタカ

## 特定種

国レッドリスト（2007）：準絶滅危惧（NT）

北海道レッドデータ：絶滅危急種（Vu）

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オス31.5cm、メス39cm。両翼を開いたときの差し渡し長さ62～76cm。オオタカに似ている。

オスはハトくらいの大きさ。成鳥の背面は暗青灰色。白い眉斑（眉のようなもの）があるがオオタカほど顕著ではない。下面は白く、オレンジ褐色の細い横じまもようが一面にある。

メスはオスよりひとまわり大きく、上面は灰褐色、下面は白色の地に褐色の横じまもよう。

幼鳥は背面が褐色、のどには褐色の縦じまもようがある。

**飛び方**：翼が幅広で短く、急減速・急旋回を自在にこなし、林内でも獲物を追って機敏に飛び回ることができる。

開けた空間では羽ばたきと滑空を繰り返して直線的に飛ぶ。翼を広げて、輪を描くように高い空を飛ぶこともある。

**類似種と区別点**：オオタカ、ツミ。

オオタカに似ているが、オオタカがカラス位の大きさであるのに対して、ハイタカはハト位。オオタカは大きいぶんだけ羽ばたきは遅い。

ツミは更に小型で背面の色が濃く、眉斑（眉のようなもの）はとても不明瞭。遠くからの識別は難しい。



撮影：飯嶋良朗

ハイタカ。胸や腹の横スジもようが褐色なのがメス



類似種オオタカ。背中が黒っぽく、目の上がくっきり白い。

## 生息環境・分布

平地から山地の原生林やカラマツ林などに生息で繁殖し、付近の開けた環境で狩りをする。

**分布**：ユーラシア大陸の温帯・亜寒帯で繁殖。亜寒帯のものは南下して越冬する。

日本では本州以北で繁殖し、留鳥。一部は冬季に暖地へ移

動する。

北海道では夏鳥で一部が留鳥。山地や平野部の森林に生息する。

十勝では夏鳥で一部が留鳥。平地～亜高山帯の樹林

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
本州以南 (越冬期・通年)	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
繁殖					■	■	■	■	■	■	■	■
一部越冬											■	■

## 食性・他生物との関わり

主にツグミくらいの大さきまでの小～中型の鳥類を捕食する。ネズミ類、リスなども捕食する。

オオタカなどと同様に空中か地上で獲物を背後からあるいは側面から襲う。林内でも獲物を追って、急減速・急旋回

など敏捷に飛び回る。(→興味深い話の項参照)

捕食者であり、食物連鎖の頂点にたつ種のひとつ。成長してしまえば他の生物に襲われることはあまりない。

## 繁殖生態

本州の記録では産卵期は5月(北海道では5月末か)、一夫一妻で繁殖する。つがいは毎年新たに形成されるが、繁殖地近くで越冬したオスメスは続けてつがいになることが多いという。

つがいにならばりを作る。ヨーロッパの例では先にメスが営巣地に着きなわばりを作り、2週間ほどしてから巣作りを始めるという。求愛時には波形の飛行曲線を描いて飛ぶという。(→興味深い話の項参照)

巣はオスメス共同で、平地から山地の森林やカラマツ林な

どで、樹冠に近い部分に枝の又に、木の枝を主材にして皿形の巣を作るという。

4～5個の卵を産み、メスが卵を抱く。オスはメスが出かけている間、しばしば巣を訪れ、転卵をしたり巣材を整えたりするという。

32～34日でヒナがかえる。ヒナへの給餌はメスだけが行き、巣の外でオスからメスへ餌を受け渡すという。24～30日でヒナは巣立つ。

## 興味深い話

■「ハイタカ(はしたか)」は本来メスに当てた名で、オスは「コノリ(兄鷲)」といったのだという。

■標識調査では生存年数が5年10ヶ月の記録がある。

■千葉で3月に一時捕獲され標識(番号や記号を打った足輪など)をつけられたハイタカが、同じ年の5月に稚内で死体で発見された例がある。

■ハイタカとツミの足は、前向き3本の足指のうち、内側の足指が異常に長く、指だこが発達していて、獲物を捕まえやすくなっているという。

■一般的にワシやタカの仲間ではメスがオスより大きい、ハイタカやオオタカで特にはっきりしている。これは狩りの難しい鳥を餌としていることと関係があるらしい。

■メスの体重はオスの2倍あり、メスの方が大きめの鳥を餌にするという。

■メスの方がオスより大きく、ヒナであっても最後はオス親より大きくなる。このためメスヒナに餌を与えるときオス親はビクビクしているように見えるという。

■冬には、餌台に集まる小鳥を狙って、住宅地にも時々飛来する。



ハイタカ。冬、帯広市街地街路樹に飛来したもの

## 配慮事項

平野部の丘陵やカラマツ林などで繁殖をしていることもある。むやみに近づくと、繁殖に悪影響を与える可能性がある。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ボックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、借成社 1995  
「鳥類標識調査報告書」(財)山階鳥類研究所、1996  
「動物名の由来」中村浩、東京書籍 1981  
「平成7年度 鳥類観測ステーション報告」環境庁 1996  
「北海道のクマタカとオオタカ」藤巻裕蔵 編集、北海道猛禽類研究会、1999

「図鑑 日本のワシタカ類」森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男、文一総合出版 1995

「日本動物大百科 第3巻 鳥類I」日高敏隆監修、平凡社 1996

「鳥のおもしろ私生活」ピッキオ 編著、主婦と生活社 1997

「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978

「Eagles, Hawks & Falcons of the World」L.H. Brown & D. Amadon, Country Life Books 1968 (Revised edition, The Wellfleet Press 1989)

「The Sparrowhawk」I. Newton, T. & A.D. Poyser 1986

「Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa—The Birds of the Western Palearctic Vol. II」S. Cramp & K.E.L. Simmons (eds.), Oxford Univ. Press 1980

東條一史 (1992) ハイタカの営巣行動と採食習性. 日本鳥学会 1992年度大会講演要旨集: 43.

東條一史 (1993) わかってきた日本の生態—富士山麓・ハイタカ 観察記録. アニマ、246: 58-60.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原) 鳥類  
ワシ・タカ  
樹林

# ハクセキレイ

*Motacilla alba*

セキレイ科・夏鳥(一部留鳥)



ハクセキレイ (オス)

## 名前の由来

顔が白いセキレイという意味である。セキレイは鶴鴿と書き、背は背筋、令は冷たく澄んでいること。背筋が清冷な鳥という意味である。漢字名：白鶴鴿

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)21cm。顔の白い、白黒のセキレイ。

オスの夏羽では頭上から腰、尾は黒く、尾の外側の羽は白い。翼は大部分白く、一番外側の初列風切など一部が黒い。額から顔は白くてくちばしから目を通る黒い線がある。またのどから胸は黒い。

メスの夏羽では頭上は黒く背は灰色に黒い羽毛が混じる。のどは白く、胸に三角の黒い模様がある。

オスの冬羽では背が灰色に、のどは白くなって胸に三角の黒い模様ができる。

メスの冬羽では頭上から背まで灰色となり、胸の黒斑は小さくなる。

声：地鳴き(さえざりでない普段の声)は「チチチッ、チチチッ」と、飛びながら細い声で鳴く。繁殖期には「チュチュイ、チュウ、チュウ」「チュチュン、チュチュン」と少し太めの声でさえざる。時には「ジュイ」というような少し濁った声も混じる。

飛び方や歩き方：飛ぶときには、羽ばたきと翼を閉じての滑空とを繰り返す、波のような飛行曲線を描く。

両足を交互に出して素早く歩き、とまると後半身(尾)を

絶えず上下に振る。

類似種と見分け方：セグロセキレイ。

セグロセキレイは顔が黒くて眉と喉が白く、声はジージーと濁っている。



ハクセキレイ(オス・夏羽)。顔は白く黒い線がある



セグロセキレイ。顔は黒く白い線がある

## 生息環境・分布

低地の海岸地方、河川、湖沼などの水辺を中心にその周辺の水田、集落、市街地などにすむ。十勝では夏、河川敷などの開けた場所に普通に見られる。住宅地でも見られる。

分布：ユーラシア大陸に広く分布する。冬はアフリカ大陸、インド、東南アジアに渡って過ごすものがある。

日本では、北海道、本州で繁殖するが、本州中部以南で越

冬し、全体としては冬の方が多。

北海道(十勝でも)では夏鳥。一部留鳥で繁殖する。3月中旬に渡来し、河川中・下流沿い、平野部の住宅地、農耕地から山地のダムなど開けた環境に生息する。冬にも少数が残留する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
本州以南(越冬期)	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

## 食性・他生物との関わり

主としてカゲロウ類などの水辺の昆虫類を食べる。水辺の地上などを歩いて餌をついばむ。飛んでいる虫を河原の石上から飛びついて空中で捕らえるフライングキャッチをしばしば行う。繁殖期には大きな川の流心を左右に往

復して飛び続けながら多くの種類のカゲロウ類を捕らえるという。猛禽類などに捕食される。

## 繁殖生態

繁殖期は5月～7月、一夫一妻で繁殖する。繁殖期にはなわばりを作る。脅しのディスプレイ（他の個体に対する誇示のための行動や動作）や追いかけでなわばりを守るが、あまり激しくはないという。（→興味深い話の項参照）地上のくぼみや石の間などに営巣するが、建造物の軒下や換気扇などにも営巣する。巣の外装は枯草の茎・葉・根などでお椀型に作り、内装は細い根・羽毛などで作るという。

オスとメスで巣作りの場所を探し歩き、最初にオスが巣材を置き、メスはそれに従い、巣作りはオスメス共同で行うがメスの方がたくさん働く。4～5個の卵を産む。オスメス交代で卵を抱くが、夜間はメスのみが抱く。12～13日でヒナがふ化し、ヒナは14～15日で巣立つ。

## 興味深い話

- セグロセキレイよりも砂泥地の水辺や人工的なコンクリート護岸を好むという。
- ハクセキレイのなわばりはセグロセキレイのなわばりと重なり、頻繁に出会って対立する。たいていハクセキレイはセグロセキレイに追い払われるのだという。
- 脅しのディスプレイ（他の個体に対する誇示のための行動や動作）として、上を向いて尾羽をあげてさえずったり、ジャンプしたりする。
- 1950年代には北海道、青森県、岩手県でしか繁殖していなかったが、1980年代には兵庫県、広島県でも繁殖が確認されるようになった。このように繁殖分布を南に広げてきた種である。
- 非繁殖期には夜間、橋桁や街路樹などにたくさん集まって、集団峙（ねぐら）を形成するという。
- 十勝地方のアイヌ語では、セキレイ類を「オチュチリ」という。

- 日本神話ではセキレイは国産みの神に性行為を教える鳥として出ており、またアイヌ語名の「オチュチリ」も「交尾する鳥」の意だという。
- セキレイの古名の稲負鳥（いなおうせどり）は刈り取った稲穂のゆれる様子がこの鳥の尾をふるのに似ていたからである。



水辺の石の上にとまるハクセキレイ

## 配慮事項

採餌環境として昆虫類が生息する水辺が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985（1995 2版21刷）  
「原色日本野鳥生態図鑑（陸鳥編）」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982（1994増補版7刷）  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「分類アイヌ語辞典」知里真志保、日本常民文化研究所 1962

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

Nakamura, S., M. Hshimoto & O. Sootome (1984) Breeding ecology of *Motacilla alba* and *M. grandis* and their interspecific relationship. J. Yamashina Inst. Ornith., 16 : 114-135.  
Watanabe, M. & N. Maruyama (1977) Wintering ecology of White Wagtail *Motacilla alba lugens* in the middle stream of Tama river. Misc. Rep. Yamashina Inst. Ornith., 9 : 20-43.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# ハシビロガモ

*Anas clypeata*

カモ科・旅鳥



オス



メス

ハシビロガモ (撮影: 千嶋淳)

## 名前の由来

大きくて幅の広いくちばしをもつカモだからこの名がついた。「カモ」は「浮かぶ→うかむ→かむ→かも」だとする説、「雁(ガン)→かむ→かも」だとする説がある。漢字名: 嘴広鴨

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで) オス51cm、メス44cm。くちばしの大きなカモ。オスは頭部が緑色光沢のある黒、首から胸は白、脇と腹は栗茶色、くちばしは黒く、足は橙色。メスは褐色で黒褐色の斑があり、尾は白っぽい。

類似種との見分け方: シャベル状の大きなくちばしの特徴。



ハシビロガモ

シャベルのようなくちばしの特徴

## 生息環境・分布

海岸の入り江、内湾、河口、潟湖、干潟、内陸の湖沼、河川、湿地、水田に現れ、特に海岸や沿岸の水系に多い。十勝には10~12月、3~4月に旅鳥として飛来する。

分布: ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の中緯度地方に広く繁殖分布し、冬は両大陸南部とアフリカ大陸、中央アメリカに渡って過ごす。

日本には主に本州以南に冬鳥として渡来し、北海道では北部で少数が繁殖する。

北海道では旅鳥。河川や湖沼に生息する。夏にも少数見られる。

十勝にも旅鳥として主に春や秋に河川や湖沼に飛来する。

## 食性・他生物との関わり

プランクトンや小さな草の実を食べる。

## 配慮事項

プランクトンの豊富な水域が必要。

## 興味深い話

■つがいの形成はオスの2~12羽ぐらいの小グループが水面の目立つところでグルグル泳ぎ回り、首を水中に入れ、小さな円を描いたり、大きく広がったりする事を繰り返して行う。そこにメスが1~2羽入っていき、一時的にでもつがいになるとオスはメスに接近し、相互に回りながら、水

中にいたたくちばしをメスのくちばしに近づける。メスはオスのくちばしからもれる物を食べるようで、これは求愛給餌にあたる。

■十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般(特にマガモ)を「ウォロンチカプ=水の中にいる鳥」という。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期			■							■		
ユーラシア中緯度(繁殖期)				■								
本州以南(越冬期)	■									■		

## 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
 「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
 「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
 「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
 「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

# ハシブトガラ

*Parus palustris*

シジュウカラ科・留鳥



ハシブトガラ

## 名前の由来

「カラ」はシジュウカラ科などのよくさえずる小鳥の総称。「ハシブト」は、コガラよりもくちばしが太いのでついたと思われる。漢字名：嘴太雀(?)

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)12.5cm。シジュウカラより小さい。

頭がベレー帽をかぶったように黒く、光沢がある。のどもあごひげ状に黒いがネクタイ状ではない。背は灰色、胸と腹は白。

声:「チョーチョーチョー」または「ホーイチャーチャーチャー」と高い声でさえずる。地鳴き(さえずりではない普段の鳴き方)は「チチ、ジェージェー」。

類似種と見分け方:コガラ、ヒガラ、シジュウカラ。

コガラはくちばしが少し細く、頭に光沢がないが、外見での識別は非常に困難。ただし、さえずりが「ホーヒー、ホーヒー」というような柔らかな声や「ヒツツヒー、ヒツツヒー」という声であるので、鳴いていれば識別できる。また、コガラは山間部に多く平地には少ない。

ヒガラは冠羽があり、のどは蝶ネクタイ状に黒い。シジュウカラはのどから胸、腹へネクタイ状の黒線がある。



ハシブトガラ(左)とコガラ(右)。どちらも胸、腹に「ネクタイ」がなく、黒い「ベレー帽」と「あごひげ」が特徴で、外見からはほとんど区別できない。



ハシブトガラの背中



シジュウカラの背中  
上の方が黄緑色



シジュウカラ。のどから胸、腹へ黒い「ネクタイ」がある



ヒガラ。ネクタイはないが、のどは黒は大きい。首後が白い

## 生息環境・分布

低地や低山帯の樹林帯。落葉広葉樹林や針広混交林でよく見られ、湿地や川辺の林など、藪が多いところを好む。

分布:ユーラシア大陸中緯度地方の西と東にそれぞれ分布。

日本では北海道だけにいる。

北海道・十勝地方では留鳥。平野から山地に生息する。森林の主要種である。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
					繁殖							

## 食性・他生物との関わり

主として木の幹や枝にいる昆虫やクモ類を食べる。また植物の種子や小さな果実も食べる。

樹木の中・下層の枝を伝わりながら餌をとる。ミズナラの芽の鱗片をはいで虫を探したり、ガの仲間の幼虫を片足で押さえてくちばしで引きちぎったりする。秋に草の種子などを貯蔵する習性がある。

貯えた種子をシジュウカラに奪われることがある。

天敵は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は4～6月、一夫一妻で繁殖する。

繁殖期にはなわばり性が強い。(→興味深い話の項参照)

樹木の幹や大枝に自然にあいた穴やキツツキの古巣穴といった樹洞の中に巣を作る。巣作りはメスのみが行い、コケ類を詰め物にして産座に羽毛や獣の毛を利用するという。

7～8個産卵し、メスのみが卵を抱く。

約13日でヒナがかえり、オスメス共同で育て、16～17日くらいでヒナは巣立つ。



樹洞の巣に餌を運んできたハシブトガラ

## 興味深い話

■標識調査で、5年11ヶ月の生存が確認されている。

■なわばり争いでは、オス同士が独特の発声をしながら枝取りを行ったり、平行して波状に飛んだり、実際の闘争などを行ったりするという。

■樹洞やキツツキの古巣穴の中に巣を作るが、巣箱を利用することもある。

■夏の終わりから秋にかけて、樹皮の割れ目などに草の種子などを大量に貯える習性がある。

■冬は餌台に来て脂身やヒマワリの種を好んで食べる。

■つがいのオスメスは一年中一緒にいる。

■秋から冬には群を作る。シジュウカラ、エナガ、キツツキのコゲラなどと混群を作ること多い。

■十勝では比較的普通に見られる鳥だが、日本では北海道にしかいない。



ハシブトガラ

## 配慮事項

樹洞のできる木のある落葉広葉樹林などが大事。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)

「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997

「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部 1987

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ



# ハヤブサ

*Falco peregrinus*

ハヤブサ科・留鳥

## 名前の由来

速く飛ぶことから「速飛翼（はやとびつばさ）」→「速翼（はやつばさ）」→はやぶさ となった。

漢字名：隼



撮影：浦幌野鳥倶楽部

ハヤブサ

## 特定種

種の保存法：国内希少動植物種

国レッドリスト（2007）：絶滅危惧Ⅱ類（VU）

北海道レッドデータ：絶滅危急種（Vu）

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オス38cm、メス51cm。翼を開いたときの端から端の長さ84~120cm。カラスより少し小さい。

頭部から背面にかけて青灰色で、下面は白く腹は黄褐色を帯び、胸から腹には細かく黒い横スジもようがある。頬ひげ状のパッチが太く目立つ。

飛んでいる時、翼の端がとがって見える。

足は鮮やかに黄色い。

声：繁殖期以外はほとんど鳴かない。繁殖地では、オスが「キッキキキ」と鋭く鳴き、メスが「ガッガッガッ」あるいは「ゲゲゲゲ」と少し濁った太い声で鳴く。警戒時にはオスメスともに激しく鳴き立てるといふ。

飛び方：浅く速い羽ばたきと短い滑空を交互にして速く飛ぶ。上昇気流に乗って輪を描くように飛ぶこともある。

飛んでいる鳥を上から急降下して捕らえる。

類似種と見分け方：チゴハヤブサ。

チゴハヤブサはハトくらいの大きさで、成鳥の胸から腹は縦スジもよう、下腹部が赤茶色。



ハヤブサ。腹のもようは横スジ、頭から顔の黒い部分が広い



チゴハヤブサ。腹のもようは縦スジ、頭の黒い部分に白い部分がくい込む。下腹は赤茶色



撮影：叶内拓哉

ハヤブサの飛んでいる形。ハヤブサの仲間は翼の先がとがっている

## 生息環境・分布

海岸や海岸に近い山の断崖や急斜面、広大な水面のある地域や広い草原、原野など。

分布：南極圏と太平洋上の島の大部分を除き世界的に分布している。寒帯のものは熱帯に渡って越冬する。

日本では、北海道から九州北西部の島々にまで広く分布し、

特に東北地方と北海道の沿岸部に多いという（米川、1987）。北海道では留鳥。北海道全域に分布し、主に海岸の崖の多い地域に生息する。

十勝では留鳥として主に海岸の崖で繁殖している。内陸の崖のある場所で繁殖している例もある。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
繁殖												

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 食性・他生物との関わり

多くはヒヨドリからハトくらいの鳥類を食べ、まれにネズミやウサギなども食べる。

崖の上や見晴らしのよい木などにとまって空間を見張り、鳥が飛んでいるのを見つけると飛び立って獲物より高く位置し、翼をすぼめ急降下して足で落とすという。(→興味深い話の項参照)

捕食者であり、食物連鎖の頂点にたつ種のひとつ。成長してしまえば他の生物に襲われることはあまりない。



ハクセキレイ（左矢印）とハヤブサ（右矢印）。襲う気配のない捕食者と逃げない餌のツーショット

## 繁殖生態

一夫一妻で繁殖する。

営巣場所は崖の岩棚などで、2～3月に産卵場所に執着しはじめる。つがいになわばりを持つ。繁殖期にはオスメスで空中ディスプレイ（誇示のための行動・動作）を行う。(→興味深い話の項参照)

自分で巣は作らず、海岸や海岸近くにある断崖の岩棚のくぼみに、砂泥や草の根などを足でかき出して産卵するという。

産卵期は3月下旬～4月下旬(東北地方以北)。1巣の卵数は3～4個。主にメスが卵を抱き、30～33日でふ化するという。ヒナが小さいうちはメスが抱き続ける。

ヒナへの給餌は主としてメスが行い、オスはヒナとメスのために餌を運ぶ。ふ化後15日くらいからメスも狩りを始め、メスが巣から離れるようになるとオスも給餌や抱雛など世話をを行うという。約2ヶ月で巣立つ。

## 興味深い話

■獲物を狙って急降下するときのスピードは、最大で時速400キロにもなるという。

■獲物を捕る際には1羽だけで行う場合と、つがいのオスメス共同で行う場合がある。さらに共同狩猟の場合はつがいが1つの獲物を交互に攻撃する場合と、オスメスそれぞれが獲物の群内の別個体を攻撃する場合があるという。

■婚姻のための空中ディスプレイ（誇示のための行動・動作）には、①翼を伸ばして円を描くように高空へ舞い上がるもの(単独またはつがいで)、②その後水平に飛んでからジグザグに急降下するもの(特にオスが単独で)、③巣の前で8の字を書いて飛び、巣の予定場所に鳴いて降りるもの(オスのみ)、④後を追って急上昇している相手めがけて

急降下したり、交互に襲撃するように近くをすり抜けたり、一緒に急降下したり、追いかけてきたり、相手が近づくと仰向けになったり、というつがいによる複雑なもの、などがあるという。

■抱卵の主導権はメスにあり、メスは交代を嫌がるのが少なくないという。

■オスは抱卵中のメスに餌を運ぶが、ほとんど巣から離れた場所で受け渡され、空中での受け渡しが多い。

■近年、都市などでも越冬している例も知られる様になった。

■十勝地方のアイヌ語では「チカケコイキヤ」という。

## 配慮事項

不明。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「日本動物大百科 第3巻 鳥類I」日高敏隆監修、平凡社 1996  
「図鑑 日本のワシタカ類」森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男、文一総合出版 1995  
「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978  
「Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa—The Birds of the Western Palearctic Vol. II」S. Cramp & K. E. L. Simmons (eds.), Oxford Univ. Press 1980

米川洋 (1987) 日本ハヤブサ物語. アニマ、172 : 82-84.

米川洋・立山敬之 (1985) FALCO REPORT Ver2. 1.

池田善英・井上陽一・須藤一成・夜久保徳・安田亘之・久保上宗次郎・遠間真弓 (1990) 若狭湾における営巣ハヤブサの狩猟行動と給餌行動. Strix、9 : 15-22.

魚類

底生動物

爬虫類  
両生類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシタカ類

# ヒシクイ

*Anser fabalis*

カモ科・旅鳥



ヒシクイ

## 名前の由来

沼などに生えているヒシ(菱)の実を食べるので、この名がつけられた。漢字名：菱喰

## 特定種

文化財保護法：国指定天然記念物  
国レッドリスト(2007)：絶滅危惧Ⅱ類(VU)(亜種ヒシクイ)、  
準絶滅危惧(NT)(亜種オオヒシクイ)

北海道レッドデータ：希少種 (R)

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで)85cm。くちばしの先近くがオレンジ色の大きなガン。

体は黒褐色で足はオレンジ色。尾羽のすぐ上や下は白い。くちばしは大部分が黒く先端近くにオレンジ色があり、先端は黒い。

声：少し鼻にかかった「グッハ、グッハ」と聞こえる声でなく。マガンより少し太い声である。飛び立ったときには盛んに鳴き交わし、飛んでいるときにも鳴き交わしていることが多いという。

類似種と区別点：マガン。

マガンはヒシクイより一回り小さく、くちばしは全体がピンクまたはオレンジ色で、くちばしの基部の周囲は白い。声はマガンの方が少し細く「クッハ、クッハ」といった感じ。



撮影：浦幌野鳥倶楽部

ヒシクイ。黒っぽいくちばしの先近くに明るいオレンジ色



類似種マガン。オレンジ色のくちばしの付け根に白い部分

## 生息環境・分布

低地の湖沼、湿地、水田などに現れる。十勝では旅鳥で9～11月、3～4月に見られる。

分布：ユーラシア大陸の高緯度地方に広く繁殖分布し、冬は同大陸南部に点在して過ごす。

日本では冬鳥として本州中部以北に渡ってくる。北海道や

本州北部では旅鳥である。

北海道では旅鳥。春と秋に湖沼、河川敷、水田、草地などに飛来する。

十勝では旅鳥。十勝川の場合、春と秋に河口から豊頃町茂岩付近の湖沼、河川敷、草地などに飛来する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期			■	■					■	■		
ユーラシア高緯度(繁殖期)				■	■	■	■	■	■			
本州中部以北(越冬期)	■	■	■	■						■	■	

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原)  
鳥類  
樹林

## 食性・他生物との関わり

種名が示すように渡ってきた当初、ヒシの実を食べ、その他草の葉・茎・地下茎・根茎・種子・果実などを食べる。湿地の地上を歩きながら採食し、畑地で麦の葉をむしったりもする。また水面ではくちばしをグチャグチャと動かしてこすようにしたり、首を入れたり、上半身を逆立ちするように入れたりして水草などを食べる。

## 繁殖生態

日本では、冬鳥として主として東北地方から北陸地方の限られた池や沼で越冬し、北海道や本州北部では旅鳥である。繁殖はユーラシア大陸の高緯度地方で行われる。繁殖期は5～7月で、一夫一妻で繁殖する。巣は藪の下などの地上に、草の葉、枯れ葉、コケなどによって皿形に作られる。大部分はメスが作り、産座には自分の綿羽を敷くという。4～6個の卵を産み、メスのみが抱く。27～29日くらいでヒナがかえり、まもなく巣から離れる。ヒナの世話は両親が行い、40日くらいで飛べるようになるという。

## 興味深い話

- 隊列を組んで飛行する姿は圧巻である。
- 春、マガンも交えて十勝川下流部の牧草地に1000羽を越える数がやってくる。ある年観察していると、観察者に気がつき一斉に飛び立った。視界が覆い尽くされ、ものすごい羽音に囲まれ、羽ばたきによる風圧まで感じた。
- 繁殖地ではつがいには分散するが、非繁殖地では家族を単位として行動することが知られている。
- 日本では基本的に本州中部以北にやってくるが、まれに九州や沖縄県にも現れることがある。
- 日本に来る越冬個体数は全体で3000～6000羽だという。
- ヒシクイにはくちばしが太くて短い「ヒシクイ」とくちばしが薄くて長い「オオヒシクイ」の2つの亜種（亜種とは、同じ種が地理的に隔離されることによって独自の分化をとげ、形態的に変化が確認できるもの）があるという。ヒシクイは寒帯のツンドラ地帯で繁殖し、オオヒシクイは亜寒帯の針葉樹林帯で繁殖するという。

## 配慮事項

渡りの中継地となっている湖沼を必要とする。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)



ヒシの花や葉（左）と実（右）



刈り取り後のデントコーン畑のヒシクイ

- 十勝地方にはヒシクイとオオヒシクイ両亜種が来ているが、オオヒシクイが大部分を占めるという。
- 宮城県伊豆沼のものは大部分が亜種ヒシクイで、新潟県福島潟、滋賀県琵琶湖などに来るものは大部分がオオヒシクイであるという。



牧草地に降り立ったヒシクイの群れ（11月）

- 魚類
- 底生動物
- 両生類  
爬虫類
- トンボ
- チヨウ
- 樹木
- (在来種) 草花
- (外来種) 草花
- 哺乳類
- (水辺) 鳥類
- (草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# ヒドリガモ

*Anas penelope*

カモ科・冬鳥



ヒドリガモ（オス）

## 名前の由来

頭と首が赤栗色をしているところから、緋鳥と呼ばれ、そこからヒドリガモとなった。「カモ」は「浮かぶ→かむ→かむ→かも」だとする説、「雁（ガン）→かむ→かも」だとする説がある。漢字名：緋鳥鴨

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）49cm。中型のカモでくちばしは短く、首も短い。水上では体を高く保っている。オスの額から頭頂は黄白色で、頭部から首は茶褐色、目の後方に緑色光沢を持つ個体もいる。胸はぶどう褐色で体のほかの部分は灰色、尾の下の部分は黒い。雨覆（翼の上面中程広い部分の羽）は白くて飛翔中に目立つ。くちばしは鉛色。

メスは褐色で他の種のメスより褐色味が強く、腹部は白い。飛翔中、翼鏡（翼の上面中程の後縁にある金属光沢をした羽）は緑色で、雨覆（翼鏡前方上面の羽）は灰褐色。翼鏡との境界に白い線がある。

声：割合よくなく鳥で、オスは水面に浮かびながら「ピュウイー、ピュウイー」と口笛のような高い声で鳴く。メスは「グワー、グワー」という低くて濁った声で鳴く。

類似種と区別点：アメリカヒドリ。

アメリカヒドリのオスの額から頭頂は白く、顔（頬）は灰色で、目の後方には緑色部がある。メスは頭部がやや灰色味

が濃く、三列風切（翼の最も内側後縁の羽）外縁の白色は幅が広くて明瞭であるといわれる。



ヒドリガモのオス(右)とメス



アメリカヒドリのオス。

頭が白く、目の後は光沢のある緑色

## 生息環境・分布

河川、ダム湖、湖沼、内湾に生息する。十勝には10～4月にくる冬鳥。

分布：ユーラシア大陸の高緯度地方に広く繁殖分布し、冬は同大陸南部、アフリカ大陸西部、東部に渡って過ごす。

日本では全土に冬鳥として渡来して越冬する。

冬鳥。河川下流部や海岸に近い湖沼に生息する。渡りの時

期には内陸のダム湖などにも飛来する。

十勝では冬鳥として10月に河川や湖沼に飛来し普通に見られる。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
ユーラシア高緯度(繁殖期)												

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類

## 食性・他生物との関わり

草の葉や実を食べる。

冬は浅い湖上や川の流心部に出て、泳ぎ回りながら水面でついでむ。日中に盛んに採食する。

内陸の湿地で歩きながら草の葉を引きちぎって食べたり、実をついでむで食べたりもする。

また他の淡水カモ類に比べ海に出る傾向が強く、海面をついでむ。首を水中に突っ込んで逆立ちしたり、あるいは海辺の石の上を歩いたりして、青のりなどの藻類を好んで食べるとする。

猛禽類などに捕食される。

## 繁殖生態

日本では繁殖せず、ユーラシア大陸の高緯度地方で繁殖する。

繁殖期は4～5月で、一夫一妻で繁殖する。

冬の群れの中で、つがい作りのためのオスのグループディスプレイ（他の個体に対する誇示のための行動や動作）が見られる。（→興味深い話の項参照）

巣は水辺の草むらや藪の下に浅い皿形に作り、草の葉や茎を敷くという。作るのはメスのみで、産座に自分の綿羽を敷く。

6～12個の卵を産み、メスのみが卵を抱いて、24～25日くらいでヒナがかえる。

ヒナは体が乾くとすぐ巣を離れ、40～45日ほど親の世話を受けた後、独立するという。



ヒドリガモのつがい。北に渡ってから繁殖する

## 興味深い話

■標識調査で17年1ヶ月生存という記録がある。

■ヒドリガモは主に水面で採食するが、しばしば潜水ガモやハクチョウなど水深の深くの水草を食べる種の周りに集まって、浮き上がるものを拾ったり直接奪い取ったりもする。

■ヒドリガモの短いくちばしは草を引きちぎるのに適した形をしているといわれ、引きちぎる力も他の淡水カモ類より強いという。

■海苔の養殖に被害を与えることがあるという。

■冬に、群れの中で見られるオスのグループディスプレイ（他の個体に対する誇示のための行動や動作）では、首を縮めてくちばしを斜め上に向け「ピウッ」と叫びながら翼の先を持ち上げ、翼にある白紋を見せるのだという。このディスプレイはしばしばオス同士の脅しのディスプレイとしても使われる。

■十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般（特にマガモ）を「ウォルンチカブ＝水の中にいる鳥」という。



何かに驚き一斉に飛び立つヒドリガモの群れ（4月）

## 配慮事項

水草などのある開放水面が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985（1995 2版21刷）  
「原色日本野鳥生態図鑑（水鳥編）」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、（財）日本野鳥の会 1982（1994

増補版7刷）

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「進化 ガンカモ類の多様な世界」D. Lack 著、阿部直哉ほか訳、思索社 1976

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）  
草花

（外来種）  
草花

哺乳類

（水辺）  
鳥類

（草原・樹林）  
鳥類  
ワシ・タカ

# ヒバリ

*Alauda arvensis*

ヒバリ科・夏鳥



ヒバリ

## 名前の由来

晴れた日に、空高く舞い上がりさえするので「日晴(ひはる)」といったことから。漢字名：雲雀

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）17cm。スズメよりも大きい。

地上にいるときは後頭の冠羽を立てる。

体は淡黄褐色で、頭上、体上面、翼それに胸には、縦方向に黒い短い線が一面にある。翼の肩近くのところは、赤褐色で線などの模様はない。

飛ぶと翼の後縁が白い。尾の外側も白い。

声：繁殖期には高い空で「ピィピィピィ、リリリ、ピリリリ、リィリィ、ピリリリ」などといった細かな声でせわしなく鳴き続けている。

地鳴き（さえずりではない普通の鳴き方）では「ピルッ、ピルッ」という声で鳴く。

飛び方：高空でさえずる際は、なわばり内の地上から飛び立ち、強く羽ばたきながら上昇し、一点に静止したり、静かに輪を描いたりしたさえずる。

地鳴き（さえずりではない普通の鳴き方）をするときは、草の上を低く飛びながら鳴くことが多いという。

歩き方：右足と左足を交互に出して歩く。

類似種と区別点：ビンズイ、タヒバリ。

ビンズイはオリーブ色が強く、冠羽がない。ヒバリによく似た声でさえずるが、「ツイ、ツイ、ツイという声が入るのが特徴。また、枝や岩の上でさえずる。

タヒバリは色が濃く、冠羽がない。歩きながら尾を上下に振る。



ヒバリ。地上にいるときには冠羽を立てている

## 生息環境・分布

丈の低い草が疎らに生え、露出した地面の多い乾燥地を好み、牧場、草原、川原、農耕地に生息する。十勝では夏鳥。

分布：ユーラシア大陸の温帯・亜寒帯と北アフリカの一部に分布。

日本では九州以北から北海道までの全国で繁殖する。積雪の多い地方では冬に南下して越冬する。

北海道には夏鳥として3月下旬に渡来し、繁殖する。

十勝には、3月下旬に渡来。平野部の農耕地や河川敷などに生息し、繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				■								
本州以南 (越冬期・通年)	■											

## 食性・他生物との関わり

草の実や昆虫が主な餌。  
地上を歩行しながら餌をついばむ。繁殖期ではないときに

は川原の土手など乾燥したところで草の実を食べる。  
捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は4月初旬～7月、年1～3回、一夫一妻で繁殖する。繁殖地に来た当初はさえずりすることもなく目立たない。つがいであるものも、オスが少し早めに来るものもいるという。

巣作り前にオスはさえずりや争いによってなわばりを作る。巣はメスだけが地上で作る。草の根もとに作られることが多い。外装はヨモギの枯れ葉や大豆の枯枝などを用い、内装にはイネ科の枯れた根を用いる。巣はお椀型、外径10cmくらい。オスは巣作りの間、メスの後に付いて回り、地上でさえずりを繰り返すという。

2～5個（平均4個）産卵する。メスだけが卵を抱き、約

10日でヒナがかえる。

オスメス共同でヒナに給餌する。9～10日と短い期間でヒナは巣立つ。巣立ち後約19日で次の繁殖に入るとい



ヒバリの親子。手前が子ども

## 興味深い話

■アイヌ民話では、地上に降りた中空の神の娘クナウを探しに大空の神に使わされたが、地上の美しさに心奪われ探さなかったので罰として天には帰れないようされたため、「帰りたい、帰りたい」と大空の神に訴え鳴いているという。

■鳴き声は「日一分(ひいちぶ)、日一分・・・」と聞きなされる。

■主に飛んでいるときにさえずるが、杭や石の上でさえずることもある。

■なわばりの面積は5,000～10,000㎡で、なわばり内で巣材採集、交尾、繁殖、採食をするという。

■巣作りの時には、なわばり内の丈の低い植物の上をつがいであぐらとするという。

■ヒナは9～10日と短い期間で巣立つが、このときにはまだ飛べるようになってはいない。これは危険の多い地上に巣を作る鳥としての特徴だという。

■宅地開発などが進むにつれ、ヒバリの住み場所は減っている。

■堤防上を車で走っていると、そこにいたヒバリが車を避

けて飛び、車の進行方向少し先に降りる、ということが繰り返されることがある。

■水浴びはせず、砂浴びをする。

■ヒバリは帯広市の鳥に指定されている。

■十勝地方のアイヌ語では「プクサチリ」という。

■アイヌ語名プクサチリは「ギョウジャンニクノ鳥」の意。別名「リコチリポ＝高いところにいる小鳥」「チャランケチリ＝談判する鳥」ともいう。



看板の上でさえずるヒバリ

## 配慮事項

裸地が混じる丈の低い草地が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房

1993

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997

「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987

「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

羽田健三・小淵順子 (1967) ヒバリの生活史に関する研究. I 繁殖生活. 山階鳥研報、5 : 72-84.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類



# ベニマシコ

*Uragus sibiricus*

アトリ科・夏鳥



ベニマシコ（オス）

## 名前の由来

マシコは「猿子」と書き、羽が赤いことからつけられたと考えられる。マシコの中でも特に赤いと「ベニ(紅)」が付けられたのだろうか。漢字名：紅猿子

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(葦原・樹林) ウシタカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）15cm。スズメより少し大きくスマートで、体の割に尾が長い。

オスの夏羽では顔のくちばしの付け根や額、目の周りが紅色。胸から腹が紅色。背は暗紅色で縦に黒いスジがある。翼は黒くて、明瞭な白線が2本ある。黒い尾の外側は白。メスは褐色がかかっていて地味。

声：繁殖期には「チンチンチュベチュベチュー」とか「フィー、チリリイチョ、チイチョ」などと聞こえる声で柔らかくさえずる。また地鳴き（さえずりではない普通の鳴き方）では「ピッポ。(間) ピッポ」あるいは「フィッ、フィッ」「クワッ、クワッ」などといった声で鳴く。

類似種と区別点：オオマシコ。

オオマシコは大きく、尾が長くない。また、翼に明瞭な白線がない。



ベニマシコのオス。鮮やかな紅色。翼の黒白も印象的



ベニマシコのメス。地味だが、翼に2本の白帯はある

## 生息環境・分布

河川沿い、湿地周辺の灌木帯、疎林内の藪地、林縁のササ藪など、やや開けた環境。十勝では夏鳥。

分布：ユーラシア大陸中緯度地方の東半分に分布する。北のものは冬にやや南方に移る。

日本では北海道と本州下北半島で夏鳥として繁殖、本州以南では冬鳥である。

北海道には4月中旬に渡来。低地や低山帯で繁殖し、少数が越冬する

十勝には、4月中旬に渡来。平野部から低山にかけての林縁部や、河川敷、農地の残存林などに生息、繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				繁殖								
本州以南(越冬期)	越冬									越冬		

## 食性・他生物との関わり

昆虫、果実、種子、木の芽などを食べる。  
小枝にとまって体を伸ばしたり逆さにしたりして、小果実などをくわえとる。また、地上をはね歩いても餌を探す。  
餌探しでは、あまり忙しく動き回らない。  
捕食者は猛禽類など。



ハルニレの実をついばむベニマシコ

## 繁殖生態

繁殖期は5～7月、一夫一妻で繁殖する。  
なわばりを作るようで、オスは灌木の上にてきて盛んにさえずり、さえずりあうこともよくある。  
地上から80cm～1.7mくらいの低木の小枝に乗せるようにお椀形の巣を作る。枯れ草、樹皮、細根などを材料に用いる。  
3～6個産卵し、オスメス交代で卵を抱く。メスは自分でも餌を取りに出かけるが、オスが巣の中のメスに餌を運ぶこともある。  
卵がかえるまでの日数や、ヒナが巣立つまでの日数など詳しいことは不明。

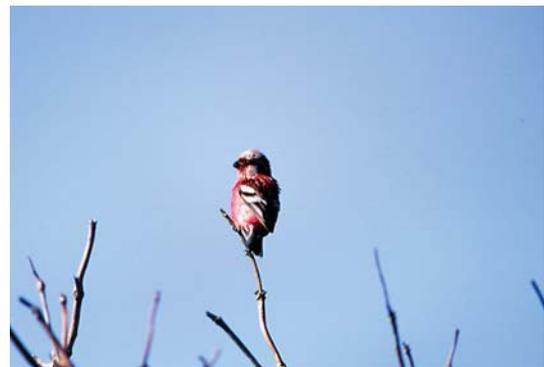


ベニマシコの巣（下）と巣材を運ぶメス（上円内）

## 興味深い話

- 標識調査で、5年11ヶ月の生存が確認されている。
- 北海道ではほとんどが冬には南に移動するが、少数が残ることもある。
- タンポポの種子をよく食べる。
- 羽音が「ポロポロポロ」と聞こえるという。
- オスの冬羽はベージュがかって少し地味である。春に向けては羽毛が生え替わるのではなく、羽毛の先端がすり切れることで徐々に内側の紅色部分が見えてくることで、鮮やかな色になる。
- 警戒時には頭の羽毛を逆立て、尾羽を揺するという。
- 越冬期には小群または単独で見られるという。

■ 越冬地では冬の終わり頃、餌となる草の実などがなくなったためか、餌台にも現れることがあるという。



ベニマシコ（オス）の後ろ姿

## 配慮事項

川沿いの灌木帯が大事。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・

谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所 1996

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原・樹林)  
鳥類

# ホオジロ

*Emberiza cioides*

ホオジロ科・夏鳥



撮影：浦幌野鳥倶楽部

ホオジロ（オス）

## 名前の由来

眼の下部が白く頬が白ということで「ほほじろ」と呼ばれた。漢字名：頬白

魚類

底生動物

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）16.5cm。スズメよりも少し大きく、尾は長め。オスは顔が黒く、ほおの白とのコントラストが目立つ。目の上に白く太い眉斑（眉のような模様）がある。頭や背は茶褐色で黒い筋があり、胸と脇は茶褐色、腰は赤褐色。

メスは顔が黒くなく褐色で、ほおは白っぽく、全体に色が淡い。

声：繁殖期には「チョッピーチロロ、チチロッピー」というような澄んだ声でさえずる。

地鳴き（さえずりではない普通の鳴き方）では「チチッ」とか「ツツッ」などと2音ずつ鳴くことが多い。

歩き方：スズメのように両足をそろえて、はねながら移動する。

類似種と区別点：カシラダカ、ホオアカ。

カシラダカは下面が白く胸に褐色の帯と黒い縦斑がある。

またオス夏羽の頭上と顔は黒い。

ホオアカの頬は赤褐色で頭上は灰色、胸に黒と褐色の帯がある。



ホオジロのオス。  
黒い顔、白い頬と眉とのど、茶色い頭と胸



ホオアカ。ほおが赤褐色で頭は灰色

## 生息環境・分布

低地や低山帯の藪地を好む。広大な草原や原生林では見られない。十勝では夏鳥。

分布：ユーラシア大陸中緯度地方の東半分分布する。

日本では屋久島以北の全土に留鳥としてふつうに繁殖する。

北海道には4月中旬に渡来。夏鳥として繁殖する。東部では少ない。

十勝には、夏鳥として4月中旬に渡来。平野部の農耕地周辺、河川敷など開けた所に生息、繁殖する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				繁殖								
本州以南 (越冬期・通年)	繁殖											

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
ワシ・タカ

## 食性・他生物との関わり

イネ科、カヤツリグサ科、タデ科、キク科、マメ科などの種子を食べる。昆虫も食べるが、特にヒナの餌としてガの仲間やバッタの仲間を捕まえる。

地上を歩行しながら草の種子などをつまみあげ、しばしば

穂にとまってつまみとり、もぐもぐとくちばしを動かして種子をとりだして食べる。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

繁殖期は4～9月、一夫一妻で繁殖する。

繁殖期にはなわばりに分かれるが、行動圏は繁殖の進行に伴って変化する。(→興味深い話の項参照)

地上や藪の小枝の又の上に置くようにして、お椀形の巣を作る。枯れ草、草の根、枯れ葉などを巣材に使い、内装には細根、細い葉、獣毛などを用いるという。巣づくりはメスのみが行い、オスはメスにつききりとなる。(→興味深い話の項参照)

3～5個産卵し、メスだけが卵を抱き、オスは警戒に当たって盛んにさえずる(山岸、1978)。

約11日でヒナがかえり、約11日で巣立つ。オスメス共同でヒナを養うが、ヒナを抱くのはメスのみが行う。

巣立った幼鳥はその後25～29日くらい親の給餌を受けるといふ。(→興味深い話の項参照)

年に1～3回繁殖する。(→興味深い話の項参照)

## 興味深い話

■ 標識調査で、6年6ヶ月の生存が確認されている。

■ 日本中どこにでもいる鳥で、国土の64%で繁殖しているといわれる。

■ 「チョッピーツ、チッピー」というさえずりを「一筆啓上仕り候」とか「源平つつじ茶つつじ」などと聞きなしている。

■ 1羽のオスはさえずりのパターンを十数通り持っており、同じパターンを十数回から百回以上繰り返した後、次のパターンに移るといふ。

■ 未婚のオスは行動圏が小さく、さえずり活動は激しいといふ。つがいとなったオスはそれ程さえずらなくなるといふ。

■ 繁殖期、オスの行動圏は藪地で0.4～0.6haくらい、草原で0.8～1.9haくらいで、巣作りの時期には広く、産卵・抱卵の時期には狭くなり、ヒナを育てる時期には再び広くなるという。

■ 巣作りはメスのみが行うが、オスはメスに対して巣作りを促すディスプレイ(誇示のための行動・動作)を行うと

いふ。

■ 1シーズンに最大5回繁殖産卵を行い、合計23個の卵を産んだ例があるといふ。

■ 子育ての時期に外敵が近づくと、親鳥はけがをしたふりをして外敵の気を引くといふ。これを擬傷といふ。

■ 巣立ちが不ぞろいの場合、先に巣立ったものをオスが、後に巣立ったものをメスが分担するという。



ホオジロ(オス)の正面顔。  
顔の白い模様がくちばしを中心にしたXマークに見える

## 配慮事項

低木の疎林と草原が入り混じったところが大事。

### 参考文献

- 「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ボックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993

- 「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「鳥のおもしろ私生活」ビッキョ 編著、主婦与生活社 1997

山岸哲 (1978) ホオジロの社会構造と繁殖番い数の安定性. 山階鳥研報, 10: 199-299.

Ymagishi, S. (1971) A study of the home range and the territory in Meadow Bunting (*Emberiza cioides*). 1. Internal structure of home range under high density in breeding season. Misc. Rep. Ymashina Inst. Ornith., 6: 356-388.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシタカ

# ホオジロガモ

*Bucephala clangula*

カモ科・冬鳥



ホオジロガモ（オス）

## 名前の由来

オスの頬に白い斑があるカモだから。古くは「てこがも」とも呼ばれ、これはかわいい少女（てこ）のようなカモの意味。「カモ」は「浮かぶ→うかむ→かむ→かも」だとする説、「雁(ガン)→かむ→かも」だとする説がある。漢字名：頬白鴨

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）45cm。

オスの頭部は三角形で緑色光沢のある黒、くちばしの基部近くに丸い白斑がある。背、腰、上下尾筒（尾の付け根付近）、尾が黒く、肩の羽は白い。下面はほとんど白色。飛行時に雨覆（翼上面中央から前面にかけての羽）の白と風切（翼の後縁の羽）の黒とのコントラストが明瞭。くちばしは黒く、足は橙色。

メスは頭部が褐色で白い首輪があり、背面は褐色、下面が灰褐色。くちばしは黒くて先端が橙色。目はオスメスとも金色。

声：日本にいる冬の間にはほとんど鳴くことがない。その代わりに、飛んでいるときの羽音に特徴があり「フィフィフィ」という細かな音が連続する。繁殖地である北ヨー

ロッパでは「チャッピー」あるいは「ビィビィー」と鳴くという。



撮影：叶肉拓哉

ホオジロガモ（メス）

## 生息環境・分布

大きな河川、湖沼、池、河口、砂浜海岸などに生息する。十勝には10～4月にくる冬鳥。

**分布：**ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の高緯度地方に広く繁殖分布し、冬は両大陸の低緯度地方に渡ってすごす。日本では、冬鳥として北海道、本州、四国、九州で見られ、本州北部と北海道に多い。

北海道では冬鳥。沿岸海域、河川、湖沼に飛来する。かなり内陸の河川にも飛来することがある。

十勝では冬鳥として10月ごろに飛来。沿岸海域や河川、湖沼で越冬する。



ホオジロガモ。「頬」の白はもちろん、目の金色も印象的  
英語名はGolden Eye

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
ユーラシア高緯度 (繁殖期)												

## 食性・他生物との関わり

軟体動物、甲殻類(エビやカニなど)、昆虫の幼虫、小魚などのほか、水草の種子・根・茎・葉、水藻なども少し食べるという。

水中に潜ったり、水面でグチャグチャくちばしを浅い水に

入れて動かしたり、逆立ちして水底から捕ったりといろいろな採餌の仕方をする。水底や水中を泳ぐといい、深さ1～4mぐらいのところへ10～20秒ほど潜水する。

猛禽類などに捕食される。

## 繁殖生態

日本では基本的に繁殖を行わず、ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の高緯度地方で繁殖する。

繁殖期は5～7月で、一夫一妻で繁殖する。

つがいは冬に作られ、早ければ9月、2～3月につがいのピークを迎える。1～2羽のメスをめぐって数羽のオスによるグループディスプレイ(誇示のための行動・動作)が行われる。(→興味深い話の項)

巣は樹木や人工物の地上1～5mくらいにある穴や割れ目の中など様々な洞穴を利用して作られる。浅いくぼみにいくらかの内装を入れ、綿羽が敷かれる。もっぱらメスが作るという。

8～11個の卵が産まれる。産卵後つがいは解消され、メスのみが卵を抱き、29～30日くらいでヒナがかえる。

ふ化後ヒナの体が乾くとすぐ巣を離れ、歩いて水辺に出る。メスのみがヒナの世話をし、57～66日くらいで独立するという。



撮影：高橋正良

ディスプレイ(求愛行動)をするホオジロガモのオス

## 興味深い話

■身が軽いため、ほんの少しの助走で水面から飛び立つことができる。

■冬に行われるつがい形成のグループディスプレイでは、オスは盛んに頭を上方に向けて反り返り、後頭部が方の背面につくほど曲げ、次に斜め上方にのぼしながら上半身を水面に起こす、という動作を行うという。(→繁殖生態の項参照)

■越冬地では日中はつがいや単独、集まっても小さな群れで過ごしているが、夜には集まって休み、数百羽になることもあるという。

■繁殖地の選択幅は比較的狭く、南部の森林ステップと北部の森林ツンドラにはさまれた地域に限られるという。高木となる森林と、湖水、池、河川などの水域とが組み合わさった場所である。これは水域で採食し、樹林に巣を作るためだと言われる。

■ヒナは卵からかえってすぐ、メス親とともに巣から離れ

るが、営巣場所によっては水辺に出るまで1.5～2kmも歩くことがあるという。

■十勝地方のアイヌ語ではホオジロガモを「エアウウ」といい、カモ類一般(特にマガモ)を「ウォルンチカブ＝水の中にいる鳥」という。



ホオジロガモ(左上)。オオハクチョウ(手前2羽)や他のカモ類と冬を過ごす(帯広川下流部)

## 配慮事項

底生動物の豊富なやや水深のある水域が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕藏、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004  
「コタン生物記Ⅲ 野鳥・水鳥・昆虫篇」更科源藏・更科光、法政大学出版局 1977

Cramp, S. & K. E. L. Simmons (1977) Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Vol. II. Oxford Univ. (eds.) Press, Oxford.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# マガモ

*Anas platyrhynchos*

カモ科・留鳥



マガモ（オス）

## 名前の由来

カモを代表する鳥なので、マ（真）ガモという。「カモ」は「浮かぶ→うかむ→かむ→かも」だとする説、「雁（ガン）→かむ→かも」だとする説がある。漢字名：真鴨

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）59cm。

オスの頭部は緑色光沢のある黒で白い首輪があり、胸はぶどう色。体は灰白色で黄緑色のくちばしが目立つ。メスは褐色で黒褐色の斑があり、尾は白っぽい。くちばしは黒くて周辺は赤っぽいオレンジ色。青色の翼鏡（翼の上面後縁の内側にある金属光沢をもった羽）の上下に白い線がある。

声：カモの仲間（カモ類）の中では最も良く鳴くカモ。オスは「グァークワックワッ」と先が強い大声で鳴き、「クワッ、クワッ」と小声でも鳴く。メスも「クワッ、クワッ」と低い声で鳴く。水面から飛び立つときには「グェー、グェー」と鳴くことが多いという。

類似種と見分け方：カルガモはマガモのメスと似ている。カルガモのくちばしは黒くて先に黄色っぽいオレンジ色の部分がある。体は褐色で顔は淡色、体の後半は黒っぽくて三列風切（翼後縁の内側の羽）が白い。



マガモのメス。くちばしは縁がオレンジ色



カルガモ。くちばしの先に黄色。顔も明るい色に明瞭なスジ

## 生息環境・分布

河川、湖沼、ダム湖、沿岸の海上、入り江など。繁殖は水際の草むらや藪の多いところで行う。十勝では一年中見られる。

分布：ユーラシア大陸と北アメリカ大陸に広く繁殖分布し、冬は両大陸南部やアフリカ大陸北部、東南アジアなどに渡って過ごす。

日本では、大部分が冬鳥として全土に越冬するが、北海道、本州各地、対馬などに少数が繁殖する。

北海道では留鳥。繁殖する。河川や湖沼に普通に生息し、都市の公園などで見られるカモ類では最も多い。最近では都市の緑地で繁殖する例もある。

十勝では留鳥で、河川、湖沼に一年を通して見られる。最も普通に見られるカモでハクチョウの餌づけ場所にも多数見られる。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	[Green bar across all months]											
						繁殖						

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類

## 食性・他生物との関わり

雑食性だが水草の葉・茎・種子などの植物食が主。湿地や湖沼の岸などを歩きながら拾い食べたり草のみをついばんだりする。水面に浮いてくちばしを水に水平に近づけ、グチャグチャ動かしてこしとるようにする。首を水に

入れたり、逆立ちして上半身を水に入れ、水底の水草を食べたりもする。ただし潜水はしない。猛禽類などに捕食される。

## 繁殖生態

繁殖期は4月～8月。一夫一妻で繁殖する。前年の10月頃から3月頃までオスは求愛のグループディスプレイ（誇示のための行動・動作）を行う。（→興味深い話の項参照）  
巣作りはメスのみが行い、水辺の草むらや藪の下の浅い窪みに草をしいて浅い皿形の巣を作る。産座には自分の胸や腹の綿羽を敷くという。  
6～12個の卵を産む。産卵後つがいは解消され、メスのみが卵を抱く。28～29日くらいでヒナはかえる。他のカモ類と同じように、ヒナはふ化するとすぐに親について巣を離れる。  
メスのみがヒナの世話をし、50～60日くらいで独立するという。



マガモの営巣場所（矢印）



マガモの巣とその中の卵



ふ化直後のヒナを腹の下に隠す親（メス）



巣立ち直後のマガモの親子

## 興味深い話

- 標識調査で12年9ヶ月生存という記録がある。
- 越冬地では狩猟の対象となっているので、昼間は安全な水面で休んでいることが多く、夜間に湿地、湖沼の岸などで餌をとる。
- 冬は群れをつくり、日中の休息群は水面の大きさに応じて大群となる。ワシやタカなどに襲われると湖沼の真ん中に密集した群れをつくる。
- 冬に見られるオスの求愛ディスプレイ（誇示のための行動・動作）は、2～10羽くらいのオスが1～2羽のメスの周りを泳ぎ回り、くちばしで水をかける仕草をし、頭を上げて急に縮め尻を上げる、というものである。（→繁殖生態の項参照）
- マガモは、家禽として飼育されているアヒルの原種。アヒルはしばしば野生状態で生活していて「鳴きアヒル」「合

鴨」などと呼ばれる。野生のマガモと区別できないことも多い。  
■十勝地方のアイヌ語ではマガモを（カモ類一般も）「ウォルンチカフ＝水の中にいる鳥」という。



冬のマガモの群（帯広川下流部）

## 配慮事項

採餌環境として水草のある開放水面が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985（1995 2版21刷）  
「原色日本野鳥生態図鑑（水鳥編）」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・

谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、（財）日本野鳥の会 1982（1994 増補版7刷）  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978  
「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

（在来種）  
草花

（外来種）  
草花

哺乳類

（水辺）  
鳥類

（草原・樹林）  
鳥類  
ワシ・タカ



# マガン

*Anser albifrons*

カモ科・旅鳥



マガン

## 名前の由来

ガンの中では代表的な鳥という意味。マガンやヒシクイは「グワーン」と鳴き、ガンという名はそこからつけられた。ガンはカリともいい、それはカヘリの略。春は北へ帰っていくから。漢字名：真雁

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 特定種

文化財保護法：国指定天然記念物

国レッドリスト (2007)：準絶滅危惧種 (NT)

北海道レッドデータ：希少種 (R)

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）72cm。体は灰褐色で背には淡色の横班があり、腹には不規則な黒色の横じまがある。尾は黒褐色で先端が白い。くちばしはピンクまたはオレンジ色で先は白く、くちばしの基部の周囲が白い。足はオレンジ色。

声：少し甲高い「クッハハン、クッハハン」と聞こえる声でなく。飛び立ったときには盛んに鳴き交わし、飛んでいるときにもよく鳴くが、上空で編隊を組んで飛ぶときは、時々鳴くだけだという。ねぐらにする沼ではほとんど一晩中鳴き声が聞こえる。

飛び方：「竿（さお）になり鉤（かぎ）になり」の隊列を組んで飛ぶ。

類似種と区別点：カリガネ、ヒシクイ。

カリガネは小さく、くちばしも短くて淡紅色。くちばしの基部の白色部は範囲が広く、頭頂にまで達する。目の周囲に細い黄色い輪がある。

ヒシクイは少し大きくて色が濃く、特に頭部から首は暗色に見える。マガンより少し太い「グッハハン、グッハハン」と

聞こえる声でなく。



マガン。オレンジ色のくちばしの付け根に白い部分



類似種ヒシクイ。黒っぽいくちばしの先近くに明るいオレンジ色

## 生息環境・分布

水田、湿地、湖沼、干潟、内湾。十勝では旅鳥で9～11月、3～4月に見られる。

分布：ユーラシア大陸と北アメリカ大陸の北極圏に繁殖分布し、両大陸南部に渡って冬を過ごす。

日本には冬鳥として九州北部以北に渡ってくる。

北海道では旅鳥。春と秋に湖沼、水田、草地などに多数飛来する。最近渡来数が増加している。また日高地方静内では1995年12月以来少数が越冬するようになっている。十勝では旅鳥。春と秋、十勝川下流部や生花苗沼などの海跡湖に多数訪れる。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期			■	■					■	■		
北極圏 (繁殖期)				■	■	■	■	■	■			
九州北部以北 (越冬期)	■	■	■							■	■	

## 食性・他生物との関わり

草の葉・茎・地下茎・根茎・種子・果実などを食べる。湿地の地上を歩きながら採食し、畑地で麦の葉をむしったりもする。また水面ではくちばしをグチャグチャと動かしてこすようにしたり、首を入れたり、上半身を逆立ちするように入れたりして水草等を食べる。



牧草地のマガン

## 繁殖生態

日本では、冬鳥（北海道では旅鳥）であって、繁殖しない。繁殖はユーラシア大陸と北アメリカ大陸の北極圏で行われる。繁殖地では矮性灌木が多いツンドラ地帯の乾いたところや沼沢地にすむという。

繁殖期は5～7月で、一夫一妻で繁殖する。

巣は地上のくぼみに、地衣類、コケ、葉、枝などによって皿形に作られる。オスメス共同で作られるが、大部分はメスが作り、産座には自分の綿羽を敷くという。

4～7個の卵を産み、メスのみが抱く。27～28日くらいで

ヒナがかえり、まもなく巣から離れる。

ヒナの世話は両親が行い、40～43日くらいで飛べるようになるという。

## 興味深い話

■「ガン」の名前の由来としては、雁（カリ）などの鳥名を、鎌倉時代、軍記物で語調を強めるために漢名の音読みにして、そこから「ガン」という呼び名が広まったという説もある。

■カモ類と違ってつがいの結びつきが強く、一方が死ぬまでつがいのままだという。

■繁殖期にはつがいで分散する。家族は換羽地や越冬地には群れて入って移動し、最初の秋と冬をいっしょに過ごす。

■越冬地ではつがいと前年に生まれた数羽の幼鳥からなる家族を単位として行動し、それが集まって大きな群れを形成している。

■群れは数百から数千羽になり、群れの中で小グループが対立し、脅しなどのディスプレイ（他の個体に対する誇示行動）がある。

■日本では、65,000～80,000羽くらいが越冬しているがその大部分は宮城県伊豆沼に生息しているという。

■百羽台の大群が現れるのは島根県あたりまでであるが、沖縄県西表島にも8羽来た記録があるという。

■越冬地では昼間は安全な池や沼で休息し、早朝などに水田地帯に飛来して採餌するという。

■十勝地方のアイヌ語では「クイトプ」という。



3～4つの編隊に分かれて飛ぶマガンの群れ

## 配慮事項

渡りの中継地として、埒（ねぐら）になる広い開放水面と、近隣に餌になる草がある畑地や草地が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)

「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995

「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房

1993

「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. II」清棲幸保、講談社 1978  
「山川弘氏からの聞き取り記録」内田祐一 (未発表)

横田義男ほか (1982) 日本のガンの分布、羽数および生息状況。鳥30 (4)

Cramp, S. & K. E. L. Simmons (1977) Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Vol. II. Oxford Univ. (eds.) Press, Oxford.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

# ミコアイサ

*Mergus albellus*

カモ科・冬鳥



ミコアイサ (オス)

## 名前の由来

美しく小さなアイサだからこの名がついたという。アイサの古名は「あきさ」で秋の早く（あきさ）に渡ってくることに由来する。漢字名：神子秋沙、巫子秋沙

## 特定種

北海道レッドデータ：絶滅危急種 (Vu)

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）42cm。

オスは大部分が白いが目の周囲、後頭の冠羽の下、胸側の2本の線、肩羽、背、腰、尾が黒く、パンダのような顔している。翼上面は白と黒に塗り分けられている。くちばしと足は青っぽい灰色。

メスは頭上から後頭にかけて茶褐色で目の周囲の黒味が強く、顔は白くて体が灰色。

声：日本にいる冬の間にはほとんど鳴くことがない。オスは口笛のような「フィー」という声で、またメスは「クワッ、クワッ」という声で鳴くという。

5月ノルウェーでの観察によると、オスが「ギョッキュー」というような濁った声を出し、メスが「コッコッコッ」と低く鳴いて、ディスプレイ（誇示のための行動・動作）をしていたという。



ミコアイサのオス。小さくて白くてパンダのような顔



ミコアイサのメス

## 生息環境・分布

大きい河川、湖沼、潟湖、河口、内湾などに生息する。十勝には11～4月にくる冬鳥。

**分布：**ユーラシア大陸の高緯度地方で繁殖し、冬は同大陸南部に点在して過ごす。

日本では冬鳥として11月に現れ、翌年の4月ごろまで本州、四国、九州で越冬する。北海道でも冬鳥であるが、北部で

少数が繁殖する。

北海道では冬鳥。一部留鳥。河川、湖沼に生息する。北部（豊富町）の沼で少数繁殖する。

十勝では冬鳥として、河川や湖沼に訪れるが数は多くない。帯広川下流部で毎年観察されている。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■									■	■	
ユーラシア高緯度 (繁殖期)				■		■		■				

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

## 食性・他生物との関わり

魚類、甲殻類、貝類などを食べる。

水中に潜ってえさを食べる。水中に潜る時間は8～30秒ぐらい、2mぐらいまで潜るが、群れで一斉に潜る性質がある。

捕食者は猛禽類など。

## 繁殖生態

日本では北海道北部（豊富町）の沼で少数繁殖するほかは冬鳥で繁殖せず、ユーラシア大陸の高緯度地方で繁殖する。繁殖期は5～7月で、一夫一妻で繁殖する。

つがい作りは冬に越冬地で行われ、そのためにオスがグループディスプレイ（誇示のための行動・動作）を行う。（→興味深い話の項参照）

繁殖地ではよく茂った針葉樹林帯の緩やかな川や森に囲まれた湖沼などの岸辺の樹洞に営巣するという。

6～9個の卵を産み、産卵後つがいは解消され、メスのみが卵を抱く。26～28日ぐらいでヒナがかえり、メス親の世話で育つ。

## 興味深い話

■日本に渡来するアイサ類（ウミアイサ・カワアイサ・ミコアイサ）の中で一番小さい。そのため行動は軽快で、ほんの少しの助走で水面から飛び立つことができる。

■くちばしは細く、先が鉤（かぎ）型に曲がり、縁にはのこぎりのようなギザギザがついている。このギザギザは口の方に向いていて、捕らえた魚を逃がさないよう押さえるのに役立つ。

■非繁殖期には群れているが50羽以内の小群でいることが多い。

■オスは繁殖期が終わるとメスそっくりになるため、越冬のため渡ってきた直後の群れはメスばかりいるように見える。やがて季節が進むにつれて、白く美しいオスの姿が目立つようになる。後から来たわけではない。

■冬、つがい作りのために行われるオスのグループディスプレイは、1～2羽のメスをめぐって2～7羽のオスが泳ぎ回り、頭を上背後に振る、というものだという。（→繁殖生態の項参照）

■十勝地方のアイヌ語では、カモ類一般（特にマガモ）を「ウォルンチカプ＝水の中にいる鳥」という。



ミコアイサのオス。渡ってきた当初はオスもメスと区別が付かないが、季節とともに白くなる

## 配慮事項

やや水深のある魚類や底生動物の生息する水域が必要。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・

谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994 増補版7刷)

「北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック2001」北海道 2001

「アイヌ語で自然かんさつ図鑑」帯広百年記念館編、内田祐一・池田亨嘉、帯広百年記念館友の会 2004

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・森林) 鳥類  
ワシ・タカ

# ミサゴ

*Pandion haliaetus*

タカ科・留鳥

## 名前の由来

川や湖沼、海で、水に飛び込んで水中の魚をつかまえることから「水探（みさご）」と呼ばれ、奈良時代から「みさご」と呼ばれていたという。魚鷹（うおたか）とも呼ばれることがある。漢字名：魚鷹

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ

## 特定種

国レッドリスト (2007) : 準絶滅危惧 (NT)  
北海道レッドデータ : 絶滅危急種 (Vu)

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）オスは約56～60cm、メスは約57.5～62cm、翼を開いたときの端から端までの長さオスは約147～167cm、メスは約154～169cm。大きさは、トビと同じくらいで、翼が細長い。背面は暗褐色で下面是腹部が白く、翼は白っぽく見えるが、逆さ八字型の黒っぽい模様がある。尾には黒っぽい横縞がある。頭部が特徴的で、白地の頭部に目から首の裏側にかけて太くて黒い帯がある。

**声**：なわばりから離れた場所ではあまり鳴かないが、繁殖期には巣の上空を飛びながら「ピョップピョップ」と鳴き、警戒時には「キッ、キッ」と鳴くことがあるという。

**飛び方**：直線的にゆったりと飛び、滑空時には翼は水平で直線的に見えるが、ときどき「へ」の字形になることがあるため、カモメ類と間違えやすい。水中の魚を狙うときには、空中で羽ばたきながら一点に静止（ホバリング）し、ほぼ垂直に水面に飛び込む。

**類似種と見分け方**：カモメ類。

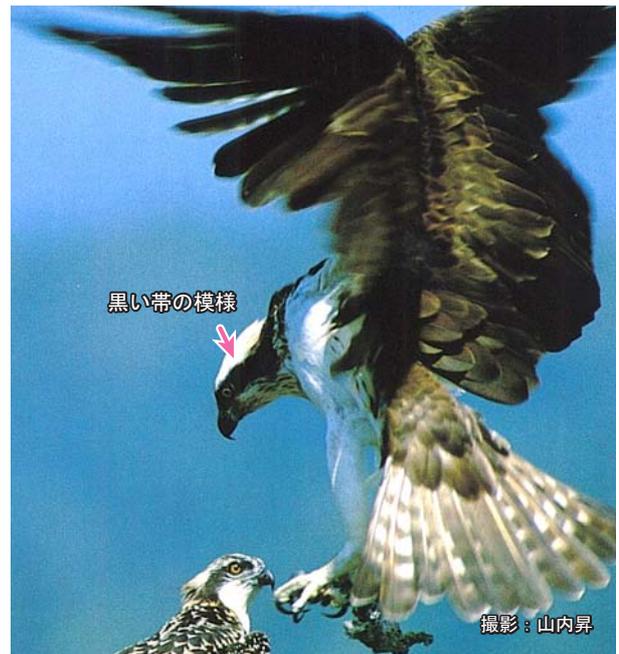
下面が白く、翼が他のタカよりも細長いため、飛んでいるとカモメ類に似ている。カモメ類とは、頭部の違いと飛び方の違いで見わかる。ミサゴの頭部には目から首の裏側にかけて太くて黒い帯があるが、カモメにはない。飛び方は、



ミサゴ

撮影：山内昇

羽ばたいていないときは、ミサゴの翼は水平で直線的に見えるのに対し、カモメ類は浅いM字のように見える。他のタカ類とは、翼が細長い点、頭部の模様が異なる点で見分けられる。



ミサゴ。目から首の裏側にかけて、太くて黒い帯がある

撮影：山内昇

## 生息環境・分布

海岸の崖の上や湖沼沿いの大木の上で繁殖し、魚を餌としているため、海や湖沼、河川周辺に棲んでいる。

**分布**：ユーラシア大陸中部、インド、アフリカ中部、北アメリカ北部、南アメリカ北中部、オーストラリアなど。国内では北海道から沖縄にかけて繁殖し、北日本で繁殖し

ている個体は冬期に暖地に移動する。北海道では道内全域に生息している。夏鳥だが、冬期にも稀に観察されることがある。十勝地方では太平洋岸から足寄町、鹿追町、上士幌、新得町などの内陸地帯まで広範に確認されている。十勝川では下流から上流まで確認されている。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期			繁殖									

## 食性・他生物との関わり

餌のほとんどが魚であり、天気が悪くて魚を捕りにくいときには弱った鳥類や両生類、爬虫類、甲殻類、甲虫などを捕ることもあるという。餌としている主な魚は、淡水魚(海から川に上ってくる魚を含む)ではサケ、マス、ボラ、コイ、フナ、などである。十勝川では、サケ、カラフトマス、アメマス、ニジマス、ウグイなどを捕食していると思われ

る。ヨーロッパのある調査では、ミサゴが捕まえた496尾の魚の大きさは7~57cmであったという。

巣は崖の上以外に大木の樹上にもつくり、巣の材料に木の枝を使い、巣の内側には草、苔、樹皮、海藻などが使われている。

## 繁殖生態

繁殖期は4~7月で年1回、一夫一妻で繁殖する。岩棚や大木の樹上に流木や枯れ枝を積み、直径約1.2~1.5mの皿型の巣を雌雄共同でつくる。同じつがいと同じ巣を修復しながら何年も利用することが多いという。哺乳類の捕食者がいない島では、地面に巣をつくることもあるとのことである。

繁殖開始年齢は3~5歳。一腹産卵数は2~3個で、1~3日おきに1卵ずつ産卵。抱卵は雌雄交代で34~40日行いが、抱卵時間はメスの方が多いという。育雛日数は49~57日。メスは雛への給餌と巣の警護を主な仕事とし、オスは主に狩をして餌をメスに渡すとのことである。



魚を狙うとき、空中で羽ばたきながら静止し、水面に足から飛び込む。



木の上で捕まえた魚を食べるミサゴ

## 興味深い話

■足指の裏側には角質の刺があり、滑りやすい魚がうまくつかめるようになっている。一般的に鳥類の足指は、前3本、後1本だが、ミサゴは前2本、後2本であり、魚を4本の指で捕まえやすい構造になっている。ミサゴ以外ではフクロウ類が前2本、後2本の足指であり、ミサゴと同様に獲物をより捕まえやすい構造になっている。

■巣は代々使用される傾向があり、19世紀のスコットラン

ドの21の巣で10年~92年、北アメリカで最高125年連続使用された記録があるという。

■ワシタカ類で水に潜ることができるのはミサゴだけであり、羽毛は防水性にすぐれている。

■背中にミサゴの白骨をつけた大きな魚がとれることがあり、これは、ミサゴが自分よりも強すぎる獲物を襲い、飛び立てずに、足指を抜くこともできなかった結果である。

## 配慮事項

河川は採餌の場所であり、採餌のためには7~57cmの魚類が生息していることが必要である。つまり、魚類の生息環境を保全することがミサゴの生息環境保全につながる。

また、水の汚濁はミサゴの採餌を困難にするため、水の汚濁を防止することも重要である。営巣環境である崖地及び大木のある樹林帯の保全も必要である。

### 参考文献

「名前といわれ 日本の野鳥図鑑1 野山の鳥」国松俊英 偕成社 1995  
「図説 日本鳥名由来辞典」柿澤亮三・菅原浩市 柏書房 1993  
「改訂・日本の絶滅の恐れのある野生生物 レッドデータブック2 鳥類」環境省 2002  
「北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック2001」北海道 2001  
「図鑑 日本のワシタカ類」森岡照明・叶内拓哉・川田隆・山形則男 文一総合出版 1995  
「検索入門 野鳥の図鑑 陸の鳥②」中村登流 保育社 1986  
「原色日本野鳥生態図鑑<陸鳥編>」中村登流・中村雅彦 保育社 1995  
「猛禽類 BIRDS OF PREY」Glenns & Derek Lloyd 訳：高野伸二 主婦と生活社 1973  
「北海道鳥類目録 改訂2版」藤巻裕蔵 帯広畜産大学野生動物

管理学研究室 2000

「北海道地域別鳥類リスト」(財)日本野鳥の会北海道ブロック支部連合協議会 野生生物情報センター 1991

「十勝と釧路の野鳥 十勝・釧路地方鳥類目録」日本野鳥の会十勝支部・釧路支部 1987

「大樹の鳥II 北海道大樹町鳥類目録」飯嶋良朗 1998

「浦幌町鳥類目録」浦幌野鳥倶楽部 2000

「十勝野鳥だより1~153号」日本野鳥の会十勝支部

「北海道野鳥図鑑」河井大輔・川崎康弘・島田明英 亜璃西社 2003

Cramp, S. & K. E. L. Simmons (1977) Handbook of the Birds of Europe, the Middle East and North Africa. Vol. II. Oxford Univ. (eds.) Press, Oxford.

宮崎学 (1977) 漁食の猛禽ミサゴ. アニマ, 50: 53-59

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(草原・樹林)  
鳥類

# ムクドリ

*Sturnus cineraceus*

ムクドリ科・夏鳥(少数が越冬)

## 名前の由来

棕(むく)の実を食べるのでついたといわれる。  
漢字名：棕鳥



撮影：浦幌野鳥倶楽部

ムクドリ

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ  
ウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
鳥類  
ワシタカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで) 24cm。

尾は短めでくちばしと足の黄色っぽいオレンジ色が目立つ。体は全体的に灰黒色で頭と翼、またのどから胸は黒みが強い。顔には白い羽毛が目立ち、腰も白い。

メスは少し褐色味が強い。

声：春のごく短い時期に「キィーキィー、コロンコロン、ウギャー、コンコンコンコン、キチキチキチ」などと変化に富む声で鳴くことがあるという。

地鳴き(さえずりではない普通の鳴き方)では「キュルキュル」とか「リャーリャー」とうるさく鳴く。警戒時には「ジェー」と鳴く。

飛び方：連続はばたきし着陸する際、翼を三角翼に固定して降りる。

歩き方：人間のように片足ずつ交互に出しながら移動する。

類似種と区別点：コムクドリ。

コムクドリのオスは白い頭に赤茶色の頬を持つ。メスは頭から胸・腹にかけて灰白色。またコムクドリの腰は淡橙色で、くちばしと足は黒。



ムクドリ。くちばしのオレンジ、顔と腰の白が特徴



ムクドリ。くちばしの他足もオレンジ色

## 生息環境・分布

農耕地、公園、山麓の林など、乾燥して開けたところを好む。樹木が点在する村落や市街地に多い。十勝では基本的に夏鳥。

分布：中国、朝鮮、モンゴル、ロシア極東南部に分布する。

日本では全国に留鳥として年中生息。九州南部や沖縄では多くない。

北海道では3月中～下旬に渡来、繁殖する夏鳥だが、道央や道南で越冬するものが増えている。農耕地、農耕地内の林、住宅地、公園などに生息するが、山地の森林にはほとんどいない(藤巻、1998)

十勝には、3月中～下旬に渡来、繁殖する夏鳥。平野部の農地周辺、人家周辺の林に生息。住宅地で少数が越冬する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■
本州以南 (越冬期・通年)	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■	■

## 食性・他生物との関わり

雑食性で、動物質ではミミズや昆虫、両生類、植物質では穀物や木の実、果実など多岐にわたる。

芝地や畑などの地上を歩きながら採餌する。

秋に食べたネズミモチ、エンジュ、ヘクソカズラなどのみがペリット（不消化物がはき出されたもの）や糞の中から採集され、ムクドリが種子の散布を行っていることがわかっている。

ヒナには鱗翅類（ガやチョウ）の幼虫などの動物質の餌を与えることが多いという。一方でサクラ類の実を運ぶこと

もあるという。

捕食者は猛禽類など。



草場で餌を探すムクドリ

## 繁殖生態

繁殖期は3月下旬から7月、一夫一妻で繁殖するが、希に一夫二妻や一妻二夫となることもあるという。

営巣場所が分散しているつがいも分散して繁殖するが、営巣場所が集中すると半集団や集団で繁殖する。

なわばりは巣穴を中心に作られ、巣穴自体が守られる。

本来の営巣地は樹洞。つがいは巣穴の底に枯れ草や枯れ葉を敷き詰め、羽毛などで産座を作る。(→興味深い話の項参照)

4～7個産卵し、オスとメスが交代で卵を抱くが、夜間はメスだけが抱くという。

12～13日でヒナはかえり、約23日間オスメス共同で育てられた後巣立つ。

巣立ちヒナは親鳥とともに家族群で暮らし、約1ヶ月後に独立する。

## 興味深い話

■標識調査で、7年1ヶ月の生存が確認されている。

■人里の近くに棲む鳥。明るい林の樹洞に巣を作るが、家の隙間や巣箱もよく利用する。

■巣作りの際、産座の材料として羽毛の他に、セロハンやナイロン片も利用されるという。

■別の親鳥の巣に受精卵を産み付けて、育てさせる「種内托卵」が行われる。

■餌はなわばりの外で取り、通常100～500m離れた採食地まで出かけるという。

■繁殖期が終わると群れで生活し、北海道西部地域では数

千羽から数万羽のねぐら集団を作ることもあるが、十勝ではそれほどの大群となることはない。ねぐらに入る前に電線などに並んでとまり、にぎやかに鳴きかわす。



ねぐらに向かう前に電線に集まったムクドリの小群

## 配慮事項

都市周辺の環境に適応し、数を増やしている鳥である。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理学研究室 2000  
「野鳥ブックスー2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996  
「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995

「鳥類の繁殖戦略(上)」山岸哲 編、東海大学出版会 1986

「鳥のはなしII」中村和雄 編著、技報堂出版 1986

藤巻裕蔵 (1998) 北海道中部・南東部におけるコムクドリとムクドリの生息状況、帯大研報、20: 245-252.

橋口大介・上田恵介 (1990) 果実食者としてのムクドリ *Sturnus cineraceus* -“ペリット”分析の有効性- Strix、9: 55-61.

田原徹 (1974) 志賀高原に初めて繁殖したムクドリの雛の食物、信大志賀自然教研業績、12: 143-145.

黒田長久 (1957) ムクドリの調査、第2報 蕃殖(2)、山階鳥研報、(10): 413-426.

黒田長久 (1959) ムクドリの調査、第2報 蕃殖(3)、山階鳥研報、(13): 535-552.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葎原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ



# モズ

*Lanius bucephalus*

モズ科・夏鳥

## 名前の由来

多くの鳥の声を真似ることから「百鳥（ももとり）の声のよう」といわれ、これが転じてモズになったと思われる。また、百舌（ももした）からモス→モズと転じたともいわれる。漢字名：百舌



撮影：叶内拓哉

モズ（オス）。目を通る顔の線がくっきり

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(水辺)  
鳥類

(葦原・樹林)  
ワシタカ

## 特定種

該当なし

## 形態的特徴

全長（くちばしの先から尾の先まで）20cm。スズメよりはるかに大きい。頭が大きく尾が長い。

くちばしは太く、上のくちばしは鉤型に下に曲がっている上、先端に鋭い突出部やくぼみがあって2段の鉤となっていて、上下でしっかりかみ合うようにできている。

また、4本の足指のうち後の指が発達している。

オスの頭はオレンジがかった褐色、背は青灰色で翼は黒い。顔にはくちばしの付け根から眼を横切る太い黒帯がある。眉のような白い模様も目立つ。下面の脇はオレンジ色。翼は黒くて白い点がある。

メスは頭から背中が褐色。顔の太い帯は褐色がかって淡く、顔から体の下面にかけて褐色の細い波のような横線がたくさんある。

声：秋に「キィーキィキィキィ」と高鳴きをする。繁殖期には大きな声でのさえずりはせず、「ジュンジュンジュン、チュピリリ」などと小さな声で複雑な声を出す。

地鳴き（さえずりではない普通の鳴き方）では「キィー」「キキッ」「ジュン」などと鳴く。他の鳥の鳴き真似もする。

飛び方：短距離の場合には地上低くを飛ぶことが多く、スーッと直線的に飛んで、杭などにフワッととまる。

長い距離を飛ぶ場合には、羽ばたきと翼を閉じての滑空を

繰り返す、波のような飛行曲線を描く。

類似種と区別点：チゴモズ、アカモズ、オオモズ。

チゴモズは背が褐色。

アカモズは顔が白く、頭から背中、尾までが赤褐色。

オオモズは大きくて上面がすべて灰色、尾羽の外側が白い。



モズのオス。頭が茶で背が灰色



モズのメス。顔の線が淡い



オオモズ。頭と背が灰色



アカモズ。頭も背も尾も赤褐色

## 生息環境・分布

農耕地周辺、高原、林縁、川原など、低木のある開けた環境で繁殖する。十勝では夏鳥。

分布：サハリン、ロシア沿海地方南部から中国北部、朝鮮半島に分布する。

日本では全国に留鳥として年中生息する。

北海道では夏鳥として繁殖し低地から山地まで見られる。道東、道北では少ない。まれに越冬するものがある。

十勝には夏鳥として4月上・中旬に渡来、繁殖する。農地、河川敷、幼齢人工林などに生息する。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期				繁殖								
本州以南 (越冬期・通年)	繁殖											

## 食性・他生物との関わり

昆虫やミミズ、カエルやヘビなどの両生・爬虫類、鳥類、ネズミなどの小哺乳類も食べる。

捕食法としては、枯れ枝などにとまって地上を探し昆虫に襲いかかる方法、土中のミミズや草むらの昆虫を探したりほじくったりする方法、小鳥を襲撃して捕らえる方法、トンボなど空中を飛ぶ小昆虫を捕らえる方法、などがあるという。

## 繁殖生態

繁殖期は4月中旬～7月(越冬する地域では2月下旬から)、一夫一妻で繁殖する。

つがいは、越冬地域での例になるが、メスがオスのなわばりを訪れ、メスが選ぶことでできるという。(→興味深い話の項参照)

巣は低木や藪の中に、小枝、枯草などを用いてお椀型に作られる。巣はオスメス共同で作られるが、オスが主に外装、

秋から冬にかけては獲物を木の枝などに串刺しにする「はやにえ」の習性がある。(→興味深い話の項参照)

餌中の骨やキチン質などの不消化物をペリットとして吐き出す。

カッコウに托卵されることがある。

捕食者は猛禽類など。

メスが主に内装と産座、という分担があるという。

3～6個産卵し、メスだけが卵を抱いて、その間オスはメスに給餌するという。

14～15日ヒナがかえる。オスメス共同で給餌し、約14日でヒナは巣立つ。

巣立ち後も15日以上家族で暮らすという。

## 興味深い話

■標識調査で、8年1ヶ月の生存が確認されている。

■ワシやタカの仲間ではないが、ガッシリして鉤型に曲がり鋭くとがったくちばし、後ろ足指が発達した足、動物食であること、採餌形態、などから小型の猛禽ともいわれる。

■捕らえた昆虫やかえるなどを木の枝や鉄条網などにさして「モズのはやにえ(早贄)」を作る習性がある。理由としては本能説、食べ残し説、貯食説などいろいろ言われているが、結論は出ていない。

■越冬する地域での観察例になるが、つがいはメスがオスのなわばりを訪ね、メスが選択してできるという(山岸、1981)。訪れたメスに対して、オスは初めは追いかけ回しや攻撃を行うが、メスの定着に伴って求愛ダンスを行うという。求愛ダンスはオスが体を伸ばし、顔の黒い線をメスの前で左右に振るといふもの。求愛ダンスをする間にオスは不明瞭な鳴き方をするが、ウグイスやホオジロ、ヒバリなどの鳴き真似も挿入されるという。

■つがいができると餌をねだるメスに対してオスは求愛給

餌を行うという。

■一夫一妻といわれているが、婚外交尾もあることがDNA指紋法によって明らかにされている(唐沢、1982)。同じ巣に育てても、10%程度の割合で、他のオスの血を受けた子どもがいるらしい。

■カッコウに托卵されることがある。

■日本全体では留鳥だが、北海道など北日本のものは冬になると暖かいところに移動する。その際、オスの方が寒いところにとどまる傾向が強いという。



モズのはやにえ。  
ドロヤナギの冬芽に  
突き刺されたスズメバチ

## 配慮事項

昆虫や両生類が生息し、とまり場や営巣場所となる低木がある、多様な環境が必要である。

### 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)  
「原色日本野鳥生態図鑑(陸鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000  
「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994増補版7刷)  
「図説 日本鳥名由来事典」菅原浩・柿澤亮三 編著、柏書房 1993  
「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所、1996

「北海道の野鳥」藤巻裕蔵・小堀煌治、北海道新聞社 1997  
「十勝と釧路の野鳥」日本野鳥の会 十勝支部・釧路支部、1987  
「名前といわれ 日本の野鳥図鑑① 野山の鳥」国松俊英、偕成社 1995  
「モズの話」唐沢孝一、北隆館 1980  
「鳥のおもしろ私生活」ビッキオ 編著、主婦と生活社 1997  
「モズの嫁入り」山岸哲、大日本図書 1981

唐沢孝一 (1982) 育雛初期におけるモズの捕食行動. 鳥, 31 : 57-68  
倉田篤 (1967) モズの社会機構、特に繁殖期におけるなわばり制について. 鳥, 18 : 153-164.

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種)  
草花

(外来種)  
草花

哺乳類

(鳥辺)類

(葎原・樹林)  
鳥類  
ワシ・タカ

# ヤマセミ

*Ceryle lugubris*

カワセミ科・留鳥

## 名前の由来

平安時代までカワセミのことをソビ、ソニといい、それが転じてセミとなった。山の溪流や湖などにすむ山のソビ(=セミ)であることからヤマセミという。

漢字名：山翡翠



ヤマセミ (円内も)

(イラスト：タカダヒロキ)

## 特定種

北海道レッドデータ：希少種 (R)

## 形態的特徴

全長(くちばしの先から尾の先まで) 38cm。カワセミ類中日本では最も大きく、ぼさぼさ頭のような長い冠羽が目立つ。体の上面は黒白の鹿の子まだらで下面は白く、オスでは胸に黄褐色の帯と黒い斑点があり、メスでは黒班が帯状

にある。

声：飛びながら「ケレケレ」とか「キャラ、キャラ」と鳴くことが多い。

## 生息環境・分布

山地の溪流や湖沼に生息する。

分布：カシミアル、アッサム、ミャンマー、インドシナ半島、中国南部、朝鮮半島に分布。

日本では北海道から九州の各地で留鳥か漂鳥として生息。

北海道では留鳥。繁殖する。河川の中・上流部、山間部の湖沼に生息する。冬には下流部の小河川にも飛来する。十勝地方では留鳥で、主に十勝川水系の山間部の溪流に生息する。

## 繁殖生態

繁殖期は3～8月。一夫一妻。

土質の崖にオスメス共同で横穴を掘って営巣する。

春に4～7個の卵を産む。抱卵日数は約20日、オスメス交代で行う。

代で行う。

育雛もオスメス共同で行い、32～36日でヒナは巣立つ。

## 興味深い話

■枝にとまって待ち伏せたり、空中でホバリング(停空飛翔)した状態から水中にダイビングして魚を捕らえる。その際に自分の羽毛を落とし、疑似餌として魚をおびき寄せるのに使うことがあるらしい。

■抱卵はオスメス共同で行うが、オスの方が多く、夜もオスが抱くという。

■十勝地方のアイヌ語では「アイヌサチリカムイ」という。

## 食性

5～20cmぐらいの川魚、カエル、サワガニ、昆虫類などを食べる。

## 配慮事項

繁殖には切り立った土壁が必要。

## 生活サイクル

	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
十勝出現期												
					繁殖							

## 参考文献

「山溪カラー名鑑 日本の野鳥」高野伸二 編、浜口哲一・森岡照明・叶内拓哉・蒲谷鶴彦 著、山と溪谷社 1985 (1995 2版21刷)

「原色日本野鳥生態図鑑(水鳥編)」中村雅彦・中村登流、保育社 1995  
「北海道鳥類目録改訂2版」藤巻裕蔵、帯広畜産大学野生動物管理理学研究室 2000

「野鳥ブックス2 フィールドガイド日本の野鳥」高野伸二・谷口高司・森岡照明・叶内拓哉、(財)日本野鳥の会 1982 (1994

増補版7刷)

「増補改訂版 日本鳥類大図鑑 Vol. I」清棲幸保、講談社 1978  
「北海道の希少野生生物 北海道レッドデータブック2001」北海道 2001

「知里真志保著作集 別巻I 分類アイヌ語辞典 植物編・動物編」知里真志保、平凡社 1976

魚類

底生動物

両生類  
爬虫類

トンボ

チョウ

樹木

(在来種) 草花

(外来種) 草花

哺乳類

(水辺) 鳥類

(草原・樹林) 鳥類  
ワシ・タカ